

学長 太田耕造先生 講説

# 自助協力

亜細亜学園学生に与う

亜細亜大学  
日本経済短期大学

# 自助協力

亜細亜学園学生に与う



## 刊行の辞

われらが学長太田耕造先生は、夙に建学の精神を「自助協力」と明示し、本学設立の使命は「日本および亜細亜の文化社会の研究と建設的実践に重点を置き、もつて亜細亜融合に新機軸を打ち出す人材を育成する」ことにあると宣言されたのである。

爾来今日に致るまで、この精神と使命を高くかかげて、時に応じて学生に語り、折にふれて教職員に示されたものは、格調高き憂国警世の言葉であり、はたまたアジア融合への情熱をこめた文章であつた。

先生は、昨春来、病氣ご療養中であるが、病床にあつても、たえず大学のことをご心配になられ、日々我々に語りかけておられるように感ずる。

今年創立四十周年に当たり、その記念事業の一つとして、先生のご講説になられた数多くの文章の中から、特に重要と思われるものをいくつか選び出して、年代順に編集して、ここに刊行するしだいである。

先生の書き記されたものを繙くことは、現時局下、われらに課せられた務めかと考える。こいねがわくは熟読されんことを。

(昭和五十六年三月十六日記)

学長太田耕造先生講説集編集委員会

委員長(学長事務取扱・理事) 武部 啓



# 目次

刊行の辞	3
亜細亜大学学則第一条	15
亜細亜学園設立趣意書	16
建学の精神	18
本学の建学精神について	20
学問の登山みち	23
回顧と展望	25
学園祭に憶う	28
本学志望の学徒に寄す	30
アジアの広場に立つ	32
ポール・リシヤルのこと	35
—アジア祭に寄せて—	

新春に希望の光を見る……………	37
すべからく自助の人たれ……………	40
——卒業生に与う——……………	
われらの建学精神……………	43
静和のころを思う……………	45
アジア祭は亜細亜大学の夢の祭典……………	47
建学の本旨……………	49
日本再興の偉大なる使徒を憶う……………	51
うるわしき女性像……………	54
歴史の真実を見究めよ……………	58
——明治百年記念特別連続講座について——……………	
一姓の民と日本の歴史……………	61
明治維新の革新原理を憶う……………	63
建学精神の体得者たれ……………	65
指導者の教養——経史の学——……………	79

次代を背負う若人たちの動力……………	86
―亜細亜学園の建学精神に思ふ―	
「大学問題」に関する基本方針……………	88
教育は国家最大の関心事……………	90
次代を背負う若人たちの動力 心田を拓く自助協力精神……………	93
敢て諸君に期待する……………	96
新時代の先駆者たれ……………	98
研究のこころと理想像……………	101
国土に花咲いた民主主義の匂り……………	103
教育と情報社会とのコミュニケーション……………	105
洋上大学の壮途に銭す……………	107
現代に体育の重大性を憶う……………	109
自己の心田を耕作……………	112
―昭和四十六年度入学式訓辞―	
70年代に当面する教育の重大使命……………	117

戦時終了の未決算に思う……………	119
— 諸君に期待する、独立日本の柱石たれ —	
教育の本流に棹さして上らん……………	121
教育と環境との関係を思う……………	124
大学教育と寮生活……………	126
— 昭和四十七年度学寮委員研修会訓話 —	
大学の使命観に就て思う……………	135
大望を抱くべし……………	137
— 昭和四十八年度入学式訓辞 —	
自助協力してわれらの進路を拓かん……………	143
日本復興の動力うごく……………	145
— 新入生諸君に期待すること大なり —	
学園に活かす郷土精神……………	148
新時代の生命が躍動する……………	150
転換時代に立つ大学の使命を思う……………	152

復興アジアの黎明期に思う……………	154
時流の重大化に鑑み教育の使命を思う……………	158
音楽は「まこと」の表現……………	160
第五回学術文化連合祭に思う……………	162
大望を抱く青年たれ……………	163
——昭和四十九年度卒業式訓辞——	
学友会の本来的使命を思う……………	169
時代に羽撃く学徒の夢を思う……………	172
備えあれば憂いなし……………	174
——昭和五十二年度入学式訓辞——	
自主独立精神の維持昂揚……………	180
——昭和五十二年度卒業式訓辞——	
至誠篤実の人たれ……………	187
——昭和五十三年度入学式訓辞——	
国運進展の活路を憶う……………	193

太田耕造学長の略歴.....196

終戦の詔書渙発に際して（太田耕造文部大臣談話）.....198

あとがき.....200





学長 太田耕造先生







アジア祭の展示をご覧になる太田学長



## 亜細亜大学学則 第一条

本学は、学校教育法の定めるところにより、  
広く一般教育に関する知識を授けるとともに、  
深く専門の学術を研究教授するをもつて  
目的とし、特に、日本および亜細亜の文化社  
会の研究と建設的实践に重点を置き、もつて  
亜細亜融合に新機軸を打ち出す人材を育成す  
るを、その使命とする。

## 亜細亜学園設立趣意書

昭和二十九年八月、学校法人亜細亜学園理事長、日本経済短期大学学長として、亜細亜大学の設立に奔走され、その際記されたものである。――『亜細亜学園教育施設拡充基金募集趣意書』より――

アジアの黎明期である。アジアの独立と自由と協調を告げる鐘の音が、アジアの全域に鳴り渡っている。正に全アジアは、門戸を開放し、通路を清掃して相互に、隣人交歓の至情を披瀝すべき秋である。

若し、自由アジアが誕生して、全アジアの民人が相擁して、文化交流、経済合作を計ったなら、アジアは、必ず勃興しよう。日本も必ず復興しよう。而して、世界情勢は必ず一変する。

既に、計画の端緒は開かれている。即ち、亜細亜学園に於ては、本年一月以来、アジア各地域に在住する有力華僑の子弟九十九名を収容して、文化交流を計っていることである。我が教育史上空前のことで、正に画期的計画である。尚、留学生は今後も毎年収容される予定であり、既に新入学希望者は、相次いでいる。

亜細亜学園は、その建学精神に基づき、日本及びアジアの文化経済の研究と実践につき、多年に亘り多少の貢献を致してきたが、此の度の計画を契機として、志業を拡げ、計画を整備しようとして決意した。

一、亜細亜学園経営にかかる日本経済短期大学（旧興亜専門学校）の大学教育を更に向上充実せしめて、亜細亜大学を建設し、その特色、使命を強く発揮せしめたい。

二、アジア各地の教育機関と緊密の連絡を計り、アジア連帯、アジア協同体制への基礎工作に努めたい。

三、現在亜細亞学園に収容中の上記華僑子弟は、思想、学力、健康共に頗る優秀で、その教育完成は、実にアジア融合の中核を作ることになる。教育の責務重大である。若し、教育の成果上達し、アジア精神の成熟も期し得たなら、アジア各地に散在している有力父兄も亦、<sup>また</sup>その子弟と協力して、平和的經濟力を動員し、以て黎明アジアの建設に、巨歩を進めることになろう。

# 建学の精神

昭和三十年、亜細亜大学の設立が認可された。本稿は、太田先生の建学精神に関する最初の論述である。―昭和三十年度『大学案内』所載―

本学は塾教育から発足し、昭和三十年四月を迎えて十六年の歳月を閲<sup>けみ</sup>している。其<sup>そ</sup>の建学精神は「自助協力」にあり、前身を興亜専門学校と称し、更に日本経済短期大学と改名したが、一以て之<sup>これ</sup>を貫きたるは、日本の伝統と全アジアの復興を強く念願して、之を建学精神に裏づけて教育し来ったことにある。「自助」は独立に通ず、独立は自己能力の認識また試験で研学精神唯一の拠点となる。而して「自助」のあるところに真理映ゆ、「協力」の生ずる所以である。

本学卒業生多数は、日本再建のための有力分子として、現に四方に活動しつつあるが、曾て其の諸先輩は、アジア大陸にまた南方諸地域に雄図を抱いて馳驅奔走したる歴史をもち、その諸先輩の幾多勇魂をも彼方に留めている所以であると思ふ。

今や竟にアジアの黎明期が来た。アジアの独立と自由と協調を告げる暁の鐘はアジアの全域に鳴り渡っている。正に全アジアは其の響に応じて門戸を開放し、通路を清掃して、相互に隣人交歓の至情を披瀝すべき秋である。若し自由アジアが誕生して、全アジアの民人が相擁して文化交流、経済合作を計ったなら、アジアの市場は共

通となり、生産は協力化され、関税は自由となり、やがてアジアは勃興し、日本も復興し、而して世界情勢は必ず一変する。

亜細亜大学は以上の認識と情勢実現のため、重大使命を担って建立されたものであるが、所謂大学教育の内容については、特に留意して刷新充実し、転換時代の教養に対しては万全の努力を払う所存である。けだし学生の視野を拡大し、研學に生氣を充滿せしむることは、学生将来のために計っても当世第一の急務である。

本學には別に中国留学生部を設けてあるが、既に多数の優秀卒業生を出し、その後続の留學生をも含めて現に潑刺たる、文化的國際交通路を拓いている。本學は、本學に學ぶ學生諸君の明識に期待すると共に、諸君のため最善を尽くして専門的知識と人格向上の場たることを深く期している。



# 本学の建学精神について

—『亜細亜学園新聞』第二号（昭和三十一年六月三十日付）掲載—

本学の建学精神は入学案内にも明記されているが、「自助協力」である。

「自助」は独立と相通じ、自己能力の認識ということから出発するもので、自ら自らを助けることを意味し、真理の別面でもある。

一八五九年、サムエル・スマイルズは『自助論』を著して、正直と勤勉が立身出世の根本であることを説いたが、この著書は一八七一年即ち明治四年に我が国で中村正直という学者が、『西国立志編』と銘打って翻訳出版している。

西諺に「自助は最上の助け」とあるが、自助精神のないところに独立なく、独立精神のないところに学問研究の精神は湧いて来ない。

しかし「自助」ということは互助ということと表裏するもので、互助あって自助も生きて来る。集団安全保障体制の主唱者として有名であったアメリカ上院議員のヴァンデンバークが、体制の前提を「互助と自助」に置いたが、このことは独立ということにも適用されるもので、独立は相互独立ということあって真の意味を解し得る。

本学に学ぶ学徒諸君は、よく本学の建学精神を了解して学問研究への一筋道を直進するとともに、諸君相互間

に於ても自助による協力の美風を挙げて、学生生活の楽しい思い出を作り出されることを切望してやまない。

本学は、外観、設備に欠くところ多く、未完成どころか村塾そんじゅくの昭和版の観があつて、学徒諸君に対し気の毒の至りと思つてゐる。しかし、本学はその外観、設備の充実に懸命の努力を払つてゐる一方、学徒諸君の協力を得て、学問の「場」の何たるかについて、独自の「学風」を打ち立てたいものと期してゐる。

インドネシアのスカルノ大統領は五月十八日、アメリカ新聞記者クラブの招待席上で、西欧諸国がアジア及びアフリカの民族主義を了解すべき必要性を強調し、またアジアの擾乱じようらんの原因は植民地主義にありと警告して、内外の注目を惹いた。

彼は言う、民族主義と植民地主義の何であるか、アジアに「来り、而して見よ」と。アジアに於ける民族主義と反植民地主義の運動は彼も指摘してゐるやうに、全人類が渴仰かつじやうしてやまない「自由」による団結が達せられる日まで続けらるることであらう。そしてこの運動の狙いねらいは、学問の分野をも含めての一切の唯物至上主義からの解放にある。

所謂いわゆる西欧文明の没落が叫ばれて来たのも久しい話であるが、人間の知恵も案外に浅いらしく、所謂高度文明の内部疾患で自壊自滅作用を招いてゐる事実に対し、どうにも制し得ない有様である。

五月十九日に閉会したアメリカ及びアジア文化指導者会議は声明書を發し「アジア人はアジアに於けるアメリカ人の技術援助は歓迎するが、アメリカ流の享樂追求は希望しない」との意思表示をした。これは昨今流行の機械化時代の經濟が産んだ飲酒、離婚、少年犯罪、性生活の腐爛ふらんなどを指したものであつた。

道德破壊から来る社会現象にはいろいろあるが、国家破壊を意図する浸透作戦の世界革命戦略もその反映である。

学問が外観、制度、形式の完備にのみ魂を奪われて、精神喪失の危機にさらされているのが傾向のようである。

## 学問の登山みち

——『亜細亜学園新聞』第五号（昭和三十二年六月十七日付）掲載——

中国の一学者は「学は山に登るが如し、登りて益々高し」と言った。当世の学風を戒めている観がある。学問というものは山に登るようなもので、進めば進むほど益々高くなり、登れば登るほど下界が拡まって視野が雄大になってくることを語ったものである。

一知半解といわれるものがあつて、物知り顔をして世の中を通っているが、本当の事が解らず、とんだ恥晒しの場面にぶつかることが少なくない。高山に登る快味は忘れ難いと言われている。高山に登るには、先ず謙虚な心持ちと周到な準備が必要であるが、学問の道に志す人も先ずへりくだるを以て基とすべく（貝原益軒の言）それから周到の上にも周到の研究、準備を積むべきで、雲上に聳ゆる高山に登るほどの人なら、果てしない自己反省を繰り返しながら精進の道を辿って行く事、必至である。

学問の道は孤独の道でもある。自己独自の確信を得るための道であるから無批判的、盲目的、安易な順応主義の学風は最も軽蔑さるべき俗習であらう。それについて近頃の面白い現象は、毛沢東の放った所謂「百花齊放、百家争鳴」の騒動である。毛沢東は本年二月二十七日と三月十二日の二回に亘り、中国共産党の黨員に対し秘密演説を行っているが、その大要と称するものが四月十三日の人民日報に掲げられた。その骨子はこうだ。

社会主義社会の発展過程に於て、いろいろな矛盾が起こる。人民大衆とその指導者間の矛盾もその一つである。それでは、なぜ矛盾が起こるかと言えば、指導者たちは人民の不平に耳を傾けないからだ。反対意見を圧迫するからだ。よつて人民は大胆に自己の意見を發表すべし、これによつて処罰されるべきではないのである。毛沢東の戰略的肚裡はともかくとして、もともとレーニンはマルクス弁証論について事物の本質内における矛盾を究むべしと教えている。

しかし、その所謂矛盾論は所謂資本主義、民主主義社会における自己破壊の原理として高唱せられて来たものであるから、共產主義社会にもこの矛盾論が適用されると言われたので、共產黨員は今更のようにビックリ仰天してしまつたわけで、その波紋は底知れぬ有様となつて来た。特にその影響は東欧に於て深刻化しているようである。毛沢東の演説大要は、四月十五日にプラウダに掲げられているとのことであるが、これについてロシア側からは批評も出ていない。事実モスコフ政權は、一九一七年のクーデターの成功以来、共產国家には支配者と被支配者との間に矛盾なしと公言し来つたので、毛沢東演説に対し、今後どう対処するかは興味ある問題となつてゐる。

しかし、この種の現象を観ることは学問の世界では当然のことで、敢て取りあげるに足らないが、当世の流行学風が自己陣營の形勢不利を見て、例により「黙殺」戦術に出ている方がよほどの珍現象である。真理に矛盾なし。学問は真理を究むるのが目的であるが、その方法として自助と協力が大切だと思う。亜細亜大学の建学精神が特にこれを示していることについて、学生諸君の一段の考慮を煩わしたい。

## 回顧と展望

昭和三十二年六月、中国留学生部（現留学生別科）の一期生から四期生までの百四十四名が日本語・中国語の文集を発行して各界の注目を集め、総理大臣、文部大臣からも祝辞が寄せられた。——中国留学生部学友会編『来日三年』所載——

「はじめて雪というものを見た」一期生の先発グループは、あの日の大雪の歓迎で、こう語り合ったと思う。一九五四年一月二十五日、元気な九十九の顔が、近年に稀な大雪を衝いて、香港から東京にやって来た。一行は、明治神宮外苑の日本青年館に二泊した後、二十七日朝、東京の郊外の武蔵境駅に到着、駅の前で武蔵野市民の歓迎を受けてから、亜細亜大学留学生寮に入ったのである。

ピチピチと跳ね回る仔犬のように、校庭を駆け巡ったり、雪合戦に興じ合ったりしたのを見たのが、つい昨日のように思われるが、あれからすでに三年が、夢のように過ぎ去った。光陰矢の如し、とはよくも言ったものである。今では、日本語も上達、専攻学科の研究も進み、身体は健、志望は大、諸君の学生生活の発達を見て、私はこんな嬉しいことはないと思っている。

亜細亜大学は、全アジアの抱いている共通の夢が、化体して出来上がったものである。夢というのは、教育を通して全アジア人が、交友、融合しあって、よりよい共通の生活をなし、共同の運命を担うことである。

アジアの共通した特徴は、極端な貧乏、無学、恐るべき生活水準の低下、猛烈な流行病、独立に対する強烈な欲求であると言われているが、これらのどの一つを取って見ても、その改善と実現は容易な業ではない。しかし、この難事業を克服して、全アジア人の抱いている大いなる夢を実現せしむるためには、全アジア人が、割拠主義を打破して、虚心坦懷になり、文化、経済の共通の広場を作る必要がある。

欧州では、多年の宿題であった欧州統合の夢が、着々と実現しつつある。すなわち、共通の市場をはじめとして、関税、通貨、資源を共通にしようという難問題が、解決の途上にあるが、永く統合の癌であったイギリスも、この大勢には抗し難く、昨年十一月、現首相マクミランが蔵相の時に、イギリスとコモンウェルスとが、フランス、西独、イタリアとベネルクス三国で出来ている西欧六国との間の利害の調節案を議会に提出して、大綱を明らかにした。

現代は、原子経済時代と言われているが、この新時代の原子経済には、各国の協力が必要条件で、共通の市場を有つことが、その主要条件である。また、オートメーションの問題についても、同じことが言える。オートメーションは、生産の増大を来すので、経済地域の大規模ということが、前提となつて来る。若し、各国が高い関税率による保護政策を取つて、市場の制限を行うことになったら、オートメーションによる生産の増大は、不可能とならう。

人類の進展という事は、世界の大勢に逆行しては、期待し得ない。アジアは、後進国として、また青年国として、その産業開発のため、外国からの長期の借款、技術援助、専門家の訓練など、いろいろの援助を受ける必要があるが、これら外国からの援助は、政治的ヒモつきでないこと、慈善的な好意でないことが先決で、受ける側に於ても、自らの負担は自らの手で返済すべき覚悟が要る。

欧州統合の目的は、米ソの二大ブロック陣営からの圧力に対抗するための自衛手段から出たものであるが、世界の平衡化、水平化という大勢に動かされた結果でもあらう。アジア人の自覚と擡頭も、世界のこの主潮に乗ったものであるが、その進路を、正しく取るべきことの責任のあることも、忘れてはならない。全アジアの同胞に、この道標を明示して、独立精神とともに、相互に協力を惜しまない善隣友好の渾一精神を、アジアの各地に浸透せしむべき必要がある。

このことは、政治、外交による努力に負うことの外、文化、教育を徹底することによって、ヨリ純潔に、ヨリ根本的に目的を達し得るように思う。亜細亜大学の抱いている夢は諸君の抱いている夢である。



## 学園祭に憶う

—『亜細亜学園新聞』第十二号（昭和三十四年十月二十一日付）掲載—

秋は文化の開化季節である。学園祭もシーズン期に行われる学生行事の一つで、学生の創意工夫で案出されたいろいろな催物が多彩に繰り上げられるのを見るのは楽しいものだ。

漱石の『三四郎』に出て来るような運動会風景は今では古典化したようだが、それでも学生特有の「お祭り」気分は生き生きと発散しており、河童天国ではないが、奇智縦横の見事な演出振りを見せている。「学園」は学校を前提としているが、学校よりもっと広い内容を持つもののように思う。学校よりは多様な場の協力体であるといってもよい。

学友会が設立されているのはその好例であるが、運動部とか、文芸部とか、弁論部とかの活動がその下で行われていることは、周知のとおりである。学生は学園生活を通し、広い文化的、社会的協力者としての経験を得る機会に恵まれる訳であるが、それだけに学生生活のあり方についても深い反省が必要であると思う。運動競技について見ても明らかだが、上古ギリシャのオリンピックにての開催目的は、単に物見遊山気分を狙ったものでなかったようである。ギリシャ諸族、各植民市がこれに参加したのは、これによって民族の統一とか、文化の発達に貢献し得たからであった。弁論討論しかり、文芸芸術しかり、これらの競演公開も、また、民族精神の作興を計り、

文化交流の刺激を与え得たからである。

学生の学園祭もかつて見られたようなコミック、スポーツ類の慰み本位の一边倒に走ることなく、広い視野に立ち、高い教養を<sup>しめ</sup>偲ばしむるものにしたものである。しかしこれは学園祭が無気力、無節度、形式主義に流れてよいということではない。学生時代は人生行路の中で夢多い時代である。多感純情はその誇りである。この時代にその学生精神を喪失した学生があつたら、その学生は塩がその味を失つたようなものだ。何の価値もない、何の權威もない、かくて世は彼を棄<sup>す</sup>てるだろう。彼も自ら墓穴を掘ることになるだろう。エマーソンと記憶するが、<sup>なんじ</sup>汝の夢を星に繋げよ<sup>つな</sup>と<sup>な</sup>いった。

夢とか理想とか、希望ということは高いほど尊いのである。天上の理想を地上に実現しようとする希望、努力こそ大いなる夢だろう。この夢は当世流行の唯物主義者の夢とは違う。唯物主義者の夢は、唯物世界を支配することが精一杯である。この種の夢は、やがて同類の支配によつて破られ、去らしめられること<sup>ひつじよう</sup>必定だ。また、この種の夢のシーソーゲームは動物世界への逆行をも意味している。まさに文明の行き詰まりで、闘争哲学の自己清算でもあらう。

新時代の出現ともいわれる当代において、こんな低理想で真の新時代が来るものとは思われない。

学園祭に際して憶<sup>おも</sup>う。学生諸君の描く次代への設計図表はどんなものか。

## 本学志望の学徒に寄す

—昭和三十五年度『大学案内』所載—

本学の建学精神は「自助協力」の四字に在る。「自助」は自主独立の動力であつて、「協力」は相互援助ということである。個人でも国家でも、自主独立の精神があつてはじめて相互援助があり、自主独立の主体性確立といふことがないならば、相互援助はあり得ない。このことは、学問研究の分野についても言われ得るものと思う。学問に志すものは、あくまでも自主独立の精神に拠るべきもので、いやしくも時流にこびたり、外力に便乗したりということがあつては、良識喪失の好例となる。これでは学問の權威なく、学問の自由交流、相互援助もあり得ない。また、人格形成という大事は、全く期待し得ないだろう。思うに、このあたりに現代教育の危機が伏在しているかに見える。

本学に学ぶ学徒は、この建学精神を身につけて、一念万年、以て国家有用の材となるよう成長してほしい。また、さらにこの精神を拡大して、日本およびアジアの興隆に寄与してもらいたいと思つている。本学は、この建学精神にのつとめて広くアジア各地との経済的、文化的交流を計るため、青年学徒および教授の相互交流によつて、日本およびアジアの新情勢に対処し得る万全の態勢を進めている。現に、本学と香港第一流の大学である新亜書院との間には、交換学生制度の壮挙が開始されており、近くまたシンガポール、マラヤ、中近東各地との間

にも、雄大活発な計画が進められている。

かくて、志操高き幾多の堅確<sup>けんかく</sup>有為<sup>ゆうゐ</sup>の人材が続出し、夢を星<sup>つな</sup>に繋いで内外に活躍し、日本とアジアの進展のための偉大な使命達成に献身されんことを期待してやまない。

## アジアの広場に立つ

この文は、亜細亜大学新聞会が、英語・中国語に翻訳して同時に発表した。翻訳は文末に掲載してある。

『『亜細亜大学新聞』第十八号（昭和三十六年十月二十五日付、『亜細亜学園新聞』が改題）掲載—

亜細亜大学の建学精神は「自助協力」にあるが、この建学精神は、また復興アジアの建国精神にも通ずるものがあると思う。

大東亜戦争で日本は敗れたが、戦争の跡から、アジアだけでも十余の独立国が出現した。そしてこれら独立国の共通現象は、民族主義の澎湃たる勢いであつたが、この現象は、今日もなお支配的である。この形態は、排外主義と排外主義との混在であるが、そのいずれに偏しても、純正な民族主義の発展を妨げ、その混在もまた、結局において民族主義を冒瀆すること明らかである。

西欧植民地主義は「分割統治」と「間接統治」の二原則を巧みに利用して、植民地支配に徹したので、いわゆる民族主義が反動化して来たのも無理はない。また、植民地経済は「従属経済」で、支配本国の経済目的に従属した偏倚生産が、土着民に強いられて来た。かくて現住民は、今日なお底知れぬ貧窮化から脱し切れない有様である。いわゆる排外主義、他力主義に走るといふことも同情にたえない。

しかしながら、時代は正に大いなる転換期を迎え、アジアの天地にもすでに、復活の曙光が射している。国家

創造という大業は、民族精神の躍動なくしては成功し得ないこと明らかだ。民族の「自助」精神がこれである。而して、この「自助」精神が民族に充滿し、民族相互にこれを認識し合つて、はじめて「協力」による共通の広場が生まれる。「アジアは一つ」の実現もこうしたことで期し得られるものと思う。

アジア祭は、アジアの祭典である。友情と善意の広場に立つて、心ゆくばかりアジアの融合<sup>こんごう</sup>渾一<sup>こんいつ</sup>のための前途を祝し合ふべきである。この心はやがてまた「世界は一つ」への通路でもある。

## 站在亞細亞的廣場

亞細亞大學長  
太田耕造



亞細亞大學の建學精神、  
就是在「自助協力」。我  
認爲這種建學精神又是通

於復興亞細亞的建國精神。第二次大戰後，只是在亞洲已經出現了十多個獨立國家。這些獨立國家的共同現象具有民族主義澎湃的氣焰，但這種現象在今天還是存在着。這個形態是排外主義和排外主義的混合物。假定偏重那一方都會妨害純正的民族主

義的發展。同時，很明顯其混合物到底也會是排外主義的。西歐殖民地主義巧妙地利用過「分而統治」和「間接統治」的兩個原則，貫徹了支配殖民地的緣故，所謂民族主義會反動起來的並不無理。殖民地經濟又是一個經濟，所謂「協力」的共通廣場。相信爲了實現「亞洲爲一」的理想應需要靠它才能達到的。

亞細亞大學新聞から

# ASIA'S NEW HORIZON

Kozo Ota

President of Asia University

The spirit with which the Asia University was founded is the spirit of "Self-help and Cooperation." This spirit, I believe, has something in common with the spirit in resurgent Asia to establish an independent country. Although Japan was defeated in the Great East Asia War, more than ten independent countries were newly founded in Asia alone from the aftermath of the war. A phenomenon commonly seen among the new nations has been the surging rise of nationalism. This phenomenon is prevalent even today. Nationalism in Asia has taken the form of a mixture of the tendency of exclusionism and the tendency to admire anything of foreign origin. Should nationalism lean too far toward either of these tendencies, however, the development of pure nationalism will be impeded. Moreover, the mixture itself of these tendencies cannot but ultimately debase the true spirit of nationalism. European colonialism cleverly utilized the two principles of "divide and rule" and "indirect rule" and the enforcement of colonial rule was thoroughgoing. Therefore, there is every reason for so-called nationalism to become reactionary. Furthermore, colonial economy was an "economy of subordination" and the native peoples were forced to engage in an unbalanced production

that only helped to serve the economical gains of the ruling country. As a result, even today, the native peoples are still unable to emerge from their fathomless pit of poverty. We cannot but sympathize with the native peoples for turning to exclusionism and adopting a trend of dependence on others. Times, however, have greatly changed. The early morning rays of reconstruction already shine on the peoples of Asia. It is clear that the great undertaking of founding an independent country cannot be successful without the help of a lively throbbing of national sentiment. This sentiment is the national spirit of "self-help." Only when the spirit of "self-help" is abounding in the different races and the races take mutual recognition of it shall the races be able to find a common ground of "cooperation." I believe that we shall be able to materialize our conviction that "Asia is one" through this self-help and cooperation. The Asia Festival is the festival of the Asians. From the standpoint of friendship and goodwill, we should mutually celebrate our future from the bottom of our hearts so that all Asians can be united as one. This spirit will also lead to the materialization of our belief that the "world is one."

亜細亜大学新聞から

# ポール・リシャルのこと

## ——アジア祭に寄せて——

—昭和三十六年十一月『第三回アジア祭プログラム』所載—

亜細亜大学がアジア祭を行うということは、私共にとって胸の高鳴るものがある。大東亜戦争で日本は敗れたが、世界は大きく揺れて戦の跡から幾十という新興独立国が出現した。アジアにおいても、十カ国余の誕生児を迎えた。かくして旧植民地住民は、大いなる「民族」の誇りをもつて世界の檯ひのき舞台に躍りあがり、国際的な新しいモラルを創造しようと大童おおわらわの活躍ぶりである。

今から四十五年前、即ち大正五年のことであるが、日本及びアジアの黎明れいめいに警鐘を強打したフランスの哲人ポール・リシャルは、その愛好の国である日本に來り、有名なる『告日本国』を草し、朝野に多大の感銘を与えたが、日本人のアジア観に対しこう告げている。

「アジアは、誠に天が諸君に与え給える活動の舞台である。希くはアジアの自由なる諸国を召集して、アジア連盟の実現に努めよ。アジアが自由を得るべき日は近づきつつある。アジアのうちに奴隷の国ある間は、他のアジア諸国も決して真に自由の国でない。アジアのうちに輕蔑を受ける国がある間は、他のアジア諸国も決して尊



敬を博することが出来ない。若し、諸君にして真に世界の尊敬を博せんと欲せば、他のアジア諸国をも尊敬せらるべき国とせねばならぬ。諸君は、アジアを救うことによって自らを救い、且、世界を救うものである。」

リシヤルさんのこの予言は、見事に的中したが、その日本及び日本人に対する忠告は、今もなお躍動し続けている。かくて、日本及び日本人の使命は、一段と重大さを加えて来た。亜細亜大学は、日本及びアジアの呼吸と脈搏をそのままに伝えて創建されたものである。アジア祭は、自由アジアの交流を喜び祝う、友情と善意の爆発であると思つ。

## 新春に希望の光を見る

—『亜細亜大学新聞』第二十六号（昭和三十八年一月二十一日付）掲載—

新春を迎えて祖国を憶<sup>おも</sup>う。また母校を憶う。さらに学友を憶う。お互いに身体強健にして精神剛壯、以て本年の門出に際し、かねての決意どおりに修養研究に一段の精神工夫を計り、雄図実現に万全の準備工作に努めたいものと思う。そうできたら素晴らしい年となること必定<sup>ひつじよう</sup>である。繰り返して言う。お互いに年頭にあたって、上記の覚悟をしっかりと吾<sup>われ</sup>と吾<sup>わ</sup>が心に極めておきたいものである。

新年の新聞や雑誌を賑<sup>にぎ</sup>わせた話題の一は例の人造り、国造りのことである。主唱者は人的資源の開発などという表現をして、実行の浅薄さを批判されたこともあったが、いろいろの言説を総合判断してみても結論は、人造りということとは人間形成あるいは品性造りということのように受け取られる。

首相が人造り、国造りということを事新しく提唱した動機は推察するに難くない。即ち戦後の世相の激変の中で特に著しいと見られるのは、道徳の退廃、国風の破壊であるから、これに對しその建て直しを計らんとしての試案であると思う。思うに人造り、国造りという問題は国家最高の政治問題であり、また人間最高の倫理問題でもある。別して戦後において然<sup>しか</sup>り。同時に国家興亡の根本問題であり、個人盛衰の根本問題でもある。国民の指導的地位に座すからには、それぞれに当然の任務として、これが対策の用意あり、これが実現の責任を持つべき

ことは多言を要しないことである。

一外字新聞はその新年号で世界における日本の地位について、日本在留の外人記者を集め、座談会を開いてその感想を収録した。かれらがおおよそ同意見として指摘したことは、戦後日本の急速な発展がその経済成長であるとしていることで、これは常識論、公式論として理解される。

しかしながらこの日本経済の急騰が日本国民全体としての勤勉努力と科学技術者の輝かしい実績、実業人の才能に依るものと断じ、これは政治的成功にあらずとして経済的成功であると評しているのが面白い。一記者はこれを解説して、日本の政界は日本経済のように安定せず、ハッキリせず、その原因として日本の政界には指導者たるの資格を持つ者、または経世家たるの資格を持つ者が欠けているためであると評している。

かくて日本政界のこの姿が世界政局に占むる日本の地位を薄弱ならしめている原因であると観ているのである。以上の言説に関連して思い出されることは、日本の対共産圏貿易の問題である。

アメリカなどは、日本の対共産圏貿易に対し頗る神経過敏であるが、濠州・カナダ・西独などの対共産圏貿易には寛大である。同じ自由主義陣営にありながら、何故こうも差別が行われているのか不思議な話であるが、彼の側から観れば一応の理屈があるようにも思う。即ちこれらの国々が共産主義国に対する思想的、政治的、軍事的立場は、ハッキリしており、自由主義世界の共同擁護に徹しているものと思っているからであろう。

しかるに彼等は、日本の対共産陣営に対する態度と自由陣営に対する態度との二つについて、二つとも頗る曖昧である。かくて日本は、その表白どおりに、政治と経済との分離が果たして出来るか。共産圏の政治的圧力で日本の貿易政策が腰くだけとならないか、この点、自由主義陣営が未だに猜疑の眼を以て日本を見ているのが現実である。要するに問題は、貿易以前のものにあるとの見方であるように思う。

英国のマクミランは昨年しかりの夏、反対党が、欧州共同市場に加入する問題で意をためらっている態度を昔の歌詞に比し、こう皮肉いっている。「彼女は然しかりといわない」、「彼女は否いなといわない」、「彼女は来るといわない、また行くといわない」と、如何いかにもユーモラスではあるが、厳しい切り込みぶりだ。

しかし、これは対岸の現象とばかりに片づけられない。わが立場を省みて歌詞に恥はじないかを自ら判断すべきである。いやしくも自由主義陣営の戦士なら、その戦士らしく、先まず自己の思想的立場を明白にしてこれが実績を示すべきであると思う。

亜細亜大学は、世界大転換時代に処すべきアジアの使命感に感応かんのおうして設立されたもので、アジアの文化、思想を復活強化し、この立脚地に立つて清新はつしん激烈たる融合世界の建立への雄図ゆうとを描いている。しかもこれが実現については、現時点に盛名を馳はせている、いわゆるお歴々に多くの期待をかけていない。かれらの立場は複雑で、その精神は枯死している。亜細亜大学は、眼を挙げて新世紀創造の大望に燃える青年学徒に希望の光を見るものである。青年学徒諸君は上述した言説の意味を汲み取ってほしい。

# すべからく自助の人たれ

## ——卒業生に与う——

——同窓会の機関紙である『青々会報』第二号（昭和三十九年二月八日付）掲載——

わが亜細亜大学は建学精神として「自助協力」を高く掲げていることは諸君の知るとおりである。この「自助協力」の精神は諸君の勉学研究の道標であったが、いまやこの精神は諸君に対し、社会人としての処世訓ともなる。

自己の進路の開拓者は誰れでもない。外ならぬ自己自身である。流行語の開拓者精神というのも実は自己に宿る精神力ということで、徒らに他力に頼<sup>いたす</sup>つては自己の新境開拓はついに期待し得ない。時代は刻々と新局面を創造し、寸時も停滞しない。かくていわゆる新境開拓の創造努力の精神が欠けているなら当然落伍<sup>おちおち</sup>し去ること明らかである。

開拓者精神は、事業界にも要求されて来たが、これが生ずる動力は自助精神であると思う。すなわち、自助あるところ開拓あり、開拓は自助の現われである。

自助は最上の助けであるという諺<sup>ことわざ</sup>がある。まさにそのとおりで悔のない処世はこの諺の実行で実現し得るので

あるから、しつかり心に留めておくべきものと思う。かくて頼もしい人間が出来る。お互いのつき合いというものが出来る。はじめて協力が出来る。

協力とは、いわゆる呉越同舟ということではない。表面だけの助け合いということでもない。お互の精神力が共鳴し、同調歩し得る信頼感が交響し得て実現するものである。

すなわち協力の先駆をなすものは自助であることを忘れてはならない。

この頃、頻りに後進国開発問題が外交の主要問題となっているが、好例を示している。

後進国への経済援助は、勿論重要問題であるが、被援助側が自助精神に欠けては援助は却つて仇となる。かくて経済援助が所期の目的を達することができないばかりでなく、被援助側の腐敗無能を助長して金の切れ目が縁の切れ目ともなり、援助側を怨む結果となる。

後進国開発による経済援助で、お互いの関係を協力水準にまで引きあげようとするのは、逆効果を産むことになつてゐる。そのことはいわゆる大国外交の破綻が雄弁に物語っている。

このことは、われわれの日常生活にも教訓を与えているものと思う。私は曾て欧米人の人物観というものを讀んだことがある。

先ずイギリスであるが、イギリス人は紹介されて来た人物に対してその人が如何なる人であるか、すなわち先ず人格を問題にするという。ドイツ人は紹介されたその人がどんな知識を持っているか、すなわちその人の知識学問を問題にする。フランス人はどんな試験を通過したのか、すなわちその人の才幹、能力を問題にするというのである。勿論こんな小話でそれぞれの国民性を批評することは当たらないが、この小話でも多少の傾向は打診出来るフシもある。

しからは日本人が紹介を受けたら対面するその人に対し先ずどんな点が胸に浮かぶというのか、まさかその人の背後勢力、すなわち当今流行のコネが先ず浮かぶというのではないだろう。人物、学力、能力はそれぞれにその人物に対して威力がある。而してこれらの総合力を身につけることが出来たら満点である。

しかもこれらの威力はいずれも「自助」すなわち自力で開拓し建設し發揮してゆくもので、他力本願では身につけ得ないものである。

いまや内外の動向形勢を見るとさながら乱世乱離の様相を呈している。まさに実力時代である。この動乱時代に処して甘いコネ、情実に基づいて身を立てようなど、夢想してはならぬことを俟たない。正々堂々と表裏から名乗りをあげて勝負を決する自信を養うべきものと思う。亜細亜大学卒業生諸君は任重く、道遠きことを想つて、自重自愛し将来の大成を期すべきである。

諸君の前途を慶祝して万歳を叫ぶ。

## われらの建学精神

—昭和四十年年度『学友会誌』（年一回新入生向けに発行される）所載—

「青年よ大志を抱け」ということばは、耳にたこの出来るほど聞かされて来たことと思う。このことばの意味は「望みを高く抱け」ということで、大志というのは将来成し遂げようとする仕事を、心のなかでしっかり決める精神をいうのである。永い人生航路のなかには、いろいろと苦勞も失敗もあるう。しかし、自らの心のなかで決めた仕事に精を出して、一路前進して迷うところがないなら、遂には成功の彼岸に達し得よう。これには高い目的を持つことが必要であり、これが成功の秘訣であると思う。小成に安んずるということは、目的が低いということ、これが失敗の原因ということになる。かくして、所謂墮落ということは、低目的から起こる生活状態であるともいわれ得る。偉人は「夢見る者」であるといわれている。彼は、常に胸中に大志を抱き、その仕事を計画し、遂に之を成し遂げた人である。かくいうと、青年は偉人に通ずるものがあるともいわれ得よう。かれも亦、つねに「夢見る者」であるからだ。ただし、ここにいる偉人というのは、必ずしも大事を為す所謂英雄豪傑という人たちを指すのではなく、寧ろ小事に忠実な人というのである。所謂小事に對する忠実が、積み積つて大事となるものであるが、これを敢て成し遂げた彼こそ眞の偉人と稱し得よう。

かくて小人はなまけ者、虚偽者、世間を誤魔化し通ずる者ということになる。偉人となるのは難しいものではな



い。自ら決めた仕事を、自らの手によって全力を尽して成し遂げるその人が偉人であるとのことである。これは、誠実を以て事に当たるといふことで、そのこと自身が偉大なのである。

われら亜細亜学園の建学精神は「自助協力」といふことであるが、これは学生諸君の立志遂行の道標として役立つものと思う。自己の運命は自己みずから開拓すべし、他力本願の怠け者に墮する勿れ、自己の頼むところのものは自己のみであるというのが「自助」である。また、「自助」は誠実という背骨が一本通っていることを忘れてはならない。而して、この「自助」あつてはじめて「協力」がある。「自助」なき「協力」は砂上の樓閣である。白日夢である。竟に人をして乞食根性に墮し去らしむること明らかである。あるアメリカの宗教家が遺した名言がある。

上を見よ、下を見る勿れ

前を見よ、後を見る勿れ

外を見よ、内を見る勿れ

而して人に手を貸すべし

希望である。前進である。これは「自助」の功德である。而して、この功德あつて人に手を貸すことが出来る。人の手を借りることも出来る。すなわち、「協力」し合うことが出来る。われらの学園は、かくて同志の学園として発足したのである。「自助協力」は、われらの建学精神である。

## 静和のこころを思う

— 静和寮（女子）の文集である『桑梓』創刊号（昭和四十年度）所載 —

亜細亜学園の女子寮から、同人雑誌がお目見えするという。お互いが抱いている日ごろの感想とか意見などを発表して、お互いの生活内容を充実して行くことは、人生行路において意義あることと思う。

寮は、「静和」という。「静」は「閑雅」ということで、お上品とでも表現したらよいか。「静」はまた、「みさお・正しきこと」という意味も含まれている。「和」はもちろん「やわらぎ」である。よって「静和」は、女性の特長を表わしたものととして、女子寮に名づけられたもので、皆さんに対し大いなる期待がかけられているわけである。

中国の古典に、「柔能く剛を制す」という語がある。剛が柔に制せられることは、歴史が示している事実で、一時的な現象では、剛が柔を制することがあっても、結局において柔に制せられるということは、面白い現象と思う。しかし、よく考えると、これは当然のことで、柔を守ることは、勇気を要する。また、見識を要することである。現代の大勢は、カネづく、腕づく、理屈づくで勝を制しようとする処世観が流行するかに見える。一方、この主潮に対し、静和の心で処世観を立てるということは、勇者ならでは出来ないことである。「柔を守るを強とす」と言われた先賢の言は、よく味わうべきものと思う。ここにいう柔の徳は、静和の徳であって、特に、女

性に見られる特色である。しかるに、昨今の流行風潮を見るに、女性は一剛強に感染し、男性は柔弱に伝染され、これが新時代の新現象であるかの錯覚を与えている向きがある。恐るべき傾向である。このような人生の転倒錯覚は、ついに人生を暗黒化せしめ、家庭を破壊せしめ、自ら墓穴を掘って、自らその中に埋没せしむる運命を招くこと必定である。女性が、その特色である柔を失ったなら、絵に画いた花で、香りのない存在となることだろう。

われわれ学園の建学精神は、「自助協力」である。自らの力に頼り、自らの境地・徳性を拓き、この開拓精神で結ばれたお互いが、協力して行くのが、最善の人生行路であるとのことである。皆さんは、在学時代にこの建学精神を身につけ、皆さんの胸に抱かれている大いなる夢の実現につとめられたい。

# アジア祭は亜細亜大学の夢の祭典

―「第七回アジア祭プログラム」(昭和四十年度) 所載―

アジア祭がやって来た。今年のアジア祭は、去年のアジア祭よりも楽しい思い出を残して終わりたいと思う。さらに来年のアジア祭は、今年のアジア祭よりも楽しい思い出を作り出したいと思う。アジア祭は、亜細亜大学の夢の祭典である。亜細亜大学の夢は刻々と<sup>ひろ</sup>広げられて行く。ここに学ぶ若人たちの夢も、刻々と<sup>ひろ</sup>広げられて行く。かくて我等の開拓者精神も<sup>ひろ</sup>広げられて行くことだろう。

亜細亜大学の建学精神は「自助協力」である。「自助」は人間形成のイロハである。自身の前途は自身で開拓して行く、他力本願を排することを言う。人間の価値のいかんは、自助精神の強弱で決まる。国家の権威いかなの問題も亦然<sup>またしか</sup>り。自助精神のないところに協力精神がなく、協力精神のないところに夢の育つ素地はない。我等は「自助」をしつかり身につけて、「協力」の友情を深めて行きたいと思う。

私は、アメリカの前大統領ケネディーが、大統領就任演説で、アメリカ人民に警告を発し、諸君は、国家から何かを求めようとする考えをやめて、国家に何を尽くすべきかを考えるべきだ、という意味のことを述べたのを記憶している。真に現代人の他力本願主義を戒めた至言である。何人でも、国家の補助、国家の援助を言う。時にはそれによろしい。しかし、かくては国家のよって立つ<sup>はたら</sup>潑刺たる民族精神が、むしろ<sup>はたら</sup>まされて行くことになる。

国家は、我々お互いの国家である。国家のため尽くすべき分野について、お互いが真剣に語り合うべし。

我々は先ず「自助」で自立し、以て国家を自立せしめ、以てアジアの自由交流を力説し、この実現力は、偏に学徒の双肩にあるべきことを指摘して発足した。

アジア祭にあたり、亜細亜大学の夢を語る。若人の胸にたぎる力強い鼓動が聞こえて来る。

# 建学の主旨

—昭和四十一年度『大学案内』所載—

亜細亜大学の建学精神は、「自助協力」にある。而して、この建学精神をアジア復興の動力にしようとするのが、われわれの大きな望みである。亜細亜大学は、その発足にあたって、次の如く宣言して、その所信を天下に告げた。「今やアジアの黎明期である。アジアの独立と自由を告げる鐘の音が、アジアの全域に鳴り渡っており、全アジアは、正に門戸を開放し、通路を清掃して、相互に隣人交歓の至情を披瀝すべき秋である。もし、自由アジアが誕生し、全アジアの民人が相擁して、文化交流・経済合作を計ったならば、アジアは必ず勃興しよう。而して、世界情勢も必ず一変するにちがいない。」

爾来幾星霜、亜細亜大学は、この建学精神・興亜精神を体し、この大望実現に邁進して来た。いまや国内はもとより、東南アジア各地においても、亜細亜大学の存在が注目の的となつて来た。この事實は、世界転換期の急潮に棹さした亜細亜大学の進路に共鳴し、これが推進に協力を惜しまないわが同胞と、アジア諸国民との共感と好意とに負うものである。

しかしながら、アジアの前途はなお多難である。現在アジアの当面する根本的問題は何かといえば、全アジア人の心田開拓であると信ずる。心の荒地開拓である。歴史あつてこの方、この開拓精神なくして国家民族の勃興

があつたためしはない。アジアにおいてもアジア興隆の動力は、先<sup>\*</sup>ずこれを自らの心田開拓に求むべきである。これがための「自助」であり、この「自助」あつて「協力」あり、而して興隆がある。

日本は先ず自らの心田を開拓し、日本振興の実を示し、もつてアジア復興に協力の範を示さなければならぬ。わが亜細亞学園は、かくの如き理想と使命觀とに徹した有為な人材を育成することを念願するものである。

## 日本再興の偉大なる使徒を憶う

昭和四十一年十一月、第二次大戦で戦歿した同窓生の慰霊大

祭が挙行された。一号館横の興亜神社には、九十八柱の戦歿校

友が祀られている。――青々会編『戦歿校友の面影』所載――

「偉大とは方向を与えることである」との至言がある。しかしながら方向を他に与えるためには必ず先ず自ら目指すところがあればならぬ。大東亜戦争は、所謂戦勝国側の勝手な宣伝と占領軍の謀略のため、非は悉く日本側に在り、是は悉く連合国側に在りと断ぜられ、わが国民自らも亦、未だに贖罪意識と卑屈感から脱却し得ないのが実状である。しかも歴史は真実を語る。大東亜戦争によつて世界情勢はここに一変し、植民地主義が崩壊して、所謂大国の権威が失墜した結果、新興独立国が簇出して世界的自由が光明を放つに至ったことは否定し得ない。

チャールス・ベアード博士は有名な歴史学、政治学の泰斗であるが、公式記録から資料をとったその著書においてこう述べている。「日本が真珠湾を攻撃するより数カ月以前に、ルーズベルト大統領はアメリカをして海外に秘密なる軍事行動をなさしめた」と。この事実は夙に天下公知の事実となっており、今日これを語るも古臭い。学界の権威たる博士の明言だけにアメリカの良識社会には「もしそうなら戦犯も追放もあったものではない。ア



メリカから日本に謝罪使を送らねばならぬ」という声が喧伝されたということも伝えられている。

終戦後から二十余年、当時東京裁判において独敢然として「日本無罪論」を絶叫して屈しなかったインドのパール判事は、先般再びわが国にやって来た。そして東洋精神の偉大なる「真実」を再び力説した。私はここで敢て日本の独善を強調しようとしているのではない。しかしながら、わが国が大東亜戦争において世界及びアジアの正しき方向を示し、併せて日本の独立と復興アジアの諸問題について、その進路を描かんとしたことは「真実」であつたと思う。

学徒出陣はこの意味で、わが国とアジアの将来について大いなる役割を果たしてくれた偉大なる使徒であつた。その純情に映つた夢、そして方向を目指しての先発進展ぶりがそれであつた。

昭和十八年二月「花機関」の一員として入隊渡南し各地に転戦して、竟にボルネオにおいて無惨にも刑死の災厄に遭つた高橋政義君の、母堂宛手紙の如きは、切々の至情胸に迫り読むに堪えぬものがある。同君は昭和十九年九月興亜専門学校卒業の認定を受けたのであるが、昭和二十二年刑死したのである。左記はその手紙である。

#### 遺書

母上様

不孝の罪遙かにお詫び致します。政義は上司同志の方々より信任を得、又先輩の教諭に従い飽くまで大日本帝国の武人として戦いました。今は唯、母上様の御健康と祖国の再興を祈念しつつ南溟の果遠く、一死以て無実を証するのみです。先哲の道を興亜専門学校に学び、その先哲の道を自らの道と信じ、不滅の靈魂となりて靖国の社に帰一致します。胸中只これ光明、真に死処を得たものと信じます。政義は飽くまで武夫として逝きます。自分の信念は飽くまで枉げず、御国のため、君恩のために母上様の御教訓に従い戦い抜いて逝きます。先

立つ不幸の大罪はせめて私の信念に免じて御許し下さい。決してお力落しのことなく兄上、姉上様と安樂にお過し下さい。そのことのみが政義の最大のお願いです。遙かに遠く御健勝をお祈り致します。兄上様、姉上様、母のことども呉々もお願いします。政義は飽くまで日本の再興を信じ又先哲の道を信じ戦死致します。この道が総てを救う唯一の道と信じました。

昭和二十二年六月二十一日

於パンジェルマシン収容所記之

何という見上げた素晴らしい決心ぞ。先哲普遍の道に立ちて真日本の再興を計り、これがため「一死以て無実を証す」「先哲の道を自らの道と信じ」「御国のため、君恩のために、母上様の御教訓に従い戦い抜いて逝きます」は、まさに国士無双であるが、これは戦歿校友の残した面影の一例である。しかもこれらの面影に接してわれらの脈搏は覚えず高鳴りを禁じ得ないものがある。まさにこれ日本再興を目指して発足した先達自らの死の行進であつた。

興亜専門学校は第一回から五回まで卒業生三百四十三名を出しているが、そのうち戦歿者は実に九十八名に達している。その戦場は蒙古からニューギニアに及び、つぶさにアジアの広域を踏破しているが、恐らくはそれぞれ興亜の秘計を胸に秘めて長眠についたことと思う。戦歿校友の残した夢の実現は、後輩に托されている。われらはこれが実現をかたく誓うべきである。

## うるわしき女性像

やさしさとユーモアにあふれた、太田先生のお人柄がよくでている文章である。また、文末にご自身で注釈を付されているのも大変に珍らしい。―静和寮文集『桑梓』第二号（昭和四十一年度）所載―

明治の文豪幸田露伴のおどけ話を、ある本で読んだことがある。それは、カステラとカルメラの語源についての小咄である。むかし遠い国から、テラとメラという二人の兄弟が日本にやって来た。そして菓子屋を開業した。テラは小麦粉を焼いてふくらせ、メラは砂糖を焼いてふくらせる。ところが、テラの方は売れ、メラの方は売れない。メラはだんだん工面が悪くなって来るので、テラの許に金を借りに行く。テラは貸す。そこで「貸すテラ」「借りるメラ」の名前が出たというジョーク（冗談）を露伴が語ったというのである。もちろん一場の笑話であるが、一寸面白い。かすてら屋の提燈持ちではないが、軍配はたしかにテラにあがる。「かすてら」と「かるめら」のどちらが売れるかは、初めから明らかであつたらう。

それにしても、「貸す側」と「借りる側」の立場の差は、人生行路において天地霄壤の差である。私が、ここである貸し借りということの意味は、必ずしも自分の所有する金銭についていうのではない。思うに、世の中には大の財産家でありながら「借りるメラ」があり、大の貧乏人でありながら「貸すテラ」がある。つまり社会、国家

を中心として考えた場合において、多く他人のためにつくした人が「貸すテラ」で、多く自分のためにつくした人が「借るメラ」であるというのである。

「低き生活と高き思想」という語がある。これに反する語は「高き生活と低き思想」である。高き生活、自分ばかりの贅沢な生活を営めば、精神が滅びて墮落し易い。もともと墮落ということは、思想が低いから来るものであるが、個人でも社会でも国家でも、亡滅は例外なく自ら招いた道德破壊、即ち「自殺」であることは歴史の明証するところである。キリスト教界の先達、内村鑑三の著『愛吟』に収められている、ジョン・G・ホイチャーの『充たされし希望』は実にうるわしい詩である。

学校帰りのふたりの女子

たがひの目的問ひ合せしに

彼女は曰へり、妾は女王となりて治めん

是女は曰へり、妾は広く世界を見んと

○

年経て後に復た会ひし時

たがひの置位を問ひ合せしに

彼女は曰へり、妾は実に女王となれり

貧しき人の妻にはあれど

○

樂しき家族は妾の民なり

実なる夫は妾の王なり

愛の勤は妾の律なり

そなたは如何に成行きにしや

○

是女は曰へり、広き世界は昔も今も

未だ見ぬ国となりてのこりぬ

愛と義務との境を越えて

妾の足は出しことなし

○

広き世界のその音信に

妾は耳を傾けもせず

妾の母の病の寝間は

妾の世界にあるぞかし

○

兩人互に手を取り合せ

喜び涙にむせびて泣けり

神は幼時の祈願ねがひを聞けり

我等の望は充たされたりと

『愛吟』にしるされている自序は、明治三十年とあるから六十九年前のものである。文体も仮名づかいも、現代と違うので解りにくいかも知れないが、心して読めば解ると思う。

皆さんはいま、亜細亜学園の静和寮で生活しながら、学問の道にいそしんでいる。学問の道を歩むには静和の心が肝要であるが、学問の道にはきびしさがある。明治維新の一先覚者は、学問したと言わず、鍛錬したと言っている。ただ坐して書を読み、樂をしながら先生から教えを受けるだけでなく、所謂「自助」の精神で自分の身と心とを苦しめて、自ら修業せよというのである。現代でも、学問に対する心掛けとして反省すべきところと思う。

徒に高き生活を望んでいては、好學心と向上心が蝕ばまれるに至ること世上多く見るところである。また、朋友信有りという語がある。友達が互に信頼し、協力し合って生活し、時にはお互いの将来の計画や希望など、隠すことなく語り合うことが出来たら、どんなに楽しく、かつうるわしいことだろう。前に引用した『充たされし希望』は、その好例と思う。

註、「樂しき家族は妾の民なり」の「民」の原語はrealmで王国、領域などの訳語もある。

「実なる夫は妾の王なり」の原語はMy King a husband too

「妾の律なり」の律はrule (おきて)

「妾の母の病の寝間」My widowed mother's sick bedroom

# 歴史の眞実を見究めよ

## ——明治百年記念特別連続講座について——

昭和四十三年は、明治百年にあたる。本学ではこれを記念して四十二年五月から翌年十一月まで全十五回の明治百年記念特別連続講座が開かれた。『明治百年記念特別連続講座広報』第一号（昭和四十二年五月二十九日付）掲載——

本講座の趣旨は、学生諸君に明治維新の精神を深く究めていただきたいということにある。

今日の日本は、百年前の維新当時の先輩の非常な苦心によつて基礎が出来、その基礎の上に発展したものである。戦後いろいろな言論が乱れ飛び、明治維新の歴史的事実を抹殺したり、非常にゆがめたり、あるいは大東亞戦争等にしても、その目的を全面否定ですましてしまうというような風潮があつて、学生諸君を非常に惑わせる説が横行している。

これは常日頃、私が非常に残念に思っていることである。

日本は、その活動の源泉があつたからこのように発展してきたわけで、歴史というものを土台にして物事の因果関係を究めなければ、本当の筋道は発見出来ない。わが大学においては、正しい歴史観に立った歩みを是非諸

君に知ってもらいたいと考えている。

亜細亜大学の建学精神というものも、ここから出発しているのである。そのような意味で、日本が今日に至るまでの原因をいろいろな観点から諸君にハッキリ認識してもらい、その上に立つて諸君が更に前進飛躍する気持ちを持ってもらいたいと願っている。これが本講座の目的である。

今日の世の中というものは、雑多な論説に非常に惑わされていて、先日の選挙ではないが、ソフトムードであるとか、平和ムードであるとかいった言葉が流行している。

諸君が本当に内外の情勢を究めるならば、今日の世界は流動しているなどというのではなく、核拡散問題という一つをとってみても、極端なことを言えば、二大国で世界を征服する、あるいは五カ国で自分の思うとおりの世界をコントロールしようというような、本当の意味での平和発展、科学的根拠の上に立った平和生活の基礎を作るといふような科学の進歩さえも押えようという動きがある。

日本のことを考えてみても食糧問題、エネルギー問題、そのうちでも特に全面的に輸入に頼っている石油問題なども、最近進歩してきている核エネルギーの平和利用によって日本独自の研究で自給自足は可能と思われるが、それすらさせないという。それほどまで緊張している世界の情勢なのである。私は学生諸君に本当の世界の緊張状態を直視してもらい、しっかりと現実をつかんでももらいたいと思う。

ソフトムードとか平和思想というものは、われわれの理想としては、その為<sup>ため</sup>にベストを尽くすことは必要であるが、そうだからといって現実の姿を無視することは許されないのである。

百年前のわれわれの先輩は、そこを直視して国の前途を心配し、内外の情勢をはっきりつかんで立ち上がったのである。



今日のわれわれの生活は、その余慶であり、先達の苦心、努力で日本の復興は出来たわけで、まことに百年間の日本の歩みは驚異的發展を示したものであったが、そこには当然かくなり得た原因があったのである。この講座において学生諸君はそのような観点からは非明治百年の足取りをはっきり認識してもらいたいのである。

本講座の開設にあたっては諸先生の絶大な尽力を得てきたわけであるが、教育的見地よりも全学生諸君が特別な関心を持ち、本学建学精神の発露として、世間一般の講演会とは異なるこの講座が実を結ぶよう、学生諸君の全面的協力を期待するものである。

# 一姓の民と日本の歴史

—『明治百年記念特別連続講座広報』第二号（昭和四十二年六月二十一日付）掲載—

明治維新は、近代日本への扉を開いた夜明けであり、永年にわたりわが国を暗黒化せしめていた公家政治、武家政治の弊風を打破し日本本来の姿であった君民一体制を復活しこれを基調とし、さらに発展せしめんとしたものである。明治維新は、破壊面と建設面の二つのものを含んでいる。破壊面は、いわゆる倒幕で、一切の封建的制度を作っていた諸侯、武士など幕府的存在に対する破壊である。建設面は、いわゆる勤皇をいう。皇室を不当な閥族の勢力から救い、国家の中心にするという王政復古によって国政を一新し、国家の統一を期する、というものであった。

明治維新は、そのようなわが国の国体観の自覚であった。かくして明治維新の中心は、明治天皇であったといえる。

明治元年三月十四日に明示された基本国是——五箇条の御誓文——と同日発せられた国威宣揚の宸翰（しんかん）を給（たま）わったが、その中には、われわれの骨の髄まで徹すべき言葉が窺（うかが）われる。

窃（ヒソカ）ニ考（かん）ルニ中葉朝政衰テヨリ 武家権ヲ専ラニシ 表ハ朝廷ヲ推尊シテ実ハ敬シテ是ヲ遠（トホ）ケ 億兆ノ父母トシテ 絶（セ）テ赤子ノ情ヲ知ルコト能サルヤフ計リナシ 遂ニ億兆ノ君タルモ唯名ノミニ成リ果（ハ）テ 其力為ニ今日朝廷ノ尊重

ハ古ヘニ倍セシカ如クニテ 朝威ハ倍衰ヘ上下相離ルル事 霄壤ノ如シ カカル形勢ニテ何ヲ以テ天下ニ君臨  
センヤ 今般朝政一新ノ時ニ膺リ天下億兆一人モ其処ヲ得サル時ハ 皆朕カ罪ナレハ 今日ノ事 朕 自身骨ヲ  
勞シ心志ヲ苦メ艱難ノ先ニ立 古列祖ノ盡サセ給ヒシ蹤ヲ履ミ治蹟ヲ勤メテコソ 始テ天職ヲ奉シテ 億兆ノ君  
タル所ニ背カサルヘシ

まことに明治天皇は、明治維新の権化であり、また日本それ自身が明治天皇の体となつて現われたものである、  
と私は思う。

日本の国体を歴史的にしかも端的に示す言葉として「天下一姓」という言葉がある。この言葉は、わが民族の  
特性をよく表わしたものである。われわれは、いずれも遠い祖先の血を受け継いだ一つの姓、一姓の民である。

本講座の意義は、日本復興の動力が、どこにあるかということを究め、かつ波瀾万丈の明治百年、国運の跡を  
偲び、もつて多難なこれからの日本の前途に対して、誤りなき方向と指針を知ることにある。

私は、これからの諸君の双肩にある第二の維新の成果を深く諸君に期している。

## 明治維新の革新原理を憶う

『明治百年記念特別連続講座広報』第三号（昭和四十二年九月七日付）掲載―

「偉大」とは「方向を与えることである」とドイツの一哲学者は言っている。これには先ず自分の目指すところをきめること、即ち、われわれの「魂」の向かうところを明らかにすることが第一であり、それが理想ということになる。

明治維新が維新精神に方向を定め、これに従って見事な成果を収めたのは、当時の先覚志士にこの理想があり、その理想のために身を挺して努力した結果であると思う。

維新前に見られた墮落、沈滞した国民的生命に対し志士たちが歴史を回顧して国民的生命に潜んでいる伝統的なものの、独自のものの、偉大なものを認識し、これを復興するという基盤に立ち、革新に成功したことは注目される。換言すれば、維新先達の革新、改造の道は、国民的理想である国体意識の明徴を武器として、国民的墮落と分裂を打倒したことにあったと思う。

その意味で他国で栄えた制度、イデオロギーをそのまま借りてきてただ便宜的な革新をしたものと根本的に違う。つまり日本革新の原理は、これを内に求めるものであり、外に求めるべきものではないということを事実で示したところに特色があった。

勿論、それは排他的な国粹主義ということではない。

われわれの極力戦わんとする一点は、われわれの魂を異邦精神に売り渡す者に対してであり、言い換えるなら、われわれの自存、自立に対して、主客、本末を顛倒することは、どうしても承服出来ないということである。

このために、われわれ日本の復古即ち維新戦を戦い抜くという気持が必要であると思う。

日本の復興史が教えるように、日本の国民的自覚が強烈であり、日本の精神的勃興が旺盛であるならば、外国文化を自主的に取り入れてわれわれの精神の中に統合することが出来る。而してこれによって外国文化そのものの真価も發揮されるという結果になると思う。明治維新の先覚志士たちが、現代のわれわれに教えたものは、日本の歴史、伝統に立脚し之を時潮に應じて展開し革新を行ったということで、これはまことに偉大な方向を示したものである。

われわれは、このことを念頭に置き、これを偲び、これが偉大性を受け継ぎ、さらに内外に見られるこの大転換期に際し、われらの理想を大いに進展せしめたいと思う。

# 建学精神の体得者たれ

昭和四十二年四月五日から七日まで奥多摩・御岳で開かれた第一回学寮委員研修会での訓話。

—『昭和四十二年学寮委員研修会講話集』所載—

訓話ということですが、別にそう堅苦しくなく諸君と共に胡座ぐくらをかいている気持ちで気楽に日ごろ感じていることを申しますので、諸君もあまり堅くならず聞いて下さい。

昔は軍隊というものがあり、この軍隊生活を共にすることで生涯の教訓になったことが沢山あった。もちろん弊害もなくはなかったがプラス面の方が多かった。なぜかといえば、苦楽を共に集団生活をするということは、十人十色といわれる性格や感情の違う人々と付き合うことであり、それによって自分の気持ちを広め、他人のいろいろな経験を知り、それが自分のためになることにもなるからです。すなわち、集団生活はその人の人生の内容を豊富にするといえるのです。

集団生活でいちばん大切なことは、規律または秩序を守ることです。だんだん民主主義ということが浸透してくると、銘々が勝手なことをするようになり、そうするとこの規律が何か個人の自由を圧迫すると思われるが、これは非常な誤りです。自由というものはその裏に規律がなければ本当のものではないのです。

昔のイギリスのパブリック・スクールは、世界的に名を響かせたもので、あれほど自由を愛する国の学生生活

が非常に規律のやかましいことで有名であった。例えば、有名校は全寮制をとっているが、一学期間に外出日数が数日、それも山や河に行くため遊びに行くことは出来ない。あるいは、日常生活でも床屋の店まで決まっているという状態であったという。このような制約に従いながらも学生生活をエンジョイしている。自由の反面において非常に規律を守っていたのです。

規律というものは、守りさえすれば全然苦痛ではない。守らないから苦痛に感じるのである。みんなが規律に服すればそう窮屈には感じられない。また、規律がなければ自由は乱され、自由自体が死んでしまうのです。

イギリスのパブリック・スクールのあり方は、一面においては、個人の自由を非常に認めているがその反面においては規律を非常にやかましくいつている。規律だけでは暖かみを感じられぬと思うが、その前提として自由があるので暖かい気持ちがあったようです。個人の自由を認めるということはその反面、個人が銘々に規律を守るということで、例えば、校舎を紙屑で汚すなどという不徳に対しては、非常に厳しくあつてよいと思う。次のような言葉がある。Cleanliness is Godliness. 清潔であることは神の如くであるということです。

御維新の時、わが国でも伴林光平という勤皇志士の作に『本是れ神州清潔の民』という詩がある。われわれ同胞の特徴というのは、きれいな、清潔ということであります。この清潔というのは、今の紙をまきちらしたり、汚くする、それを悪むことはむろんそうだけれど狙いは精神的な意味であります。つまり不潔な考えというものは軽蔑する。やはり清潔というのは精神的なところからこないとはいけない。飾るということも必要ですが、本来の清潔というのは精神的なものです。そこから形の清潔というものが生きるわけで、つまり、われわれの同胞は、元来清潔の民だった。伴林光平の清潔というのは、思想的な、品格的な清潔ということなんです。しかし、それはやはり日常生活にも反映してくるわけです。

日本は、どうもそういうところに団体訓練というものがなくなっている。花見ともなったら、そのあとは乱暴<sup>らんぼう</sup>狼籍<sup>ろうぎゃく</sup>で話にならない。それから集会でもそうだ。総評などの集会のそのあとはゴミが車で何十台も出る。本当に組合運動をやるうというならば、やはりそういう一つの主義主張の集まりですから、そういう清潔精神が先行すべきもので、先程話したような清潔というものが中心じゃないか、ただ自分の事だけ考えればよろしいというのは集会の意味をなさないわけで、外国から見た日本の姿は、そういう所が非常に劣って見えるわけです。

これはなんでもないようなことでありますけれど、日本国民のモラル、道徳が低いということだろうと思う。書齋を整頓するというような気持ちをもって勉強するというのもやはりそういう所からくる。自分の周辺をととのえる、これは昔から身だしなみということで、さむらいは非常にやかましく言っている。毎朝鏡を見て髭<sup>ひげ</sup>をそる。婦人ならば髪をととのえる。これはおしゃれということとは違って形をととのえる。自分の精神もやはり形ということになるわけです。鏡を見るというのは自分の心を正す、形から心を正すことだろうと思います。

先程の話にもどりますが、規律というものがなければ、民主主義といっても民主主義は発達しない。銘々民主主義のルールに従う、ということではなければ、自分勝手なことをやるということでは民主主義がこわれてしまうわけです。やはり、国家、社会とか団体とかいうものの在り方についても、ルールに従うという気持ちがあれば民主主義の発達はないわけです。こういうことは平凡なことで、なんでもないようなものだけれども、それが実際は難しいわけです。

常識というものは、コモンセンスということ、万人共通のセンスなんです。感じなんです。ある一人だけで押さえてつけないならば、コモンセンスではない。共通のセンスだというから常識なので、常識というのは決して珍しいことではない、当たり前のことです。この当たり前のがなかなか守れない。



だから偉大な人というのは、当たり前前のことをよく守るから偉大な人ということになるわけです。グレートマンというのはモラル、道徳心に基づいた人ということなんです。これはよく間違われるわけですが、偉人というのは小さなことを大事にする人ということなんです。東洋流に言えば、そんなことは大したことではない、豪傑は些事（さし）にこだわらないと思われませんが、今日のモラルからいえば、正しいことを忠実に守る、その積み重ねたところに、いわゆるグレートマン、偉人というものがあるわけです。みんな当たり前のことが当たり前でないように扱われるのが今日なんです。今日では、職業でもなんでも、まともで平凡なことを見ると、こいつは下らないや、と捨てちゃう。人間の目玉が二つだというと当たり前だ、三つだというと、おつ、これは珍しいというわけで、何か異なつたこと、違つたことだといひとする。これは人生の大きな観点からいえば間違つたことで、やはり相手が苦しい時には、自分もその苦しみの中に入って同情するというような気持ち、これがコモンセンス、共通の感じということなんです。

ところが今の日本人の場合、その共通の感じというのが非常に薄い。公園というのはみんなが行つて楽しむ所なのに、お酒を飲んで、辺りかまわず騒ぐ、紙屑を散乱してそのまま帰る。こういうことは何んでもないようなことだけれど外国から見ればモラルが低いということ、国民のモラルが低いということでは、やはり日本が世界と手を握る、殊にアジアのリーダーになるなどということは許されないわけです。平凡なこと、例えば、約束を守るというようなことが軽んじられるというのが今日の思想です。

それならばどうしたらこれを直せるかということになるわけですが、一つには銘々が自分で自覚して小さなことでも、正しいことは勇敢にこれをやるならばやるという決心が必要で、まずそれを自ら実現する、行動化することです。民主主義というのは、ちよつと矛盾しているようだけれど、銘々各人が善に対しリーダーシップを取

ることなんです。指導者原理です。民主主義の指導者という者は、民主主義のルールを体験することが必要なんです。

イギリスにグラッドストーンという有名な政治家がいたが、彼の政治理想は、善をなすにやすく、悪をなすに難き社会を作ることであるとのことです。誰<sup>だれ</sup>でも善をなすにやすい社会を作るということは平凡だけれども、政治家の理想としていいですね。誰でも善いことが出来、悪いことをするのが難しい、悪いことができない社会にする、これはグラッドストーンの政治の理想です。

彼は政治家として政治の理念を説教したばかりでなく、身をもって実践した。つまり、そういう政治理念、政治感覚というものが一国の総理大臣にあるならば民主主義というのも浸透するわけで、やっぱり偉大なリーダーが必要ということになります。

またこれに共鳴する各人も必要です。諸君は今度新入生が入ってくると先輩として寮をリードすることになるでしょう。そう難しく考える必要はないかもしれないが、寮の気風、在り方というのはリーダーシップ、すなわち指導者としての諸君の肩にかかっているわけです。

寮に入るというのは、新入生本人はもちろん、新入生の家のお父さん、お母さんも自分の子供を寮に入れるということに對して、非常に期待を持っているわけです。寮生活によって、自分の子供のわがママが直る、寮生活によって人生のルールというものを学ぶ、良い友達ができる、陰気な子供が陽気になる。つまり、お父さん、お母さんは自分の娘、自分の息子を寮に入れるということに對し非常に期待をもって送り出すわけです。

諸君はむろん道徳の先生ではないから、そんなに難しい負担をおうには及ばないと思うけれども、諸君は寮の中にとびこんで、さらに自分も寮生活を楽しみ、後輩とも扉<sup>とびら</sup>を取り払って話を交わしてもらいたい。

本来なら学校というのは全寮制度が理想ですが、なかなかそうもできません。不完全でも寮が有るということは、その範囲において学校の理想だというのがそこに映るわけです。小さくても一つの寮は一つの寮なりに大きな夢をそこに実現できるというようにしてもらいたい。友達と共に話し合う、共に進む、苦楽を共にするというのが寮生活に課せられた意義だと思ふのです。それには諸君自身がまず気持ちを明るく、どこから見ても裏表がなく天真爛漫な気持ちで後輩に接してもらいたいと思ふ。

友情は信から出ず。「朋友信有り」といわれているが、信頼というのが根本で信頼のないところに本当の友情はない。家庭でも同じですが、信は友達と交わる原則です。お互いに信頼し合うということがなければ、本当の友人はできない。諸君も後輩に対して全幅の信頼をする、さらば後輩も諸君に全幅の信頼を持つでしょう。こういうことで寮生活をしているうちに、人生の大切な修業というものが自ら得るところがあるわけです。

学校で勉強するのはむしろ大事なことであるが、同時に友達と一緒にとけ合って寮の中で生活するという事も、また一つの大きな学問になる。寮生活の大きな産物の一つは、友達を得るということです。昔の軍隊がそうでした。『同期の桜』という映画が非常に評判ですが、これはやはりなんともいえない人生行路の修業となったもので、苦楽を共にするからその感じが出るのです。

前のアメリカ大統領アイゼンハワールの短編伝記を読んで感心した記憶があるのですが、アイゼンハワールは士官学校の卒業生ですね。大統領になった時、全国の同期生がホワイトハウスに集まって大統領のためによることなんだわけですが、同期生の中でいちばんの世出頭は大統領です。しかし、集まった同期生の中には、田舎で落ちぶれ生活を送っている者もあるし、千差万別です。しかし、昔の友達であればアイゼンハワールも昔のアイゼンハワールに返って、お互いに、おいこらという間柄に立ち返るわけです。僕等も昔の友達とはそういう間柄です。

話は前後しますが、この間も前総理の岸君に会った時、「四月十五日の亜細亜大学の入学式にやって来て祝辞を述べてくれよ」と頼んだら「あーそうか、行くよ」といつて当日やって来た。昔の友達は非常にいいんです。

岸君が来るから、これは私の文部省時代の後輩ですが、文部大臣の剣木君にもと思ったら「福岡の選挙区に帰るから駄目だ」。それじゃ仕様がな、誰にしようかという考えた結果、防衛庁長官の増田君に電話で「こういうわけだが」と言くと「俺はお前の所へ行つたことがない、困つたな」といいながら「それでは行こうか」。こういうふうで引き受けてくれた。十時からの第一回は岸君がやってくる。一時からの第二回入学式には増田君がやってくる。

昔の友達ですが、公式の場では前総理大臣ですから敬意を払うことは当然です。けれども、二人になったら昔の友達に返る。東京都知事の東君<sup>あづま</sup>なども我々仲間だけの会などになると「東さん」なんて言うのはいいない、「東龍<sup>とうりゅう</sup>」と言うと「おーい」という。そういうわけで昔は裸になつての友達付き合いですから、そのままつづけることができれば幸せと思います。

さつきのアイゼンハワーの話に戻りますが、昔の友達だから奥さんがね、——私はうれしいと思うんですが、——昔の主人のクラスメートが来たのだから、自ら台所に出てエプロンかなんかかけて手料理を作り御馳走する。大統領夫人だけれど、その時はもう昔の主人の友達仲間に入るわけで、そういう情緒の発露は実に美<sup>うつく</sup>わしいと思う。やっぱり学生時代の延長が楽しいので、今日このごろ付き合い合つた仲ではなかなかこうは行きません。

そういうように学生時代の付き合いは、どこまでも人間としての付き合いですね。この間も言つたと記憶しますが、学生時代に友達になつたのは、後日社会的地位にどんなに変化があつても、学生時代の純情心に変化がない以上は、付き合いの変化はないはずなのです。だから片や大統領や総理大臣、片や田舎住まいや裏長屋の貧乏

生活をしておつても、おいアイク、おい岸といえるわけです。かくて、どんなに偉くなくても、自分の気持ちが若い時の友達との気持ちに反するようになってはならない。

だから諸君もこれから気持ちの持ち方についてよく注意しなくてはならない。自分の心が墮落してはだめだ。世間的な成功、失敗、必ずしも意に介する必要はない。最高の地位になった人には相當の敬意を表わすのは結構ですよ。しかし自分が貧乏したからといってひけめを感じる必要はない。それは、人生は成功する場合も失敗する場合もあるからです。

しかし、自分の気持ちが墮落するとか、さもなくば根性がまがるとかいうことになったら、堂々と友達付き合いはできない。諸君はいまだ成功、失敗のない同じレベルの友達なのだが、だんだんと境遇が変わる。変わった時も諸君の気持ちは変わらないで依然として素直に真つすぐにあることがききも話したグレートマンです、ね、そうありたい。

本当の偉人というのは正しいことを真つすぐに守っていく、その気持ちが変わらないので、友情も変わらないのである。もし先方の友情が変わった時はこちらから友人付き合いをやめても良い。お互いはそのような恬然とした生活をしておれば良い。あの人は成功したからとか、百万長者になったとかいう世間的身分の変化で友情の変化を来してはならない。人間の境遇は変わることもある。成功、失敗は一応形の上ではいえるが、本当の成功、失敗はそれだけではない。不正なことで金をもうけるとか、要領よくして偉い地位につく人もいる。大学教育というものはそここのケジメをつけるのを修得するところである。

アメリカのある判事は、大学教育とは、英語でいう、スマートな人間を造ることではない。スマートとは要領の良い、便利な人間を指すのだが、大学は叡智のある人間、英語でいう wisdom の人間を造るところだ。それが大

学教育です。大学で教育を受けている人間はそのプライドを有していなければならない。これが大学教育の目的なのだから。

ただ、成功だとか失敗だとかいう世間的、表面的評価だけに捉<sup>とら</sup>われては大学教育を受けたということはいえない。このように大学がマスプロ教育となり、ためにいろんな不祥現象を起こすということでは大学教育が泣くわけです。いやしくも最高の教育を受けた者が、法律にひつかるとかということ自体が、大学教育の權威がないということになる。

諸君はこれから新入生を迎えるのだが、以上のことを心にとめてほしいと思います。これは人のためではなく、自分自身のためなのだから。教育というものは自分がまずこれを体得して人に及ぼすものであります。

最後に諸君に注文したいのは、諸君は亜細亜大学に入っている。随分大学は多いが、亜細亜大学は建学精神という大きな夢を持っている。一朝一夕<sup>いっちょういっせき</sup>にして大学の在り方を学生諸君に徹底できるとは思っていないが、まずこの建学精神の「自助協力」を体得してもらいたいと思う。

「自助」とは、頼りになるのは自分自身である。いちばんの頼り主は自己だ、ということ、人の助けをあてにしない。まず、自力でいくのだ、ということである。この精神、根性を持ちつつお互い同士が提携してここに本当の協力ができる。自立心のない協力などは乞食<sup>こじき</sup>です。自助精神が銘々にあって、協力精神が出てくるのだ。

今日の日本の姿を見ると利己主義全盛であるが、私は非常に情けないと思う。日本は経済繁栄で有頂天になっているが、日本はアジアで一体何をしているのだ。世界に何を寄与しているのか、という疑問が投げかけられている。むろん経済も結構だが、ただ金もうけだけでは軽蔑される。金をもうけることは目的ではなく、手段にすぎない。どうして金をもうけるのだ。もうけた金をどう使うのかに問題がある。

諸君もよく知っている二宮尊徳、この人は日本が産んだ世界第一の経済学者だと思つていますが、二宮先生は質素勤儉ということを強く言っている。その結果、貯蓄ができる、経済繁栄がやつて来る。これが本場で、初めから金、金、金と金ばかり追うと皮肉のようだが金が元で破綻はたんすることになる。やはり勤儉力行による経済繁栄が長久策であつて地味であつてもその基礎はここに置くべきだと思ふ。

本当に日本人が勤儉努力し、富を開発して得た経済繁栄なのか、反省すべきものがあるようだ。日本には軍隊がない。どこの国でも国防には重大関心を払つており国防費の占める予算の比率は頗すこる高い。かくて万一、アジアの各地で侵略戦争が起きたら日本はどうする。日本自身はもちろんのこと、アジア諸国に対し防衛の義務は尽くし得ないだろう。これではいかに経済繁栄でも我利我利がりがり者流で何の役にも立たず、アジアのために尽くすどころではない。

こういう精神が日本人にあるのか。唯ただ、平和平和といったところでアジアをめぐる国際情勢はそう甘いものではない。その時に無防備平和共存などと唱える日本人が本当にアジアの平和、自国の独立のために、自分の命をなげ出して自国を、またアジアを守る精神があるだろうか。

議会の舌戦をみると自衛隊を持つこと自体が憲法違反だなどといっている。そのような戯論げろんに耽ふけっている国はどこにもない。あの永世中立国スイスでも軍事費は頗ほう大で事実上徴兵制であり、各家庭では皆銃を持ち備蓄品を持っている。もし外敵が侵入してきたら国の独立のために全国民がみな銃を取つて戦うのである。だからこの前の大戦にしてもヒットラーでも誰でもスイスに侵入することができなかった。

だが日本にはそのような軍隊がない。日本の安全と生存は他国の信頼、信義によると憲法に書いてあるから自分たちの運命は他国まかせだということになる。そういうところに所謂いふまけ経済繁栄の反面があり、これでは国際協

力もできないのではないか、ということ疑われるのも一理がある。それでは日本のプライドというか、自尊心、独立心というものが無いわけです。何も軍隊がいいとか、謳歌おうかするという意味ではない、せめて自分の国の安全は自分で守る。また、アジアの平和が乱される場合は、日本が率先してその難に向かうという実力、気概はあるべきだと思う。そしてこの問題は、我々自身が判断する以外にない。

そのような意味で個人でも国家でもセルフ・ヘルプ、自分の国は自分で守る、自分の運命は自分で拓ひらく、このような精神がなければ馬鹿にされる。それで、私は諸君が内外情勢に対しても、亜細亜大学の「自助協力」の建学精神がいかに大切であるかが身に沁しみみ入ることと思う。

勉強でも先生から習ったらそれで良いというわけではなく、分からなかったら自分で辞書でもひいて、分からぬものは探す。図書館にある大英百科辞典、これをひけば内外わなに亘り分からぬものはない。分からぬものは徹底的に自分で追求して分からぬところを自分で発見する。この精神あって自己の權威が生まれ、世界どこに行っても尊敬される。この自助精神なくしては人に馬鹿にされる。

今一つは、亜細亜大学はその名が示しているようにこれからはまず、第一に日本自らの実力、品格を築きあげる、それからアジアに日本の温かい手を差し伸べる、というのが亜細亜大学の精神であり大望である。それには前述したように、まず、日本自身というものを本当によく知らなければ、アジアだ、なんだといったところで馬鹿にされるのは当然である。

昨年、東急の社長の五島理事長が大学にきて話したのだが、その話の中で香港とかその他で、日本人がいかげん馬鹿にされるのを見て自分は実に情けなく思った、と述べた。それなんです。なるほど、日本人は金を持っているが、その金を自分自身の栄耀えいよう榮華えいけのためにのみ使っているのではないか。自分は贅沢ぜいたくをする。しかし、その



金を本当に日本自身の健全な発展や、アジアのために使うのか、一面においてそのような点で疑われるわけです。であるから、まず日本自身の本当の正しさというものを決めてからねばだめです。自分が私欲でフラフラしていて他人に対し説教してもこれは聞かれないのも当然のことです。

亜細亜大学は諸君の母校である。この大学を良くするということを諸君の夢として持ってほしい。亜細亜大学をどこに行っても誇り得る内容を持った大学にしてみたいと思うのである。私は亜細亜大学の学長だけれどもそのための小使役役だ。私は諸君に対して誇り得る人物でもなんでもない。ただ亜細亜大学を立派に育てる小使役役と思う。

私はある著名な人に話した事があるが、私は学校に關係して非常に幸せだと思う。いろいろ今の若い者がどうだとか、こうだとかいわれているが、私は学生の中に素晴<sup>すば</sup>らしい人物の沢山いることを見ている。世人は口を開けば今の大学生はだめだとかなんだとか言っているが、だめな者は昔もいた。しかし、私の知っている範囲において、今の学生の中に素晴らしい学生が沢山いる。それで私は日本の前途に必ずしも悲観はしていないと言いました。

一つ母校の内容を高めてほしいと思う。外観もできるだけやるけれど外観だけではダメだ。この大学は諸君と先生の学校だと思っている。その限りにおいてこの大学はちっともひけめ、面倒なことのない所だ。ないのは金だといっておる。しかし、金は欲しいが理由なくて頭を下げて持つてくる意思はない。貧乏は貧乏でもかまわない。自然に外観もとのえていくというのが私の考えです。大学はデパートではないから、外観ばかり立派になつても、中身が粗末ではその名に恥じることになる。

繰り返して言いますが、亜細亜大学は諸君の母校だから母校精神を誇りとしてどこにいても、その精神の体得

者になつていただきたい。私は福島県の出身だが、私の師事した先生は会津白虎隊に参加された山川健次郎先生で、東大の総長もなさった方であります。そのお兄さんの浩先生も戊辰戦役に出陣した勇士でかつ立派な教育界の先達でありました。

この山川健次郎先生は、明治四年に十八歳でアメリカに渡り、そこで勉強されております。先生がアメリカに行つて感じられたことは、アメリカで精神的に学ぶべきことではない。しかし、物質文明は我が国より進歩しており、蒸気機関だとかその他の科学文明に至つては、我が国はアメリカに比し非常におくれていたので、どうしてもこの方面で国のためにお尽くししたいと思われた。こつこつ愛国の動機から、先生は物理学を専攻されるに至つたのである。

また山川先生の当時の追想談をお聞きしたのですが、先生がアメリカに行つて驚いたことの一つに、アメリカにはニューという言葉のある所が沢山ある。例えば、ニューヨーク、ニューヨークランド、ニューオルリンズ等々である。この新しいというニューがどうしてこつこつ多いのだらうと思われたそうですが、御承知のとおりアメリカはイギリスの植民地ですからイギリス人がアメリカのいたる所に小さな部落を作つて、そこから段々に開拓精神で、拓けてない荒涼たる土地を拓き、毒蛇とか狼とか、土着のインディアンから襲われる心配とか、隣村に数十里という危険な不便な土地に怯えてその中に自分の故国の名前をつけた。本国から自由を求めてやってきたピューリタンという新教徒である彼等が新しい天地をここに造るために、こつこつ意味で故郷の名前の上にニューという字をつけたわけです。私はこの話を先生の感想として聞いた時に当時の先生の胸中を察して非常に感じたことを記憶しております。

諸君が亜細亜大学を卒業していかれたら、新しい亜細亜大学の精神を各地に、各職場に作ってもらいたい。諸

君が友人と会った時、亜細亜大学の協力精神で同窓会を持っていたきたい。学生時代のことをしるんで思い出  
を語り合うニュー亜細亜大学を作っていたきたい。そういうような志望を描いて、今諸君は後輩を迎えるわけ  
だが、兄弟として暖かい気持ちで迎えてもらいたい。そして暖かい友情の間にルール、規律というものを教えても  
らいたいと思う。

## 指導者の教養——経史の学——

昭和四十二年八月、九州・阿蘇で開かれた社団法人・国民

文化研究会の「第十二回青年学生合宿教室」での講演速記

録。——国民文化研究会編『日本への回帰』第三集所載——

### 「経学」について

本日は指導者の教養ということを中心に、私の考えを述べたいと思います。諸君はやがて社会に出ればいろいろな方面で指導者になれるはずで、ところが現代の学校教育では、指導者としてどんな教養を身につけなければいけないかということを、ほとんど教えてくれない。だが昔の我々の先輩は、二つの点で指導者としての教養を受けていたのです。その一つは「経学」、これは宇宙と人生の意義をあきらかにする哲学とでも申しましようか。大体、昔の儒学というものがこの中に入ると思います。もう一つは「史学」、これは治乱興亡の跡をたずねて一つの哲学、あるいは政治学をつかむことです。こういう二つの点を昔の指導者は身につけたわけです。

これはヨーロッパにおいても同じです。大哲学者プラトンは「政治家は哲人であれ、思想を持て」と教えました。

た。それから諸君もご承知でしょうが、ギリシャの黄金時代をきずいた、歴史あつて以来の大政治家だつたといわれているペリクレスは、アゼンスの民に富を説かなかつたと伝えられています。やはり国家の生命についての、しっかりした考えを持っていたからでしょう。我が西郷南洲も「政府の本務を堅<sup>つ</sup>しなば、商法支配所と申すものにて、さらに政府には非<sup>あ</sup>ざるなり」と戒められています。政府というと、今日では国家と考えていい。本務というのは使命です。商法支配所と申しますのは、平たく言えば商事会社、「国家がその使命を見失つてしまつと国家は商事会社になるのだ」ということです。

ご覧のとおり、いま日本の指導者は残念ながら教養を欠き、哲学を持っていない。そして、唯一の政治的関心事といへば、どうしたら国民を安樂死せしめることができるかということにある。数年前から言われているように、日本の繁栄は世界的な驚異の的となつている。これは事実であります。しかし、反面においては、外人の批評はまた非常に鋭い。「魂のない繁栄である」とか、「あらゆるものがあつて日本がない」とか、「日本人は経済的動物である」とかいった具合です。

さらにドゴールが我々を代表している一国の総理大臣に対して「トランジスターの商人である」と冷笑したというのも有名な話ですが、これらには必ずしも酷評とだけは言いきれないところがある。だが、国民はこれらの批評に対してどれほど反省し、どれほど憤慨したか。日本がこれほどまでに外国から馬鹿にされた言動が横行するというのは、恐らくは空前のことではないかと思ひます。さらに現代のいわゆるマスコミの波に乗っている人気のある作家や批評家は、日々戯論<sup>げろん</sup>あるいは空論を書き、事実それ自身の姿を正しい立場で伝えるという人は実に少ない。これは日本にとつて実に大きな憂いであり、民族的な悲劇であると思ふ。これをそのまま放任しておくことは民族の一員として決して許されない罪惡だと思ひます。

国家が侮辱されても、国家の首脳者が冷罵れいばされても「そんなことは俺には何の関係もない」というような人はきつと国家滅亡の瀬戸際までできて、われ関せず焉えんという態度をとるにちがいない。ある人が「罪というものを二種類ある。一つは罪を犯すこと、すなわち泥棒どろぼうとか、詐欺とかいういわゆる犯罪、もう一つは当然すべきことをしないこと、これも罪である」と言っておりますが、そういう意味からすれば、傍觀者は国を亡国に追いこんでゆく民族的な罪人だとも言えるのです。

では国が減びる原因は一体何か、諸君は旧約聖書にアモス書という一章のあることをご承知だろうと思うが、アモスという人は紀元前七〇〇年、孔子や釈迦よりも古いころ、ユダヤに生まれた極めて身分の低い牧者であります。国を救う天命を受けていわゆる予言者になった人です。そのアモスが声を励まして、自国民に亡国の原因を訴えた。「パンの饑饉きうきんに非ず、水の饑饉に非ず、エホバの言を聴くことの饑饉なり」エホバの言、すなわち神の言ということですが、これはユダヤの建国精神ということで、神自身ということを指しているのです。つまり神を忘れたからユダヤが減びたのだ。亡国の原因は建国精神である神を忘れたからだ。こういうことをアモスは言ったのです。建国精神を堅持するか否かによって国の生命が左右されるということは広く国家興亡の原理を示したものであると思います。

明治維新のことは見ましても、このことがよくわかるのです。明治維新の志士たちは、革新原理というものを決して外側には求めなかった。国家興亡の原理を内においてつかんでいる。すなわち、日本の建国精神でありました「一君万民」、この一君万民の精神に復帰するということを期して、君と臣との間を疎外している一切の幕府的な勢力を打倒することに精力を集中したわけです。志士たちは国家の萎靡いび、腐敗、墮落の原因は、その国家が勃興ぼくきよう発展した原動力である建国精神を軽視、忘却するところにあると考え、この国内の悪を一掃して善を呼びお

こす、ここに革新原理を見ていたのです。さすがに維新の志士であると思います。彼らは国家の傾くのを風馬牛のように見ている民族的罪悪にはどうしても我慢ができなかったのです。

南洲先生も「正道を踏み国を以て斃るるの精神なくば外国交際は全かるべからず」と言っておられますが、国家生活というのは道義を背骨として、たとえそれによって国家が倒れるとも悔いがないという心構えがあつてこそ、そのまま命を永遠に維持することができ、発展せしめることができるのです。

日本の産んだ偉大な経済学者に二宮尊徳先生がおられる。先生はかつて千葉県の印旛沼の堀割り検分というのを命じられた時に、すぐには現場に行かず、まず儒者を遣わして、その地方の土民の教化、道徳的なレベルの向上をはかられたと伝えられております。また世界的な経済学者のアダム・スミスの名著『富国論』は倫理学の一篇として書かれたものであると聞いております。本当の経済学者というのは東西軌を一にして、さすがに立派だと思ひます。

国家が道義を軸として、国民生活を規正しなかつたならば、たとえ経済的に発展しても国民はやがて放将になり、闘争にあけくれるようになってしまふ。国家は一時的に繁栄を見せても本来の使命を忘れたならば、南洲先生の言われたように非常に次元の低い一つの経済組織体になってしまうのです。国家が単なる経済組織体になってしまうえば、階級闘争は日常茶飯事となり、自己中心の享樂思想が全国を支配し、民族滅亡の道を急ぐということになると思います。こうして国民は愛国意識を失ひ、自意識、勤勞意識を失ひ、不当な欲望だけが氣勢を支配し、自分が満足いかなければ、皆、国家、社会のせいにしてしまふようになります。正に亡国の姿であります。

古い言葉に「一夫耕さざれば天下その飢えを受く、一婦織らざれば天下その寒を受く」というのがある。一人

の男が田に出て耕さなければ天下が飢える。一人の女が機を織らなければ天下は寒さを受けるといふことです。一人が怠けるとその影響力はやがて全国民につながるわけです。昔の人はこれを非常に戒めた。「俺一人がやっても」と思う人が多いが、決してそうではないのです。

## 「史学」について

次に「史学」ですが、歴史の教えるところは実に厳正である。我々の先輩は歴史を研究してその原因結果を見究め、政治にそれを応用した。明治維新の大動力となった『大日本史』は水戸の彰考館の修史局で編纂されたものですが、彰考とは「往を彰にし、来を考える」という言葉から出たもので、過去を明らかにし将来を考えるという意味なのです。それは論語にある「温故知新—故キヲツネテ新シキヲ知ル」と同一の思想ですが、過去の日本を知らないでは明日の日本を知ることができない。こうして歴史の重要性を知ることができるのです。

しかし、戦後は歴史を無視、あるいは軽視する風潮が大勢を占め、ただ眼前の事柄を追いまわすだけでその日の日を過ごしている。これは占領政策の謀略に因るところ大なのです。中国の清朝時代の一学者の言に「人の国を滅さんとすればまずその史を断つ」というのがある。占領軍は終戦の年の十二月三十一日の覚書で日本の歴史、地理、修身の授業停止を命じました。これが一つの大きな原因になって青年学生の間には自国の歴史を知らず、自国の歴史になんの興味も持たないような者が続出し、この非歴史的傾向によって彩られた若者たちの中に、暴力主義者が多く目立つのも、思想的な根拠をもたない者の迫るべき姿を示す好個の例証であるといわなければなりません。



歴史を断つとは歴史を無視するということはもちろんですが、その中には歴史を故意に改作し、変作することも含まれていることに注意しなければなりません。我々は不断に改革し、革新していかなければならぬが、改革または革新の必要が国民的生命の沈滞、退廃から生じたものである以上、改革、革新の原理は国民的生命に潜んでいる偉大なものを認識自覚してこれを復興させる以外にはないのです。敢て建設原理を外国から輸入する必要はない。木に竹を繋いだような改革原理は悔を百年に残すことは歴史が明らかに示しています。

中国には北朝の名臣司馬温公が心血を注いで作った『資治通鑑』という史書があります。日本でもずいぶん読まれた書物ですが、私は三重県の津藩から出された『資治通鑑』を持ってあります。このように各藩で出されていました。この歴史の書物に「鑑」、すなわち鑑みるという字が使われているのは面白い、まことに意味深長だと思います。唐の時代には『唐鑑』、明の時代には『明鑑』というのがあった。日本にも『大鏡』『水鏡』『増鏡』などというのがある。つまり人々は歴史という鏡に写して己の姿をととのえる。単に外形のみでなく、自分の心を歴史の鏡に照らしてそこに行動の指針を求めたのです。

明治維新史という鏡を見るたびに、私は常に次のように思うのです。維新の志士たちはいずれも日本の建国精神である「天下一姓」、すなわち我々は皆一姓であるという自覚のもとに、「すめらぎ」すなわち日本国民の統一者である天皇を中心とした日本政治に復原するため一身を捧げたのです。しかし、今や国民は天皇に対して国家の統一者としての認識もないし、服従や尊敬の心もないのです。国家に中心なく、統一なく、一人一人の国民がバラバラに生活を営んでいる―まことに亡国の兆しといわなければなりません。かくして明治維新史を回顧することは、そのまま昭和維新史を創作する唯一の道であると思います。

最後に諸君に一首の和歌を紹介したい。それはここにおられる夜久先生、小田村先生の先師であり、和歌の先

達だつた三井甲之先生の歌です。

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根<sup>やまとしまね</sup>を

我々の命をつみ重ね、またつみ重ねて守るべきものは正に大和島根、すなわち、我々の先達が心魂を傾け尽くして築き上げ、我々に残してくれたこの大和島根——祖国であるという意味であります。

だが、この大和島根の現状はどうか、諸君は立派な指導者として今後さらに成長する。私は我々のこの大和島根をさらに磨いて大をなさしめることを、若い諸君に非常に期待しております。

# 次代を背負う若人たちの動力

## ——亜細亜学園の建学精神に思う——

——昭和四十三年度『大学案内』所載——

幕末に広瀬淡窓という学者が出た。淡窓が塾生に示した有名な詩にこういうのがある。

「いふことをやめよ、他郷苦辛多しと。同袍友あり、自づから相親しむ。柴扉曉に出づれば、霜雪の如し。君は川流を汲め、我は薪を拾はん」

学問するものの心がけを示した。絶好の教訓である。他郷で勉学するのは苦辛が多いなどというものではない。学問の道というものは、友達同胞があつて、互いに親しみ、励まし合つてこそ、一筋に進むものだ。寒い朝、早起して柴の戸を開いて見れば、霜が雪のごとく降っている。さあ、今日もまた勉学日課のはじまりだ。君は川の水を汲んで来い。私は薪を拾つてくる。

時代は一変したが、この研学精神は少しも変わらない。学問の道とレジャーの道との間には、交差点はない。東は東、西は西で平行線をたどり、相合う機会はあるまいと思う。外人の日本評としてよく引用される語に、「魂なき日本の繁栄」とか、「あらゆるものを持つて、自分自身を持たぬ日本」であるとかいわれているが、まさに反

省すべきものがあり、この語はわれらを磨く他山の石である。「魂なき日本、自分自身を持たぬ日本」ということは、裏をかえせば亡国日本ということである。明治維新を去る百年にして、外人たちからこのような日本評を聞く。「日本人に国家勃興の氣魄なし、民族的生命の沈滞退廃をここに見る」と指摘されたものと思う。

亜細亜学園は建学精神として「自助協力」を掲げ、研学の指針道標としている。「自助」とは、汝の最上・最強の助力者は、汝自身である。汝は汝自身の能力に頼るべし。汝の主人公は汝自身である。他人の援助を待つなかれ、彼等に依頼するなかれということである。かくて汝は、汝自身の心田を汝自ら耕して、自ら種子を蒔き、自らこれを刈り取るべしということである。汝の真価は、こうして作った汝の品性によって見ることを得るが、このための動力は自助精神によつて期することができ、汝自ら学問の道を拓き、汝自ら良心を磨き、汝自ら国家社会の風潮を正すことができた日本人として、また社会人として立派な存在を示すことになり、汝の真価が出ることになる。国家もその構成分子としての汝を珍重すべく、同時にこれが集合体としての国家の權威を高めることになること当然である。しかして「自助」あり、はじめて「協力」の実があること明らかである。「自助」なき「協力」は隷属卑屈に墮す。前記、淡窓の詩にあるごとく「君は川流を汲め。我は薪を拾はん」の協力精神が深く待望される時代である。亜細亜学園は、その建学精神が、次代を背負う若人たちに対する前進力であつてほしいものと期待している。

# 「大学問題」に関する基本方針

昭和四十四年五月三十一日、専任教員会議において表明された学長の所信を抜粋したものである。

全国的に大学紛争の激しいときに、本学はこの方針を根底に、毅然として教育の本旨を貫いた。

— 広報紙『THE ASIA』創刊号（昭和四十四年六月九日付）掲載 —

いまや所謂「大学問題」の推移を見るに、日本の革命化を企図する者の戦術、戦略の一環と結びつき、之が一部学徒の中核分子は、わが歴史、伝統の破壊に狂乱し、研究、教育の場を蹂躪して省みず、而して良識を抹殺し、世論を無視して独断独走、人類の逆転時代を夢みているようである。かくてその思想動向は、世相大動乱の招致を忍ばせるものがある。教育の権威失墜極まりというべきであらう。しかも之が主因は、物質文明の代償に精神と魂を売り払ったところにあると思う。

大学問題の場合、大学は古来から研究と教育の場であつたこと明らかで、このことは、現時においても勿論、将来においても決して変わることはあるまいと思う。

わが亜細亜学園は、現時流行の紛々たる世論俗説に阿諛迎合することなく、亜細亜学園独自の道標を樹て、以て独自の進路を拓くべきものと思う。この道標は、日本復興の大道にも通ずるものであること信じて疑わぬ。

私の見解を以てすれば、当面の大学問題に対するわが亜細亜学園の基本方針は、左の如きものであるべきもの

と思う。

一、学園は、その本来の使命たる研究と教育に専念すべきものであるから、之がため学園は、学園の自由と秩序の維持に全力を尽くすべく、苟も暴力の横行など断じて許してはならぬ。

二、学園は、この基本方針堅持のため全学を挙げ協力一致の体制を布き、学園秩序の破壊活動に対し、警戒を厳重にすべきものと思う。

三、学生と教師とが師弟関係にあることは、教育精神の根本事であるから、教師は学生を教導し訓戒し、以て学生に対し人間形成の一役を果たすべきものと思う。

四、亜細亜学園における学生生活の在り方、学園に対する学生の要求、意見の開陳等は、学生の代表機関である学友会を中心にしてまとめ、学友会と協議して実現に力むべき方針であり、学友会以外のものによる団体交渉の如きものは之を認めない方針である。

昭和四十四年六月四日

# 教育は国家最大の関心事

— 広報紙『THE ASIA』第二十号（昭和四十四年十二月二十六日付）掲載 —

教育は、国家、社会にとり最大の関心事であるべきものと思う。いうまでもないが教育は、人を育てることが使命である。しかし、ただ育てるということでなく、次代の国民を、かく育てたいという理想をもつて育てることに意義がある。いかに世代は変わり、また移り行くとも、国家、社会の主役を務むるものは人間であることに間違いはない。かくて人間の素質が下落したなら、国家、社会もまた従って下落し、ついに自ら求めて盛衰の交替期を招来し、自ら求めて衰退裡に姿を消すに至ること、歴史の明示するところである。

「亡国はすべての場合において自殺的である」とは、真理である。

いまや我が国の経済力は、米ソに次いで世界第三位となり、その発展力は世界驚異の的となったと伝えられている。しかるに、この経済力の驚異的發展の反面において、民族精神が逆転して退廃し、歴史伝統を尊ぶ心が埋没し、道徳信義が軽視される大勢を作ったことは否定し得ない。

かくて官民ともに、唯物主義の奴僕、利那主義の謳歌者に成り下がりがりつつあることも、事実である。この点は、海外の日本評価が、次第に酷しさを加えつつある傾向にも反映されている。現にこのことは、最近、私が読んだ外国有力紙に掲げられた日本紹介の記事でも、窮うことができる。

すなわち日本人は自ら国民として漂流していると感じてゐるらしい。しかし個人として、世界における大国の位置を維持せんとする負担から免れて、ビーバーすなわち「うみだぬき」の如く働いてゐる。

すなわち電気炊飯器とか電気洗濯機とか、テレビセットとか、電気冷蔵庫とか冷房装置とか、その他いろいろのものを作ったり、買い求めたり、さらにマイホーム、マイカーは、幾百万勤労者やその家族の願う国民待望の目的となつてゐると指摘して、我々を揶揄してゐる。かつて喧伝されたエコノミックアニマルと呼ばれたほどの日本国民に対する侮辱を憶う時、これではまだ、世界的視野に立つ日本の使命など言われた義理でない。

良薬は口に苦しか。苦くとも率直、端的に言うべし。我が国家、民族の誇りが単に経済的優位にあるとするならば、その理想はあまりに低く、その志やあまりに小である。否、歴史は経済氾濫が、ともすれば道徳破壊を招き、その長所が却つて仇となつて国家民族の自殺の原因となり、経済繁栄は槿花一朝の夢と化し去ることのあることをも、否定してゐない。思つて茲に至る。教育と教育者の負う使命の重大さに身震いする感を、禁じ得ない。

人は死魚のごとく流れに従つて流れるのみが、能ではあるまいと思ふ。活魚のごとく、流れに溯つて泳ぐ気概があつてほしいものである。

私は教育者の末席を汚すものとして、敢て先生方の驥尾に付して、教育の大任の一端を果たしたく念願してゐる。

亜細亜学園の建学精神としての教育方針は「自助協力」であるが、これは、自らの力でわが前途を拓けということで、まことの協力は、この精神から生まれるものであることを強調したものである。

我等はこの方針で、亜細亜学園独自の途を切り拓いて行くことを誓つてゐる。而して教育、学問は鍛錬である



という先人の教訓に従って、人間形成に努め、国家社会が<sup>よ</sup>拠って立つ国民精神の<sup>かんよう</sup>涵養に努めたいと思う。先生方の御高評を求むること切なり。

# 次代を背負う若人たちの動力

## 心田を拓く自助協力精神

— 昭和四十四年度『大学案内』所載 —

人の価値は、その人が誠実であるかどうかで決まる。誠実の反対は偽善で、誤魔化<sup>ごまか</sup>して世を渡ることである。誠実は英語でシンセリティー(sincerity)で、その語源はラテン語のsine(無し)とcara(蠟<sup>ろう</sup>)の二字から成り、誠実とは蠟無しということであるという。面白い話である。ローマの崩壊前夜で、道德退廃時代の話であるが、建築界もその例に漏れず、当時の腐敗世相を反映して、建築は外観皮相の美を装うことにつとめ、建造物の実体である堅牢性<sup>けんろうせい</sup>に力点をおくことを疎<sup>おろそ</sup>かにした。かくて破損せる大理石を白蠟で塗りつぶし、誤魔化して用うことが流行した。よってローマ市民は、石の家屋を建築するに当たり、請負業者と特約を結び、必ず無蠟の石材を用うべき旨を要請したと伝えられている。以来、蠟無しということは、誠実を意味するものとなったという。

思うに、歴史を知ると知らないとは、学と無学との岐路となる。歴史は、国家民族の興亡盛衰に関する哲理を示すもので、この哲理は国家民族をして例外なくその支配下に立たしむるものである。ここにおいて我等は、現代の病巣について思うべきものがあると思う。すなわちこの病巣は、原因と結果との主客転倒的錯覚の産んだ

現象であるということである。その一例を政治に取ってみる。

政治は結果にして、道徳は原因であるという。見やすき道理を踏み違えているところに病源があるわけだと思ふ。病源を除くことをせずして、どうして健康体を期し得るか。改革、改革というが、政治改革の百万遍を叫んでみても、政治改革の空転を繰り返しているのが現状なのである。頼山陽の道破したごとく「国の国たる所以は其の士あるを以てなり」とは千古の名言である。士とは、道徳を踏み行ふものという。前述したごとく、国家興亡史の教うるところは、例外なく、原因結果の転倒が産んだ道徳退廃が主因となり、国家は自ら亡滅の悲劇を招き、之に反し、原因結果の哲理を明徴にして、まず道徳振興を計つた国家が隆昌の道を辿つたことを明示している。学問の權威はこの哲理を明示しているから、その權威保持が期し得られるわけである。而して国家は個々の生命が然るごとく、一貫不斷の創造的行程を辿るものであるから、我等は歴史の指針に則り、過去の結果が、未来の原因たることに想到して、国家に対する責任の重大を自覚すべきものと思う。

本年は、明治維新百年に当たるが、明治天皇は、国家興隆の基礎は教育に在りとの信念を抱かせられ、教育の重大性に徹せられ、維新断行の基礎を教育振興におき給うたこと、周知のとおりである。刻々に変転する内外の時勢に対処すべき人物の養成に、最重点を払われたること、今日これを回顧して、国民は等しく、かつ深く反省すべき点である。明治天皇の御製である「いにしへの御代の教にもとづきてひらけゆく世にたたむとぞ思ふ」は、精進また精進、已むことなき気魂と歴史伝統精神の回顧との、両つながらについて垂範されたもので、明治天皇の偉大な御明識を忘れてはならぬ。

亜細亜学園の建学精神は「自助協力」で、われらはこの自助協力精神を研学教養の指針道標としている。「自助」とは、汝の最上最強の助け主は独り汝自身である、汝の前途は汝自らの力で開拓すべし、という精神をいう。人

生はお互いの協力で意義づけられているが、その協力は自助あつてのことで、自助なき協力は權威なし、個人において然り、国家においてまた然りである。

本学園の教育方針はこの建学精神で、まず人物養成を期し、誠実すなわち偽りなき汝自身の魂をもつて、万代不易の哲理を確実に把持すべしということに在る。かくて、まず自ら自立し、もつて国家を自立せしめ、もつてアジアの黎明期に、自立の新風をアジアに送るべきことは、今や正に日本に課せられたる重大使命である。

本学園に学ぶ学徒諸君の夢は、天翔けるものがあると思う。

## 敢て諸君に期待する

—昭和四十四年度『学友会誌』所載—

新入生諸君、入学おめでとう。

諸君はこれから大学生活の第一歩を踏み出し、人間形成に大事な教養を深めて行くことになる。大学教育は、学校教育法その他で規定されているが、要するに人間形成が目的で、これがための重大使命を帯びたものであり、教育の代表格のものが大学であると言われ得ようと思う。勿論、人間形成のための教育の場は、独り学校教育に限らない。天地自然の如きものも、我が師、我が友で我をはぐくみ育ててくれる。要するに我が心がけ一つで、人間形成の道は随所に拓けるといふものである。

我が亜細亜学園は、建学精神として「自助協力」の精神を有っている。「自助」は自立を意味し、自己の最大の助力者は、自己なりということ、他力に頼らない、自己の運命は、自ら切り拓くべしということである。よって教育は先ず、自己の心の田を自ら耕し、開拓すべきことの重要性を教うべきものと思う。

古人の教訓の如く、「博く学ぶべし、審らかに問うべし、明らかに弁ずべし」というのが学問の道であり、いずれも自力によって期し得られるものである。この自助精神あり、而して協力精神が湧き出るものと思う。

自助なき協力は、魂なき社交人において見られ得る。我は彼の自助ぶりを見て、はじめて、握手し、協力を誓

うことができる。

イギリスの一詩人は、「低き生活と高き思想」と謳<sup>うた</sup>っている。生活が高く、贅<sup>ぜいたく</sup>沢になると思想が低くなり、ついに精神が減<sup>へ</sup>びてしまふ。墮<sup>だ</sup>落は、思想の低いところから来る。生活といえは經濟至上主義、政治といえは階級独裁制と、これでは、世界興亡史を識<sup>し</sup>らない浅慮短見の人生觀に立つもので、どう見ても學問したなどと言われたものでない。

「簡儉作<sup>ル</sup> 家風<sup>一</sup>」という箴言<sup>しんげん</sup>がある。簡儉すなわち簡素生活は立派な家風を作るということで、前記詩人の詩想を裏書きしている。家風の美風は國家勃興<sup>ぼつこう</sup>の基礎であり、後進子弟をして、天下國家のために身を挺<sup>ひ</sup>すも可なりという大望を抱かしむるに至るものである。

いまや内外時局は極めて多難深刻である。この大切時に際会して、學習に勵<sup>いそ</sup>む諸君は、自らの責任の重大さに想到して、次代を担<sup>か</sup>う準備のため、寸時を惜しみ、万全の努力を傾けられたし。

敢<sup>あや</sup>て諸君に期待する。

# 新時代の先駆者たれ

—昭和四十五年度『大学案内』所載—

私は『建学精神を語る』でこう述べている。学問の目的は真理の探求にありと言われているが、それでは真理とは何か。ある人は真理は自ら自己を支持するものであると断じている (Truth supports itself)。一見識であると思う。すなわち真理は、自立し他の何ものにも寄り頼まないものとのことである。

これに反し虚偽とは、自ら自己を支持すること能わず、他の何ものかに依頼するものであるということになる。換言すれば自立は真理であり、依頼は虚偽であるということである。真理の本体が自立であるということなら、これを学ぶものの心構えも自から定まることと思う。

本学の建学精神である「自助協力」の「自助」は、自立を期したもので、「自己を助けるものは自己なり。自己こそ最上の助け主なり」ということを強調している。自己の運命は自己の力で拓くべし。流行の開拓精神も自助精神にはかならぬ。「自助」は眼を徒に外に注ぐことをやめて、内に注ぎ見てその威力を知ることができる。自己の内にある心田を自ら耕すことである。

かくて「建学精神」の語る「大学」は、「自ら学ぶ」ところ、自ら進んで己を教育するところである。自ら進んで己を教育するところということは、受動的 (passive) でなく、能動的 (active)、すなわち積極精神を養うところ

ろであるということである。この自助精神を身につけて社会に出た大学人こそ、いわゆる college bred すなわち大学で育てられた実力型人物である。

また、この実力型人物が、ユニヴァースすなわち世界に通用し得るもので、社会生活を果たし得るものであると思う。

学問は、社会生活における有用な知識、技術であるから、もし、人と人との間に協力交流関係がないなら、学問はあり得ない。而して人と人との間における協力関係をつくる訓練を経た人こそ、真の学問をしたものということを得べく、さもなくば学問は、社会生活に要はあるまい。

本学園が、自助精神と表裏一体をなす協力精神を重視して、建学精神とした所以である。

本学園は、学生同士はもちろんのこと、学生と先生との間に親密な協力交流関係が生じ、夢多き大学生活が実現されることを期待している。

このことは、いまや教育界の流行語となっているシステム（制度）、メソッド（方法）、プラン（計画）という、皮相形式、手段の改革だけでは期待し得ない。大学改革の道は、大学の目的、精神、内容という、教育本来の使命に託されたものを把握した教育精神によって、開発されるものである。

いまや世界は、史上未だ見ざる大変革時代に入っている。原子力の解放によるエネルギー革命、電子工学による情報処理革命など、新しい巨大文明の誕生に迫られている。しかもその反面において、この画期的世界大転換時代において、人々の良識と国家モラルが失われつつある傾向をも否定し得ない。さらばこれが結果はどうなるか。恐らくは産業機構や頭脳機関の発展によって、生活のレベルは上昇されるであろうが、精神面の発育がこれに伴わないなら、ついに人々は、これがために自ら墓穴を掘り、そのうちに埋没させられることになる。



ここにおいて私は、日本人の適應能力と民族的エネルギーを想起する。而してこれによって、波瀾万丈の彼岸への航海に成功せんことを、期待している。而してこれが成功の動力は、教育にある。教育によって形成される人間像にある。日本の歴史を觀るに、轉換時代における大化改新も、明治維新も、民族の適應能力と民族的エネルギーを見事に發揮して、危機を克服して前進した。而してその因<sup>よ</sup>つて来るところが、人々の良識と國家意識の明徴であつたことは、これを否定し得ない。

我が亜細亞學園は、その「建學精神」によって、天下の人材を養成し、以て新時代開拓の眞の先驅者たらしめんことを期している。

## 研究のこころと理想像

―『日本経済短期大学紀要』創刊号（昭和四十五年十二月十五日）所載―

このたび、日本経済短期大学から研究誌「短大紀要」が発刊されることになった。まことに意義深く、また喜びに堪えない。心から祝意を表します。

研究ということであるが、現代のいわゆる脱工業社会における経済現象は、時代色を反映した特異性のものが多く、これが探究に当たるとは容易でないと思う。現に見る生産の高度化は、情報革命の結果であるが、同時にこれによって生じた現代社会に対する欲求不満に対しても、真の解決策があるべきものと思う。

而して、その解決策の一つとして、いわゆる生産の量から質への問題が、関心事となってきたわけである。かつてラスキン<sup>ラスキン</sup>は、経済倫理を説き、生産について「正直な生産」オネスト・プロダクション<sup>オネスト・プロダクション</sup>ということを力説した。而してこれがよい対象は、農業であった。カーライル<sup>カーライル</sup>は、「農聖人」Peasant-saint<sup>ペサント・セント</sup>という語で「手に鋤<sup>すま</sup>を取りながら、心に宇宙の大真理を貯<sup>たくわ</sup>える人」を描いた。いずれも生産の気高さを示した大文字である。

しかし、いまや農業は、科学力の前に活殺自在に操作され、その生産は一に懸<sup>か</sup>つて、経済力の支配下にあるに至った。けだしこれ、時代色を反映したもので、お説教趣味<sup>お説教趣味</sup>の如きは、時流の前に神通力を失い去られたものといわれている。分配<sup>しか</sup>然り、消費<sup>しか</sup>然りで、昔の経済倫理がいまは経済空理<sup>ちやうしやう</sup>として嘲笑<sup>ちやうしやう</sup>され、時代を反映してか、新

装の経済倫理が颯爽<sup>さつそう</sup>として登場してきたようである。しかしながら現代の新経済倫理が、現代生産の質的向上にどれだけ役立っているかについては、多大の疑問がある。

思うに現代生活は、経済成長と技術開発に追いついて自然から遠ざかり、自然への郷愁を忘れ、ついに身心ともに疲れ果て、自殺的運命を辿<sup>たど</sup>りつつあるのが実相である。現に大量の消費は、大量の廃棄物を自然の懷に流出せしめているが、これは自ら求めて自然との調和を破り、次代への破局を招くものであること、容易に推察し得る。かくて人類史上、最大悲劇が展開されつつあることも否定し得ない。

かくして、睿智<sup>えいち</sup>による權威ある「研究」が要求されてきたこと当然である。いうまでもなく、現代生活の連帶観から見れば、研究のこの一角は、研究のかの一角に通ずること明らかであるから、一研究が他の研究に資料を供し、他の研究が当の研究に示唆と協力を齎<sup>もたら</sup>すこと自明の理である。

而して、生産の拡大化は、未来学の領域に達しつつあるが、これが誘導力は「心に宇宙の大真理を貯<sup>たくわ</sup>える人」であると思う。研究は、理想を抱き謙遜<sup>けんそん</sup>の態度によって大成せらるべきものであること、現代においても守らるべき鉄則である。

# 国土に花咲いた民主主義の匂り

— 広報紙『THE ASIA』第二十六号（昭和四十五年四月十日付）掲載 —

現代の欠陥は、主客本末を転倒した現象に之を見ることを得ようと思う。例えば政治、教育、産業その他いろいろの方面に亘って万百の現状打破的改革論が流行しているが、多くはこれ制度、組織、方法の面である。しかるにこれに一切の制度、組織、方法は、人間の心の所産であるから、改革論には身心の修養鍛錬が先決であり、かつ何より大切で、大事である筈と思う。

かくて政治に權威なしと謂われるわけは、政治家が専ら、欧米流の政治的組織制度の末梢に捉われすぎて、根幹の国民的信望を収め得ないところにあるのではないか。

君子無くんば以て治まるなしと言った孟子の語は、千古不易の政治的鉄則である。いま時こんな講釈をすれば、そら丁寧だと一笑に付されるかもしれないが、鉄則は嚴なるかなである。

我等はわが歴史を辿る時、現代的民主政治に劣らざる立派な民主政治が、広く古くから、わが国に行われていたことを識ることができる。

私のふるさととは少年隊で有名な二本松であるが、霞ヶ城址の出入口に、戒石銘という箴言が大自然石に刻まれて現存している。戒石銘は、藩是としての施政方針を天下に示したもので、次のとおりである。

爾俸爾祿 なんじのほうなんじのろく

民膏民脂 たみのこう、たみのし

下民易虐 かみん、しいたげやすし

上天難欺 じょうてん、あざむきがたし

寛延<sup>きし</sup>己巳<sup>し</sup>之年春三月

（意訳）なんじの受ける俸祿はこれ人民のあぶらである。人民は搾取し得るが人力を越えた天意は欺き得ない。

この銘を以て現代世相を測るに、大学問題といえ予算<sup>よざん</sup>分捕合戦といえ、人民のあせとあぶらの結晶である血税が、なんと多額にムダ使いされているかに想到せざるを得ない。

政治はつねに自己反省の問題である。責任を国家、社会、制度、組織に転嫁して、自らは恬然<sup>てんぜん</sup>として恥じないということでは、民主政治は怒りかつ泣くだろう。

絵にかいた花には匂<sup>かおり</sup>りが無い。われらの国土に咲いた、匂りの高い生き生きとした花があることを忘れていないのか。

# 教育と情報社会とのコミュニケーション

— 広報紙『THE ASIA』第四十号（昭和四十五年十一月五日付）掲載 —

人間の生活は、かつての産業革命で生じた工業社会によってその様相を一変したが、いまやその産業革命は、使命を了<sup>お</sup>えて、次代の脱工業社会すなわちポスト・インダストリアル・ソサエティに移行することになった。このことは、いわゆる現代社会の特色と称せられる管理社会、情報社会を指すもので、電子計算機の開発など一連の情報革命によって代表せられる新傾向である。

かくて人間生活は、この種の機械の発明によって自ら記憶し、計算し、管理し、制御する煩わしきから免れて、その生活態容をも一変しようとしているようである。いわゆる未来学が喧<sup>けん</sup>伝せられるゆえんであると思う。

情報社会が人間生活に及ぼす影響が画期的であることは絮<sup>じよせつ</sup>説を要しないが、その物質的、生産的現象の巨大化に対し、精神的文化的現象の断絶化が目立ってきたことも、否定し得ないところである。もし個人、家庭、社会、国家、国際間における人間形成の問題が、軽視断絶さるることにでもなったら、せっかくの知的能力の開発はかえって両刃<sup>もうは</sup>の剣となり、人間絶滅の動因となること明らかである。

かくて教育の重要性について特に力説されるゆえんが、ハッキリ打ち出される時代となった。すなわち、教育と産業社会とのコミュニケーションの必要性が、強調されるに至ったことがそれである。

学生が一人でティーチング・マシンを相手として勉強することも結構であろうが、それだけで人間形成の基礎が出来るかといえ、そうばかりであるとはいえないと思う。

人間形成には、人間の生命とその継続という根本問題の解決なくしては、これを期待し得ない。そして教育というものは、時代に即しながらこの根本問題と取り組み、これを次代に引き継ぎ、発展せしむるところに重要課題があるべきものと思う。

教育の本質は、教育方法の開発に對し守るべき一線を有すべきことを、忘れてはならない。

よくいわれることであるが、教育すなわち英語のエデュケーションは、ラテン語のエデュカティオが語源で、「引き出すこと」の意味を有つものであるという。語源はとにかくとして、人間は本来そのうちに貴重精神を有つてゐるものであるが、問題は、これをどうして引き出すかにある。そしてこれが引き出し役をつとめるのが、教育であるべきものと思う。

教育は、施設で教えることだけが目的でない。人間のうちにある貴重精神、すなわちいのち、すなわち魂に呼びかけて、人間形成に必要なものを引き出さしむることにある。このことは、明治維新時における塾教育、現時における寮生活などが、特に留意されてきたことの意義を知るべきである。

我が亜細亜学園は、建学精神として「自助協力」を掲げ、以て学生に對し、人間形成としての自力の開拓精神と、之による協力精神の喚起を期している。そして不充<sub>こ</sub>分ながら寮施設を活用し、またセミナーハウスを新設して、先生と学生とのコミュニケーションの機会を有たしめてゐる。

いまや内外情勢は重大であり、しかも複雑多難を極めているが、これが運命を決すべき主体は依然として人間であり、これを育成すべき教育の本質は決して変らぬものと思う。

## 洋上大学の壮途に餞す

昭和四十四年から学友会主催による洋上大学アジアセミナーが開始された。

―『第二回洋上大学』（昭和四十五年）リーフレットの餞の言葉―

林子平は、高山彦九郎、蒲生君平とともに寛政の三傑と称せられた。その著書の『海国兵談』と『三国通覧』は有名であるが、『海国兵談』の大意は次の如きものと伝えられている。「西洋諸国は概して地を奪い疆域を拓くを以て務とす。威力日に強く又航海の術に長ず、然るに我が日本国たる周圉皆な海にして凡そ江戸日本橋よりして欧羅巴洲に至る其間一水路にして阻隔あることなし、彼来らんと欲すれば則ち来る。備無くんばあるべからず」と。かくて彼は、海防の急なるを力説してわが長夜の迷夢を破らんとしたのである。江戸日本橋を流るる水は、テームズ河に通ずると喝破して日本の夜明けを予言したところは、流石に卓見であった。

海を制するものは世界を制すると断じ、七つの海に君臨したイギリスの姿も、今や斜陽に立つの感がある。まさに運命は走馬灯の如し。憶うに昨日の王者は今日の伍卒である。備えあれば憂いなしの箴言は、深く反省すべきものと思う。備えあるということは時代に後れを取らないことである。宮本武蔵は、勝負の秘訣は「拍子を弁えること」すなわち移り変わる瞬間、瞬間を捉えて、自己の活動に順応せしむることであると喝破した。味わうべき教訓である。



いまや世界は、文字通り「海洋時代」である。これはかつての世界支配という意味での「海洋時代」ではない。海洋の意味する世界共存が、新時代において実現を期せんとするものである。すなわち海洋の有つ特色を、現に反映せしむべきものと思う。

我が亜細亜学園は、今年も、雄図を胸に描く学生諸君による「洋上大学」の実現が見られることを、大いに誇りとしている。亜細亜学園が描く建学の意義から見て、アジアの融合を計る絶好の機会でもある。学生諸君は前述した教訓を胸に秘め、見聞を<sup>ひろ</sup>拡め、以て他日の備えに万全を期せられたし。一路平安を祈る。

# 現代に体育の重大性を憶う

—昭和四十五年度体育会年誌「躍動」第二号所載—

学生時代の生活目的は昔から不変であつて、将来もまた不変であると思ふ。すなわち、体、智、徳の教養を身につけることである。いわゆる七十年代の転換期に臨んで、内外情勢は幾変転することであろうが、人を育てる教育の目的が、学生生活の内容を充実せしむる教養を計ることにあることに変化はなく、その道標は以上三つの柱にあることも明らかである。而してこの三つの柱は互いに支えあつて、教育形成の核心をなすものであるから、学生時代は細心留意して、この三つのバランスを崩すことのないよう、修養に心掛くべきこと肝要である。

私はここで、体育について寸言を述べようと思ふ。大学は教えてもらふところではなく、自ら学ぶところであるという所説は一見識であるが、之をハッキリと現実的に示しているのは体育である。別して、体育には守るべき厳格なルールがあるのが前提であり、また、同時に礼儀・節度が要求されている。これらの制約を自ら厳守して不斷に自己反省し、以て前進して已むことなき根性を養うことがその特色であるが、就中、特色中の特色として指摘されるのは、体育が団体心の涵養に力めていることである。

自己が属している団体のために自己を没し、以て団体の実力増強のため全力を尽くすといふことの結果が、対校試合などによく発揮される美風で、この美風は、愛校心につながり、やがて愛国心に結ぶことになる。このこ

とはまた、学生生活に養われるヒロイズム―英雄精神の発揚の機会にもなるものと思う。

ワートルローの戦いでナポレオンを破ったウエリントンの語として伝えられるこの戦勝の原因が、イートンの校庭で得られたものであるということは、対校試合の心理を解明した至言である。全身全力を傾注し、流汗絞血<sup>けっけつ</sup>以て雌雄を決すべき競技に正々堂々たる試合態度、すなわちフェア・プレイを発揮し得る人にしてはじめて、いわゆる盤根錯節という、最も、至難な仕事に当たり得るものである。

体育は、現実的な実戦的実践を生命とするものである。よって、現代学生気質の欠点として指摘されている、ものまね的な机上の空論や、イデオロギイ的レトリック（修辞法）などに対しては、何の權威も認めない。体育の求むるところは、良風美俗を生む団体生活を作りかつ営むことである。これがためには、自ら公共心を養うことが必要であるが、もともと学園はこの良風美俗を生命とすべき団体であるべきものであると思う。よって、この団体に所属している学生が、この団体の体質向上のため、さらに精進を期すべきこと、当然である。

而して、これがやがて校風を作り、先輩後輩を結ばしむる精神的郷土となること自然の姿である。いまや教育の田園は荒れ果て、学園に学ぶ青年学徒の心も荒ぶ<sup>すさ</sup>一方に傾くようである。これにはいろいろの理由もあるが、心のふるさとである郷土精神の喪失ということが主要原因でないかと思う。郷土なし、心の放浪も已む<sup>や</sup>を得ない現象かもしれない。しかしながら、脚下照顧<sup>きゃつかしようこ</sup>という語がある。問題解決の鍵は、案外に足下近くにあることを忘れてはならない。すなわち学生のふるさと郷土が学園であることを想うべきである。学園に來り学ぶもの幾千幾万人、東西南北より集まる。而して各人は各様である。しかしながら縁あつてここに学ぶ。師あり、友あり、お互同志が切磋琢磨<sup>せつさくさくま</sup>して将来の大成を誓う。ここに我等人生のスタートが築かれている。正に我等の郷土にあらざるか。郷土あり、郷土精神あり、愛校心あり、さらに愛国心あり、ここに我等は、活学の生まれざる砂漠のよう

な無人環境を越えて、活人活学地帯に出たわけである。

しかしながら体育精神の育成は、必ずしも運動や競技精神だけに限られていない。山川草木の自然美に親しむことも亦、体育を養うことである。体を単に動物の意味に解しては生活は墮落する。体は智と徳と三位一体となつてその重要性が解る。体育は身の鍛錬を行うものであるが、現代語でトレーニングと言えば馴染みがある。体育、運動には事前の予備的訓練動作が必要であるが、これは急の思いつきや速成で充分の期待は果たし得ない。トレーニングは教育、しつけ、調教という意味を有つもので身の懦弱を救うものであるから、克己摂生して難事に堪えるよう日ごろのしつけを心掛くべきこと大切である。大国民となる要素は体育精神を解し、之を化体することにある。現代における体育の意義は大きい。

# 自己の心田を耕作

—昭和四十六年度入学式訓辞—

昭和四十六年度入学式（四月十日）における祝辞。—広報紙『THE ASIA』第四十八号（昭和四十六年四月二十五日付）掲載—

新入生諸君、入学おめでとう。

諸君は今日の晴れの入学式に臨み、これまでに身心両面に亘り、ひとかたならぬ御苦勞を払って諸君を育ててくださった御両親をはじめ、先生、友人の方々の御恩に対し、更めて心から感謝の真心を表すべきものと思う。諸君はこれから大学教育を受け、高い教養を身につけるわけであるが、まず、大学教育の何たるかについて、認識する必要があると思う。

大学教育はただ単に受動的に教育されるものでなく、能動的に教育を身につけるものである。すなわち自ら学ぶ心掛けが大切であることを、まず意識すべきである。換言すれば、自ら己を教育する。すなわち自己の教育に対し、自ら「主導権」イニシアティブ initiative を握るということである。もし難問題に当面したならば自ら工夫し、勉強し、努力し、辞典、修養書を繙き以て自ら難境を切り拓き前進すべしということである。

よく言われることであるが、大学教育は就職の手段である、と。就職はもちろん大事、大切である。しかしながら、大学教育が単に立身出世の手段に過ぎないなら、折角せうかくの大学教育も身につかない。従って、就職しても充分に、その使命を果たし得ない結果となろう。何となれば、これでは人間として最も大切な自己の主体性の確立が、期し得ないからである。これでは、大学を出て社会人、職業人となっても、時に自ら顧みて自信がなく、何となく心に頼りがなく、如何いかに、淋さびしい存在であるかを、覚きることがあろうと思う。

亜細亜学園は建学精神として「自助協力」を掲げている。「自助」とは、自ら己を助けることで、自己の最上の助け主は自己である。自己がいちばん頼りになるものであるということである。かくて自ら自己を磨くことを以て、大学教育の主軸とする。

この自助精神あり、初めて、朋友ほうゆう相寄り、相助け、相睦ちうもくみ合うことができる。所謂いわゆる、切磋琢磨せつさくさくまは、かくして期し得べく、学生時代における真の朋友は、かくして求め得ることができると思う。また、かくして真の協力が産まれるものである。

かくて諸君は、この自助協力精神を身に体し、日々の生活を反省し、人間としての価値標準を高める修養に心掛くべきものと思う。

而して、人間の価値標準を高めることは、人間の道、道徳を体得することであるが、これはなにも難しいもの、しかつめらしいものでなく、率直に言って、「人を信じ」また、「人に信ぜらるる」ということである。このことは、古今東西を通じ、誤りのない生活の基礎精神で、諸君が将来大学を出て、活動の舞台に立つ時、まず要求されるべき第一の門鑑でもある。

さて、諸君承知の如く、今や世界情勢は、有史以来の大変革期にあり、この間において個人も、国家も、その

生活を維持し、その安全を計り、その発展を期することは、容易ならざることである。

而して、之が時代の勝利者たるには、それだけに人を心服せしむる心の準備が要求されることもちろんである。日本は、如何に経済大国となつても、アジアの友邦国から、所謂エコノミック・アニマルと評されたり、コマ・コ罗纳イゼーション（経済的植民地化政策）と評されるに至つては、深い反省がないなら、時代の勝利者どころか、時代の落伍者となることも覚悟せねばならぬ。

前に述べた、自己の教育に対し、自ら「主導権」を取るべしと言つた意味は、ここにある。而して、大学教育において、学び取るべきもので大切な点は、ものを見る眼を養うことであると思ふ。すなわち、ものの見方について、注意すべき点である。すなわち、

一、眼先の利害や現象に捉<sup>とら</sup>はれることなく、長期的展望に立つて観測すること。

二、一面的観察だけで満足せず、多面的、全面的観点に立つて観察すること。

三、枝葉末節の見方を避け、根本的視野に立つて観察すること。

これが、高い教養を身に体した者の、ものの見方であると思ふ。

さらに、このものの見方を要約直言すれば、偏見独断に捉<sup>とら</sup>はれるなかつたことである。偏見独断は、特に当代に見られる万病の根源である。諸君は、学生時代において、高い教養を充分身につけ、将来に備うべき公正心、常識観の養成に努むべきである。

かつて、アメリカのウイリアムズ大学の一教授は、こう語つたことがある。

「余の理想的学生とは、十五分の長き、針頭に視線を集め得る者なり」

この言は、学生は脇目<sup>わきめ</sup>をせず、一心不乱に学問すべしということである。もちろん、一心不乱に学問すべしと

いうからには、新聞、雑誌、週刊誌類の漫読で心を乱し、精力を濫費すべからずという意味が含まれていること明らかである。

昔から、書籍と友達は古いほど良い、という諺<sup>ことわざ</sup>がある如く、一心不乱に学問するということからは読むべき書を選択して読むべきこともちろんである。諸君は、この点から考えて見ても明らかなる如く、学生生活において、最も大切な「時間」を空費することなく、将来の大望雄志を胸に抱き、難境征服の準備時代に相応<sup>ふさわ</sup>しき生活を送ってほしいと思う。

しかるに、一部でよく言われることであるが、現代生活は自由放任主義を以て良しとすべきものである。しかしながら、自由には「規律厳守」という条件のあることを忘れてはならぬ。規律のない「自由」は文明の恥辱である。また、放任主義<sup>let alone</sup>は、人間を破滅に導くものである。もし人が土地を自然に放任して置くならその土地は荒地となる如く、人も教育せず、そのままに放任して置くなら、やがて破滅の運命を辿<sup>たど</sup>ること必勢となる。よって、魂を健全ならしむるなら、絶えず自己の心田を耕作し、除草作用を行う必要がある。

思うに、学生時代は、人生の黄金時代である。それだけに、身近に迫る誘惑を一蹴し、時間、精力の無駄遣<sup>むだ遣</sup>いを自粛し、以て、青年学徒の意気を大望の大成にこれを集中活用することに注意してほしい。

詩人ワーズワースは、「低き生活」「高き理想」と言った。高き生活すなわち、贅沢<sup>ぜいたく</sup>生活は生活の墮落を招き、ついに高き理想を失わしむに至ることを戒めた言である。墮落とは、他のことでない、目的の低いことを意味する。

諸君は、儉約質素生活、すなわち、simple lifeを以て、高き理想を追いつづけるべきである。

札幌農学校開設に当たったクラークが、学生に対する別れの辞であった「ボーイズ・ビー・アムビシアス」「青



年よ、大望を抱け」は、現代にも生きている箴言である。青年から、アムビション（大望）を引けば老人となる。

青年は、飽くまで青年らしく生き、高き理想を抱き、以て世界に通ずる大道を闊歩すべく心掛くべきである。

これについて、こういう戒めの語がある。「物を称ぶに其の真実の名を以てすべし」と。Call things by their true names. 偽善者は、博士であろうが、大臣であろうが、偽善者の名を以て称ぶべしということである。

この語は、一見奇矯の感もあるが、時代を戒めた警語であると思う。偽善者は、仮令一時的に世間をゴマ化し得ても、長持ちせず、また、世界の大道を憚らずして、堂々闊歩し得ざること明らかである。現代は、最も激烈なる競争時代である。しかしながら、如何に激烈な競争であつても、トリック、ゴマ化し手段で競争に打ち勝つことは、許されぬ時代である。

而してこの時代にあつて、正義公道が、普く世界に行われる時代を築くことに志すことは、青年の抱くべき大望（アムビション）であるべきものと思う。

かくて、青年は、偽善者に対する真実・至誠がその象徴（シンボル）であり、之が化身たるべきことを夢見るものであるべきものと思う。

私は、本日の入学式に際し、諸君の自重自愛を切望し、諸君の前途に対し、多大の期待を持つものであることを告げて、訓辞とする。

## 70年代に当面する教育の重大使命

—昭和四十六年度『大学案内』所載—

いわゆる七十年代に当面する最大の国家的関心事は、教育問題である。いまや世界各国は時代の転換期に臨み、興亡盛衰の岐路に立たされている。而して、之が運命の鍵を握るものは人であり、人の如何による。人を育てるものは教育であり、教育の如何による。これは最も古き問題であるが、同時に最も新しき問題でもある。このことはすでに治乱興亡幾千年の史実が明証しているところである。現に観る世界各国は、例外なく人の飢饉に悩み、内外から迫られている重大危機の解決に当たるべき人なしというありさまである。ために国家生活はその日暮しに終始して、一時を糊塗し、難局打開に自信を失っていること偽りなき実相であるように思う。さらば、いうところの人とは何か。自立人すなわち外力、環境に左右されざる独立自主の人、すなわち自助の人をいうのである。かつてドイツが、ナポレオンの鉄蹄下に蹂躪された当時、哲人フイヒテは街頭に響く鼓声を耳にしながら、ベルリン学士院において青年学徒を前にして、約三カ月に亘り十四回の講演を行った。これが有名なる『ドイツ国民に告ぐ』である。彼はその中でこう述べている。

「自主独立を失った民族は、同時に時流に関与して、その内容を自由に決定するの能力をも失った民族である。その民族が、かくのごとき状態を継続しているものとすれば、時代のみか、時代と共に民族自身までも、

その運命を制する外国の権力によつて整理せられてしまふであらう。爾後、この民族はもはや自己自身を持たず、他の諸国民ないし諸外国の事件及び時代区分に従つて、自国の年代を数えることになる。既存の全世界は、すべてこの民族から遠ざかり、現在の世界においては、ただ服従の光榮のみが残されている。」

自ら時流を制御し得ざる民族は、ついに外力に制御せらるべき運命にあること彼の言のごとし。彼の至言は後年、ドイツの復興統一に深大の影響力を与えたこと周知のとおりであるが、このフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』は、現代日本に対する警語箴言でもあるように思う。敢て直言するならば、戦後の日本民族はただ時流のまにまに泳ぎ回り、稼ぎ回ることと精一杯であり、民族の困つて立つ民族精神のごときは忘れ去られた観がある。もし、不幸にして民族精神が忘れ去られたなら、それは正に国家の滅亡を意味する。すなわち、日本国家の滅亡を意味する。

さらば我等に肉体的生命あり、土地あり、経済繁榮あり、之を保護する法律あるも、民族精神が失せるなら、国家はその生命を失つて滅亡するのである。而して、之が原因は民族が時流の奴隸となり、自主独立の精神力、判断力を失つたことにある。教育はこの国家的危機に對し、決して無関心であり得ない。まず国籍不明教育を追放し、歴史伝統に活きる有為の人材の育成に務むべきこと第一の務めである。また教育は師弟間の人格の交流であるから、之を重視し、決して教育疎外にならぬよう万全の考慮が払われるべきものである。わが亜細亜学園は、ここに鑑みるところあり、去る五月十二日、都下日の出村に竣工成ったセミナーハウスを活用して教育使命の一助に資せんとした。その企図するところは、転換時代に役立つべき人材の育成に期待したことにある。我等の建学精神である「自助協力」が、之がための道標となるなら光榮である。

# 戦時終了の未決算に思う

—— 諸君に期待する、独立日本の柱石たれ ——

— 広報紙『THE ASIA』第四十七号（昭和四十六年四月十五日付）掲載 —

終戦から四半紀を経過したわけであるが未だに戦時終了の決算ができてないという批評がある。思えば情けない限りである。駐日アメリカ大使であったライシャワー博士は現在ハーバード大学教授であるが、博士はその著『日本・過去と現在』で戦後の日本を特徴づける四つの心理傾向を指摘している。すなわち自己喪失と、理想主義的平和主義と、マルクス史観とアメリカ一辺倒がそれである。いずれも敗戦と占領政策のもたらした日本弱体化政策の産物であると思われるが、未だにその余弊から完全脱皮ができてないものがあるように思う。

敗戦ということであるが、一勝一敗は兵家の常であり、戦う以上勝つこともあるが敗けることもある。問題は敗戦によって民族精神が敗れ去り、国家復興の根性までも失ったかどうかに在る。もし敗戦によって自己喪失したことになったら万事休すということになる。いわゆる自己喪失は一部現象であろうが戦後日本の傾向として今日の問題となっていることも事実である。

そしてこの点については亜細亜学園の建学精神である「自助協力」をよく嚙締めてほしい。次に理想主義的平和主義ということであるが、この戦後流行の美名は非現実的な自己陶醉語で、次のマルクス史観の流行とともに世界の識者間における嘲笑語であるように思う。平和は何人も欲している。従ってこれが実現について最善の努力を払うべきこと当然である。しかしながら生活は現実であるから、現実と遊離した空中樓閣的平和主義とか時代遅れのマルクス史観など、日本だけが重宝がつて見たところで世界潮流から見れば浮き上ったものである。

アメリカ一辺倒に至っては恥ずかしき限りで敢て多言を要しない。ライシャワー博士の戦後日本観は、以てわが玉を攻むべしである。自己喪失して外力に左右せられる生活に下落したなら、ついにその生活自体までも崩れ去ることを認識すべきである。

学生諸君は活眼以て内外情勢を窮め尽くすべし。

# 教育の本流に棹さして上らん

—昭和四十七年度『大学案内』所載—

明治天皇の御製に

しるべする人をたよりにわけいらばいかなる道かふみ迷ふべき

と仰せられたのがある。「しるべ」は「導」すなわち「みちびき」教育の重大性を明示されたものと推察されるが、国家興隆の哲理をも道破されたものと思う。

いまやわが国は世界の経済大国と称せられるほどの経済力を示しつつあるが、その反面において、これがヒツミの是正について深刻な対策に迫られている。教育問題が刻下の重大事として注目の的となってきた一因は、この対策の一を教育に求めんとしているものでないか。而して戦後教育の特色として大学教育の産業化と民主化が挙げられているが、この特色についても、いろいろに細分化され複雑多岐に亘っている。

しかしながら教育の産業化、民主化と言っても、時代の流行に即しての教育制度の改変を計ったものであるから、それなりに時代的意義はあると思うが、結局のところ教育の重要任務が広い視野に立ち、正しい判断力を持つ人材の養成にあることは不変で、制度論は、これに対する時代的奉仕であるべきものと思う。

いわゆる七十年代についていろいろ論議されているが、新時代は新時代なりに特色を持つことは当然である。

しかしながら如何に新時代と言っても、これが主役を果たすものは依然として人であり、人の創作力である。而して、人の人たる所以のものは生の遂行だけでなく、常に新しい「われ」を創作し、新しい価値を創作するところにある。すなわちこの創作作用によって人は過去を残し、未来に当面するものであるが、この過去と未来の双方を慮ることが人の人たる生活で、動物生活のごとく、単に現在生活だけであつては本能充足の継続に過ぎない。動物には過去、現在、未来の三際における自然創作というものがない。すなわち歴史がない。よつて、われわれが意識的に歴史的生活を営むところに人生の意義がある。

かくて教育の重要性が更めて認識さるべきこと当然で、人が新時代を創作しながら所動的な機械作用に使役されたり、これが番頭役をつとむるとは自らを侮るものでないか。今こそ各人は人格の復興に徹し、以て条理ある思想を保ち、秩序ある行為に出て、価値ある経験を積んで人らしい生活を送るべき秋であると思う。

かくて、われわれが人格を完成することは、やがて社会、国家を完成することであり、その意義は極めて大なるものがある。而して、教育はこの重大意義を「こころ」に宿して、その使命遂行に当たっているのである。いまや世界各国はほとんど例外なく道德退廃に悩み、国家、社会の土台は大揺れのありさまである。而してこれが現象として経済、別して金銭の乱費、ムダ遣いが目立ってきた。

イギリスの経済学者であつたジョン・ラスキンは、経済倫理の三つの綱領を述べているが、その一つに「ワイズ・コンザムプション」「知恵ある消費」ということを説いている。最近における公私経済の乱費が全く知恵を欠き、如何に人心を糜爛させているかに想到する時まことに戦慄すべきものがある。明治天皇の御諭しのごとく、もし指導者その人を得てこれに当たるなら国家も個人も進路に迷うことはあるまい。

指導者とは正しい方向を明示し得る人である。師は指導者で、学生はその教育を受けるもので、やがては自ら

も指導者たるべきものである。よって国民各自はその占むる重要任務に鑑み<sup>かんが</sup>篤と反省すべき秋である。

亜細亞学園は、微力ながら教育の本流に棹<sup>さお</sup>さし、以て教育の任務達成のため努力を払っている心底である。



## 教育と環境との関係を思う

—昭和四十七年度『学友会誌』所載—

現代生活における大問題の一つは公害である。而してその環境対策については特別の官庁と大臣が設けられているほどであるが、公害を恨み呪<sup>のの</sup>う国民の声は日ごとに激化し、政治の土台を震撼<sup>しんかん</sup>せしめていること周知のごとし。ここでは、国家ならびに公共機関で処理しつつある当面の公害については触れないが、これとは別の環境を作る家庭、学校、社会の責任が重大化していることを指摘したい。かつてこの三者は、精神的雰囲気<sup>きふき</sup>の源泉としての善き生活環境を作ったものであるが、いまや往年の面影なし。

かくて家庭生活の紊<sup>びんらん</sup>乱、学校教育の不振、社会現象の悪化の世評が真実なら、その結果、竟<sup>つひ</sup>に環境破壊による公害発生の原因を作っている公共心の衰亡<sup>さいむつ</sup>を見ること、これ素<sup>もと</sup>より当然である。而して教育に関する限りにおいても教育と公害との関係は、軽視し得ないと思う。

いうまでもなく教育の目的は人間の育成にあるが、これは人間の相互理解を深めることから始めるべきものである。而して、相互理解は、彼我の過去、現在に捉<sup>とら</sup>わるることなく、各自が抱く将来に対する希望の追求において同調一致し得るなら、これが実現を期し得られるものと思う。

かくて、相互理解は相互信頼が前提となる。而して、これが実現のためには学生同士はもちろんのこと、先生

と学生間にも親密なる「交り」<sup>まじり</sup>が求められること当然である。いわゆる、教育の「一体化」unity はかくして期し得べく、大学生活 university life の真価は、かくして実現し得べく、またかくて得た教育体験は、そのままに社会生活 social life を学び取ることになり、各自の生活に対する連帯感を深めることにもなる。

いまや前述したごとく公害発生の主たる原因は、公共心の衰亡にあるが、その基づくところは生活の都市化にあり、この環境の下で天然自然の清々<sup>すがすが</sup>しい環境を破壊し、これと隔絶して都市の砂漠生活を送っているものの心に孤独感が強く湧き、これが因果関係を作つてこの自然的災禍を招くことになるものと思う。かくて都市生活者の間には、お互いに連帯感が薄く、その中心思想は経済中心の自己主義 egoism で、人々はその影響に支配されがちである。

都市生活は、外観は美であるが、内容はこれに反比例して殺伐醜悪なる現象を呈し、その生活はこれを反映し、いまや各人の生命を支えている水や空気の汚濁、草木が枯死するに至るなど、被害が顕著となりつつあること多言を要しない。かくて、公害は人災であるからこれが対策の根本的方針は、まず人心を正すことに在り、而してこれを政治に反映せしめて有終の美が期せられるものと思う。よつて思うに大学教育を身につけたものは、現代世相を觀<sup>み</sup>て深く反省し、お互いの連帯感を強化して現代生活における自己の道德的存在 moral being の意義を強く自覚すべきである。

イギリスの名士キングスレイはこう言つた。「私にとり私の心は一個の王国である」と。さらば我々は自己の修養を積んで、自己の心の中に王国を作つて自らその王侯たることを期すべきである。かくて各人が自らの心を支配し、かつ正すなら各人は共に喜び、共に生活し得る千里の沃野<sup>うかつ</sup>を拓<sup>ひら</sup>き得ることができるのである。けだし、これ大望を抱くものの人生觀であると思う。

# 大学教育と寮生活

## 昭和四十七年度学寮委員研修会訓話

昭和四十七年三月二十五日から三日間、セミナーハウスで開かれた学寮委員研修会開会式における訓話。――『昭和四十八年度学寮委員研修会講話集』所載――

本日は全寮委員諸君の元気な姿に接して、私は非常にうれしく思います。

私はつくづく感じるんですが、諸君が寮に関係されているということは、非常に人生学にプラスをもたらしていると思います。ご承知のとおり、今の教育をはじめとしてみな、個人という事ばかり強調されて、この団体生活の意義というのを、全くおろそかにしているんですね。ですから各人は、非常に「さみしい」そして「利己主義」の生活に入っており、これが非常に日本を混乱させております。

寮の生活というのは団体生活であり、団体生活のもつ意義というのを諸君は知らず知らずのうちに十二分にこれを学びとっているわけです。ですから私は、諸君が将来社会人として立つ時に、寮生活においていかに多くのプラス面を学んだかということについて、恐らくはひしひしとして感じると 생각합니다。私の知る範囲内においても、やはり相当の人物が寮生活をしており、実業界、政界、教育界において活躍しているものをかなり知って

おります。

また、団体生活の意義を解しないものは社会人として、どこかで欠陥を暴露いたします。諸君は、新聞などでよくご覧でしょうが、最近特に本場に利己主義と言いますか、名前は団体であるけれども、その基づくところは利己主義であり、本場に団体をして意義あらしむる、あるいはまた自分が団体の一員としてりっぱな職務を果たすという觀念がどうも足りないのです。

団体生活に最も必要なものは、やはり信という信頼関係ですね。私は道德というのは人を信頼することだと思うのですが、非常に大切な事だと思います。ところが今諸君もよくご承知でしょうが、人を信頼することとは、簡単なようだけれどもなかなかこれはできません。人を信頼するということは、自分が信頼されるということなのです。これは団体生活において最も必要なことです。長いことですから一時のものであつては化けの皮は、すぐはがれます。

寮なら寮生活において、いわゆるその対応するという関係において最も必要なことは、相手を信用する、自分も信用されると、こういうことなんです。これは寮生活において生命なんです。ところがこれ、やってみるとなかなかできない。しかし、何としても寮を良くしようと思つならば、このお互いの信頼関係というものを、だれが良いとか悪いとかいう事なしに、お互いが本場に反省し合いながらでなければならぬ。私は皆さんを信頼する、皆さんもやはり信頼されるような人間であつてほしい、こういうふうな関係であれば、寮生活というのはいづれ良くなつていくわけです。

寮というのは学校から言えば、やはり学校の一つの土台をなすものです。今日の学校生活というのは、先程申しましたように非常に殺風景で、もう習えば習いっぱなしで家へ帰つてしまい、個人の接触ということがない。

これは昔と非常に違ったことで、ご時世のいたすところで、やむを得ないというふうに言う人が多いんですけども、そうじゃないのですね。やはり学問の世界においてもこの心がけがあれば、それが学問に反映するわけです。で、この大事な寮生活において学びとれるわけです。寮は先ほども言いましたように、学校の土台であります。学校というのは、ただ行って勉強して将来社会に役立てるための一つの手段だと、今は簡単に片付ける傾向がある。そうじゃないんですね。

学校というのは、一面から言えばこれは一家です。一族、一国家といってもいい。つまり一個の団体というのは、一家なんですからみんな入っている、みんな家族です。ところが今のところはもうてんでバラバラですね。学校というのはもう、ただ行って学んで帰ってきている。それでは、本当の学校教育というものにならない。また、国家としてもそういう教育であればこれはバラバラの教育になります。その根本、その土台、基本になるということを学びとるということが、どうもおろそかなんです。

これは学問の世界でもそうなんですが、ただ現象だけを追っているでは決して大成しません。やはり学問の基本というのは何千年、何万年前から何千年、何万年の後に至るまで一貫して一つの存在理由といえますか、権威をもっている。それだから学問というものになるわけです。ただ目先のことばかり追っている、これはとうてい学問になりません。

現代はやはり、現象を追うということが一つの非常な欠点です。目先の事は変わるが、どんどんどんどんと、これを毎日、毎日、追っていくわけです。それじゃ、本当に学問というのはその人の血となり、肉となり、ということはできない。先程も申しましたように学問にはやはり、千古変わらざる何物かがあるわけです。それを学びとらないで、目の前の事だけを追ってゆく、そういうのが学問だという早まった考えを持っている。

それから何でも新しいものが良いという考え方がありますが、むしろ新しいものの中にはやはり学びとる何ものかがありますけれども、ただ現象だけを追っていくという事だけでは、これは本当に実にならないわけです。それから、もう一つ困るのが、外国崇拜ですね。むしろ良いところは学びとるけれども、やはり日本は日本の独自の基礎、態度というものを持っています。また、これは言い換えれば、自分もやはり自分なりの一つの見識、プライドを持っているということになる。なんでもかでも外国崇拜、あるいはイデオロギー崇拜という、これはやっぱり学問の世界から言えば最も慎むべき事です。

やはり諸君は今、大切な時であるから、土台を養う必要がある。土台がしっかりしなければどんな高層建築でもこれはもうもろいし、ちょっとした地震でもひっくりかえる。土台構築というものをしっかり固めるというところで、何十階の高層ビルでももつわけです。今はというと土台というものが割合注意されない。最近のいろいろな現象などを見ますと、目の前のイデオロギーなんていうのは、何でもこれが最も新しい良いものだなどといって、本当の学問というのを究めるということがどうも足りない。

最近の新聞、雑誌に書かれている過激学生諸君など、この点が非常に足りないんじゃないかと思うわけです。少し理屈みたになりますけど、革命・レボリューションというんですか、そういうその木に竹を繫つだような、例えば新聞雑誌などでよくあるでしょう。共産党なんかが権力で何千万人の反対党員を押さえ込んでいるとか、あるいは非常に無理な弾圧をやっているとか。そういうような不自然なことが長くこれは続かない。学問の世界ではそうです。三十年、五十年続いているじゃないかというのは、三十年、五十年なんていうのは学問の世界を見ればごく瞬時の事です。

我々は何とと深い遠いところからの、それからまた将来性というものを考える必要がある。で、目前のそうい

うようなその現象を追ってゆくというのは、その人を誤る事です。やはり基本的にはそういうふうなイデオロギーというような運動には、基本的に大事な、人を信頼するとか、人に信頼されるという事がないわけです。つまりレポリューションというのはそういう欠陥がある。私どもはそうではない。

この研修会の趣意書にもありますね。どうも学校内が保守的な方向に流れやすいこと。それは長いことやるとどうしてもそういうことになる。それをやはりだんだん直していく。これはもうだめだからというので、パーツと過激な手段でいって、それが良いかという、それは真のレポリューションではない。真のレポリューションというのは、人間はこれだけの伝統を持っている、これを踏まえてやはり悪いところを取り除いてそれで前進するということです。発展ということです。

レポリューションというので、ともすればすぐに土台から中までぶたぎってしまおうとする。しかし、その形は勇ましくて良いようですけれども、それじゃ何が残るのか。はたして社会がうまくいくかというところじゃない場合が多いのです。我々はそうじゃない。そういう昔からの歴史・伝統というものをしっかりとらえて、それから前進することが大切だ。そのところを諸君はよく理解してほしい。

この研修会の志こころざしというのもそういうところにあると思うし、亜細亜大学も、まだ充分ではないけれどもそれだけの歴史・伝統をもっている。

亜細亜大学の志というのはアジアの一体化に通じるものです。これはまず日本を正しくしなければいけない。アジアと本当に仲良くする、手を握ってアジア人とともに進む、そういうのはやはり政治とか経済とかも必要だけれども、そういったものだけではだめなんです。

前にどこかで私は話したことがあるけれども、私は終戦直後、東南アジア各所を回ってインドのガンジー夫人

のお父さんのネール首相と会って、ずいぶん長い時間話したんですが、話しながらやつぱり偉い革命の闘士だと思いました。話はやはり天下国家、政治の実行という事になりましたが、実行はむろん必要なんですよ。しかし更に思想、哲学というのが必要なんだな、政治家には。で、今よく言われるように日本の政治には哲学がない。日本の政治家に哲学者が欲しい。そこがそれなんです。

私は口がわるいのでどこでも言うけれども、戦争の後というのは勝っても負けても教育が大事なんです。勝てばおごるんですね、やつぱり。これが勝ったというんで居丈高いたけだかになる。人間というのは、おごって自分だけが偉いと思うようになったらおしまいですよ。謙遜けんそんの心がなくなればね。勝てばそういうふうな、おごるということがある。負ければまた、非常に卑屈になる。負けてどうなるんだろうということ。これは初めにはやつぱり教育なんです。ですから偉大な政治家の跡をたずねると、やはり教育、思想というものを一番に心がけて、政治に反映させている。残念ながら今度の大戦の後を見ると各国の政治家は非常にレベルが低いんです。食料とか外交とかばかりで、それもむろん必要だけれども、本当に必要なのは、この次の世代を担う若者の生き方を本當に示す教育ですね。ところがどうもそれが欠けておるんです。歴史をみても、それでは国が発展、伸びるという事がないわけです。諸君はりっぱな最高教育を受けている。その歴史の示すところを諸君はよく知ってほしいと思います。

先だって卒業式に、私、言ったんですが、今度入学式にも言おうと思いましたが、歴史というのはこれを示しておる。歴史のいうのは非常に厳格なものです。妥協がないんです。正しいものはやつぱり反映する。一時いつときはまずくても必らず伸びる。正しからざるものは、一時は栄えるけれどもこれはもうだめになる。これはもう歴史の教訓です。



そういうふうですから、諸君の寮生活というのは、やはりそういう相信ずるということから始まると思う。信ずる信じられると、そういう事が寮を生かすことになり、寮を生かすというのはその学校を生かすことになるのです。やはり友人というのは、そう簡単にできるものではない。またそう簡単に友人というものを作れるものではない。友人というものは、終生手を結んだならば一蓮托生で、共に最後までこの関係を結ぶ。こうでなくてははいけない。それで寮生活で成功した人は、大抵こういう人生の最も大事なことを学びとった人なのです。学校の対抗試合というのがあります。——今の日本に本当の意味での対抗試合があるかどうかからんという感じがしますけれども——なんでもないことのようにだけれども学校の対抗試合というのは、日ごろ最善をつくして練習したその結果を天下に示すわけです。でありますから、わが校はぜひ勝たなければいかん。勝つべしとして、そういうその戦闘心というのは、寮の場合でもそうですよ。

あのナポレオンをワートルローで破ったウエリントンの有名な言葉だけれども、「ワートルローの戦いに勝ったのは、イートンの庭で勝つことを学んだからだ」と。イートンというのはパブリック・スクールという、まあ日本でいえば大学と高校のあいの子みたいなもので、イギリスはだんだんそれは今はなくなってきたているが、昔のイギリスの強さというのは、パブリック・スクールとかで、非常に厳格に寮生活、全寮生活を行い、そして一週間に何時間か、二・三時間しか外出を許さない。そして床屋でも勝手な所に行けないという非常に難しい規則があった。イギリス人はやっぱりルールを守る。規則を守るといのはイギリス人の特徴で、こういうところからきているのですね。

日本人のある有名な先生ですが、そのパブリック・スクールに入って、入って間もなく知らないである床屋に行っていて、ところがそこに学長が入ってきた。散髪の済むのを待つて学長が日本の学生に静かに近付いて、「あ

ななは学校の規則を知らなかったんだらうね」と言った。行く床屋は決まっているんですから他の床屋へ行つてはいかんということを知らなかったんです。「ではよろしい」と言つて学長先生が自分の金をもつて学生の散髪代を払つた。それで学生は非常に感激したという有名な話がある。そういうわけでルールというものはその時は非常に窮屈で「なんだそんなつまらない規則に縛りつけるなんて」とこう言うが、しかしこれが人生において最も必要なんです。

学生時代に学ぶということ、寮でもある程度のそういうところの訓練というものがある。教育というのは、そういうことを教えるところで、英語で言へばdispositionと言つか、間違つた道を処罰するという一つのそういう内容を有している。ただほうつておいて、それで教育とは言わない。

これも有名な話だけれども、諸君はイソップ物語というのを読んだことがあるでしょう。あの中に書いてあるもので、小さな子供がちよつとした物を盗んだ。そうするとそのお母さんが「ああいいよ」と言つてほめたという。ひとの家から黙つて盗んで来て、お母さんがほめた。そしてだんだんそれが昂じて大変な大泥棒になる。ある日その大泥棒になった者が死刑の宣告を受けて刑場に行く途中に、そのお母さんも自分の子供が死刑になる前にひと目見ようと思つて行くと、子供がその刑場に行く途中に素早くお母さんを見つけた。それで看視役のほうに、「母にちよつと会つて来たいが」と言つた。最後だというのでその看視が許したんです。ところが子供はお母さんのところにつかつかと寄つて行つて、しばらくしていきなり歯でもつて耳をかじり切つた。お母さんは、「ああ痛い、いたつ。なんであなたはお母さんを苦しめるんだ」と叫んだ。子供が答えて言うには「お母さん、子供の時に私が物を盗んできた時に、それはいかんと叱つてくだされば今日のようなことにならなかったのです」と。間違つた事は処罰し、処罰されるという、そういう謙虚な、やはり教師が必要なんだ。諸君も間違つた事はし

てはいかん。そして仮に間違つた事をして、先輩から戒められれば、これはありがたいと思ひ、また先輩でも同じことで、むやみに圧迫することではなく、本当に正しいか、正しくないかというのを判断して「きみ、それは間違つてゐるよ」と、「あ、私が間違つてゐます、後で直します」と、これが本当の姿です。

今日の教育が間違つてゐるところは、何をやつてもかまわないという今のイソップ物語と同じではないんです。それではだめで、寮生活というのは、そういう事が何でもないようだけれども、だれ言うともなくわかる所です。そこから諸君は将来の態勢を汲み取る。殊に団体生活にはこれが最も必要である。団体の結束、どうしたら円満に団体生活を楽しく伸ばしていくことができるか。それにはどうするか。こういうことを始終諸君が思つてゐる。これがやがて諸君が社会に出た時に、会社なら会社へ入つた時に大変に為になると思ふ。

つまり偉大な人、グレートメンというのは、そういう修養を積んだ人、偉人というのはそういう人をいう。東洋流の英雄豪傑というのは、現代においては、はやらない。やはりモラル、道徳にマッチして、これで本当に日本というのは良くなる。また、アジアと一緒に手を組んでいける。そういうところが日本の政治家もそうだし、アジア各国を回つて行つても、独立とか何とか必要だけれども、その基本になるものは、やっぱりそういう精神生活、どうしたら個人の道義心、モラルというのを上げることができるか、ということになると思ふが、それが足りない。

僕も進む、諸君もそういう道を進んでもらいたい。一緒に進もうじゃないかというのが亜細亜大学の建学精神です。で、それにはひとの力を頼らずに、自分は自分の力でまっすぐに進む、悪い事は断じてやらない。それで本当に協力関係が生まれるし、「自助協力」というのできる。しつかり頑張<sup>がんば</sup>つてほしい。

(開会式における訓話より収録)

# 大学の使命觀に就て思う

— 広報紙『THE ASIA』受験生特集号（昭和四十七年十一月二十日付）掲載 —

アメリカの偉大な判事であったオリバー・ウエンデル・ホームズは、かつてハーバード大学で演説した中でこう語っている。

「大学はスマートな人を養成するところではない。叡智えいちのある人を養成するところである。」

言や善し。まことに大学の本領と使命觀を語ったものと思う。スマート(smart)な人とは如才えいさいのない、小利口な人ということ、叡智(wisdom)のある人とは知恵分別のある人をいうものである。

いまや時代は刻々と転変しつつあるが、上述した大学本来の使命觀を捉とらえて、時勢を無視したもので大学とその教育を聖域化しているものと、即断してはならぬ。大学と雖いふも時代の流れを反映している世相の産業化的傾向に善処すべきことはもちろんのことであるが、心配される点は教育が利潤追求を目的とする産業活動の手代・番頭となり下って、人間性の發展を期すべき教育本来の目的から逸脱していくことである。

もし教育の近代化的象徴といわれている専門教育の偏重によって人間の人格的權威が疎外され、失われる結果となり、竟に祖国日本が日本株式会社の実相を呈するに至るなら、国民銘々は精神なき専門人となり、専門白痴と成り下がる恐れがある。そうなったら、それこそ国民銘々はもちろんのこと国家自体の運命も窮地に陥ること

明らかである。

今こそ『論語』の「温故知新」（故きをたずねて新しきを知る）の意味を反覆し、反省すべき秋である。国民の一部に見られるごとく、革新とか時流とかの名に魅せられて徒に伝統と秩序の破壊を事として顧みないようになり之が大勢を占むるに至ったなら、竟に国家及び国民は外来勢力に蚕食されるか、自滅の非運に陥ること必定である。大戦後に見られる国家の興亡の兆候は、明らかに善因善果・悪因悪果の歴史の鉄則を示していること、叡智のある人であるなら能くこの間の消息を洞察し得ると思う。

かくて、大学はこの種の大局観に立つ叡智ある人を養成することを任務としていること当然である。亜細亜学園は、その建学精神を「自助協力」と定め、以て他力本願を排し自己の運命は自己の力を以て拓くべし、之を實現し得るなら、ここに初めて協力の実が結ばれることを告げている。けだしこれ叡智の人に期し得るものと思う。また斯人にして初めて内外の信望を収め、事業も見事に遂行し得るものである。

時代を拓き、時代を守り、時代を進めるものは一にかかつて「人」の問題である。「人」そのよろしきを得ざれば一切は空となろう。

# 大望を抱くべし

## 昭和四十八年度入学式訓辞

— 広報紙『THE ASIA』第百九号（昭和四十九年四月二十五日付）掲載 —

諸君、入学おめでとう。亜細亜学園は全学を挙げて諸君の入学を祝し、諸君の前途に多大の希望をかけていることをここに表明致します。

私はこの席上、まず諸君に対し私の切望を申し述べます。

それは諸君はこの機会において、諸君を今日まで愛撫<sup>あへ</sup>し育ててくださった御両親、御近親をはじめ先生、先輩、朋友<sup>ほうゆう</sup>の御親情に対し、御礼の至情<sup>まじこころ</sup>を抱き、御恩に酬<sup>むく</sup>ゆるの決意を誓うべきことであります。

「礼を知らざれば、以て立つことなし」という諺<sup>ことわざ</sup>があります。礼を知らざる忘恩<sup>わうおん</sup>児は如何<sup>いか</sup>に優秀で、また世間的に出世したところで識者間においては一人前の人間として立つことはできません。また「人の行いは孝より大なるは莫<sup>な</sup>し」という諺もあります。

人之行莫<sup>レ</sup>大<sup>ニ</sup>於<sup>一</sup>孝

人間の行為の中で親に孝行を尽くすより大いなる行為はないということがあります。よって諸君は先人が残し

てくれた教訓を学び、御両親をはじめ皆様の御恩に酬いる念を忘れずに、人間としての權威を保ちながら勉学に努めてほしいと思います。

ここで私は亜細亜学園の「建学精神」について要旨を申し述べます。

亜細亜学園はその「建学精神」を「自助協力」と定め、先生と学生諸君が相睦<sup>ちむ</sup>み、この精神を身に体して研究、教育に当たることにしております。

「自助」とは自己を助けるものは自己なり、自己こそ最上の助け主であるということで、自己の運命は自己自身の力で切り拓<sup>ひら</sup>くべし、流行の開拓精神も自助精神に外ならぬものであると説明しております。そして「自助」は眼を徒<sup>いと</sup>に外に注ぐことをやめて、静かに自ら反省し得るなら自助の威力を知ることができます。

もともと大学はこの自助精神で自ら学ぶところで、徒に他力にすがり、せっかくの自己の力を自ら求めて刈り取るがごときことがあつてはなりません。

いまや時代はいわゆる協力時代ですが、協力と言っても他力本願で協力は実現し得るものでありません。真の協力は自助あつてのことであり、協力と自助は不可分で表裏関係にあることを篤<sup>とく</sup>と知らねばなりません。

諸君は「建学精神」をわが身に体し、これを学問の指針として、将来の大成に役立たしめるべく、自ら努めるべきものと思います。

これから私は簡単に諸君に対し、注意三点を申し上げます。

その第一点は、諸君は日本を取りまく内外情勢をよく注意し、判断して、小成に安んずることなく大望すなわち「大いなる志」、アムビションを抱くべしということです。

これがため、まず諸君はわれらの祖先が築いた歴史、伝統を研究し、その精神をわが心に取り入れ、さらにこ

れを後世に伝えていただきたいということです。

### 明治天皇の御歌に

よきをとりあしきをすてて外国におとらぬ国となすよしもがな

とあります。まことに有り難き教訓であります。

善を取り、悪を捨てるということは、現実問題として実に容易なものでなく、これにはわれわれは独自の修養を積み重ね、何が善か、何が悪かについて取捨選択すべき識見を養うべきことが先決であります。

大望（アムビション）とは、「望みを高く抱く」ということであり、必ずしも世間的の立身出世を意味するものではありません。

いまや、時代は経済全盛時代といわれておりますが、その善とともにその悪が浮き彫りにされております。外においては日本に対する不信任が高まり、内においては道徳破壊が深刻化してまいりました。そして、これが建て直しは、刻下の急務であります。この大事業は心に大望を抱く青年がその任に当たり得べきものであります。

大望なき青年は、前途なき青年を意味し、既に老化したものと言ひ得ましよう。

よく青年の墮落が問題となりますが、墮落ということは別の意味からいえば「志が小さい」「望みが低い」「目的が狭い」ということから起こる情ない唯物現象であると思います。

日本も自ら反省し、改めるべきところあらば潔く改め、以て内外の期待に応えるべきものと思ひます。

この際、諸君は明治天皇の仰せになられた内外の善悪長短を鑑別し、明識し、以て日本の正しき進路を拓くべき大なる「志」と「実力」とを養うべき時であると思ひます。



次に、修養と読書について申し述べます。

修養と申せば、何やら鹿<sup>しか</sup>爪<sup>つめ</sup>らしく難<sup>がた</sup>しいように思われますが、そんなものではありません。

修養ということを端的にいえば「自己の確立」ということです。

諸君はやがて社会人として立つわけですが、如何に立派な地位についても「我に修養なし」と言わんばかりの態度有様では、見識ある世界人の間においては通用しないと思います。

自己を磨かない人物はどこか風格に欠くところあり、内外の人物と接触し、対話する場合、何となくひけを取ることは、しばしば聞くとこゝろであります。

そして一般にいわれる修養の方法についてはいろいろあると思いますが、その一は読書であると思います。

しかし、一切の読書<sup>よみ</sup>が凡<sup>すべ</sup>て修養に役立つものではありません。

殊<sup>また</sup>に朝<sup>あした</sup>に出て夕<sup>ゆふ</sup>に消える昨今流行の雑書雑文類に至つてはその多くは百害あつて一利なく、これを読んで品性を傷つけ、ついに奈落<sup>ならく</sup>の底に転落埋没せしめらるる人が少なからざること周知のとおりであります。

伝えらるるところによれば、わが国の紙の使用量は年間千三百万トンで、紙資源の豊富なアメリカに次いで世界第二位の紙の消費国であるとのことであります。

紙の濫費乱用<sup>らんよう</sup>斯<sup>かく</sup>のごとし。そしてこの結果、風光明媚<sup>ふうこうめいび</sup>の田子の浦はいまや公害の代表地となつたわけです。

思うに修養書の寿命は千年以上を経たるものであるべきものと言われています。

これは古いから善いということでなく、年代を経ても淘汰<sup>たうた</sup>されないで今日に至つた所以<sup>ゆえん</sup>のものは、その中に修養についての貴重価値があり、幾千年を経ても変わらない生命が中に宿り、これを読む者をして感憤興起せしむる動力を蔵しているからです。

中国の『近思録』という古書に「書は多く看るを必とせず（必要とせず）其の約を知らんことを要す」

書不<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>多看<sup>一</sup>、要<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>其約<sup>一</sup>

至言であると思います。

人生は短し。時間は尊し。徒に多読することは慎むべし、修養の大事に想到するなら、まず読書の取捨選択に對しては、慎重かつ一層万全を期すべきこと当然と思います。

学生時代において修養、読書について特に意を用いることが期待されますが、このことは自己の見識を養うべき素地を作ることあります。

最後に、私は諸君が大学に入った時の「初心忘るべからず」ということを申します。

一時の誘惑に負けて将来への大志を曲げ、せっかく選んだ大学への道を乱すようなことがあつてはなりません。読書、勉学に心を用いることは学生第一の務めであります。

いうまでもありませんが、昔から学問は天下の大事と言われ、これを軽視することは学問の大事と權威を解せざるもので、その人の価値も同時に問われるものと思われております。

そしてこの天下の大事たる学問と取り組むには、決して急ぐべきものでなく、充分の時間が必要であります。

人生は短しと言われておりますが、しかしながら人一生の事を為すには必ずしも短くありません。

時間の短きを啣つ人はとかく時間を浪費する人に多いといわれます。

毎日孜孜として働くなら一生の事を為すに充分の時間があるものです。

自分の手でコツコツと一日一寸ずつ穿てば一年間で厚さ六間の堅い大理石の岩を穿ち通すことができるのとこのことです。

ドイツの詩人ゲーテの有名な詩に、

急がずに 休まずに 不急 不休 これ なんと かなう 是ぞ汝の胸飾

という名句があります。

Haste not; Rest not; without haste; without rest; Bind the motto to thy breast.

諸君もこれを立派な諸君の胸飾としていただきたい。

思ふに学生時代は人生の準備時代であります。

準備時代に万全の準備をして如何なる変化にも対応し得べく大計（おおいなるはかりごと）を樹つべきものと思ひます。

諸君、健康と大望精神を養つて意義ある学生生活を送られんことを期待しております。

## 自助協力してわれらの進路を拓かん

—昭和四十八年度『大学案内』所載—

植樹祭( Arbor Day)という行事がある。日本でも外国でも行われているが、植樹の意義は極めて深く、わが上杉鷹山やデンマークのダルガスの故事を引くまでもない。植樹が国家興隆、民心作興の動力であることは、史蹟の明証するところである。思うに樹を植えることは、人を植えること、すなわち人を育てること、すなわち教育ということと相通じたもので、昔から国家百年の大計とされてきた。しかるに、いまや国家と国民の生活を繋ぐべき樹木は、いたるところで無惨にも切り倒さるるに至ったので緑の山々は禿山となり、清純の大気は汚染され、ついに麗しい自然美は刻々と消えゆくのである。

教育もまた国家民族の生命を繋ぐべき重大使命を有つものであるが、いまやその使命を喪失しつつあるかの感があり、識者間にありては既にその權威が問われつつあること周知の如し。現にいま新聞を賑わしている一群学徒の暴走行為を見ても明らかであるが、かれらは教育の使命を無視し、教育の第一目標である修養の大事を蔑視したことが身の破滅を招いた主因となったものと思う。いうまでもなく修養は教育の中心であるから、修養がないというならもとより教育はあり得ない。日本においては、昔から修養を伴わない教育というものはなく、教育はまず自国の歴史、伝統を学び、これと自己との関連を識ることを以て教育の第一義とした。

しからば今日の日本の教育は如何。いまの日本の教育は、日本の教育の伝統を継ぐものであるかどうか。思うに、法・文・理・工・医の諸学はこれを学ぶが、修養はこれを学ばないというのは、教育の目的に鑑みて世界の教育界に伍して誇り得ないと思う。修養のない諸学の専門とか、経済的成功などに対し心からの信任を托し得ないこと世界の良識である。しからば修養とは如何。これを端的に言わば、自己の確立ということである。すなわち自己の何たるかを知り、その価値を認めて不断に向上発展に努めることである。しかるに現代人は、天地間の凡ての知識を求めながら、自己に関する知識はこれを顧みないものが多く、ここにおいて現代世相の病因である唯物思想が生まれるように思う。もちろん教育によって知識の増進を計ることは、人の価値を定むる一つの標準である。しかしながら教育の重要性を識る者は、教育によってその「為人」が養われることをまず期待すべきものと思う。

わが亜細亜学園では建学精神として「自助協力」を掲げている。「自助」は自立なり、自己を助ける者は自己なり、自己こそ最上の助け主なりと力説し、学生諸君に対し自己の運命は自己の力で拓くべしと強調し、併せて現代生活において最も必要なる真の「協力」は、「自助」から湧くものであることを明言し、体育館の入口には「切磋琢磨」の四字を刻し、朋友互いに協力して学問に精進すべきことを要望している。

かくてこそ新時代を拓くべき新開拓精神、すなわちニューフロンティア精神を体现し、かつ發揮し得べしと期待している。而して、これが教育の一助としてセミナーハウスを新設して、師弟一体化の生活実現を計っている。また亜細亜学園が示している時代色を反映する教授内容については、大方諸君は明識をもって自ら判断されることと思う。

# 日本復興の動力うごく

## ——新人生諸君に期待すること大なり——

— 広報紙『THE ASIA』第六十七号（昭和四十七年四月五日付）掲載 —

最近、青年の思想的動向が特に問題となっているが、これが真相はどうか。問題の中心点は、あえてこと新しいものでなく、従来からも論議されたものであるが、これが昨今に見られる過激派グループ行動の激化など、社会注視の的となってきたことが、看過し得ない国家的重大事となっているためと思う。

しかし、遺憾ながらわが有識者間において、この動向に対し国家百年の大計を案じて問題と取り組む人士の少ないこと正に時代の大患である。ここでは政治論は暫く省く。以下これが直接の原因の一端を述べ、併せて対応心得について反省すべき点にも触れて見ようと思う。

一、いわゆる七十年代の転換期という標語に踊らされて、一部青年間においては、現実離れのした飛躍的思想に魅せられているものがあることは事実である。而してこれが原因影響について客観的立場から見ていろいろある。例えば、新聞、雑誌などに見られる外国からの魔手、その謀略的宣伝と思われる記事であるとか、現実無視の机上の空論に誑かされるものとか、また巧みな仮面的レトリックに酔い痴れることなど指摘されよう。かくて

有望な青年が安易な現代不満病に取りつかれ、ついに時代の反逆児となることも容易に想像し得る。

いうまでもないことであるが、青年学徒が、学問を修めんとする所以<sup>ゆえん</sup>のものは、高い志望をもって学問の実体を識<sup>し</sup>らんとするところに目的があるはずである。

而して、学問の実体とは、真理と称することができようかと思うが、真理は虚像と反対のものである。影のものの、偽りのもの、虚<sup>ひな</sup>しきものはいわゆる虚像の正体で、これを排して実体そのものずばりを究むるところに修学研究の目的がある。現代のいわゆる転換期に見られる内外の現象は、朝に夕に千変万化してまるで走馬灯のごときものであるが、いちいちこれに對して氣をつかい、氣を奪われ実体を掴<sup>つか</sup>み得ず、虚像に使われる運命に墮すること明らかとなる。真理すなわち実体は、深き静かな存在である学問の道を明示している。われらは全力を傾けて実体、すなわち真理解明に取り組むべきである。

二、外国心酔、祖国卑下の思想の流行も青年を誤る一因であつて、教育界の負う責任は重大であると思う。これは日本の歴史、伝統を知らざることに基づくものが多く、国家の前途に深刻な不安を投げるものである。例えば、われわれの郷土は日ごと破壊されつつあり、なつかしき方言のごとき輕蔑<sup>けいべつ</sup>されつつあつて、純朴真面目<sup>まじめ</sup>な地方生活の特色が、次第にその姿を消しつつあること周知のとおりである。この現象は現代生活の必然性から生ずるものもあるが、言語、風習、生活態度が西洋好みに征服された結果であることは否定し得まい。現に片田舎の人通りの少ない街にまでバーバー、テラーといった看板が誇り顔に並べられていること、情けないとも恥ずかしいともこの上なしである。外人一人いるわけでなし。なぜ床屋さん、仕立屋さんと呼び得ないのか。

また、郷土破壊は学校破壊をよび、師弟間を繋<sup>つな</sup>いだ良風美俗の校風も、その跡を絶ちつつある。悲しき限りである。いうまでもなく、学校は学生にとり、わが郷土であり、わが家庭であり、わが国家でもある。しかるに、い

まや見るべき校風なく、よつて發揚さるべき郷土精神なく、従つてまた、国民生活の土台である国民精神もまた退化しつゝあること、正に國家の危機である。

三、以上二点について現代青年の思想動向に影響を与えている原因について寸評を試み、國家的、教育的見地から反省すべきことの急務に觸れた。かくて日本の現状を見る時、國家興隆の動力である民族精神の高揚なく、まことに心細い次第である。これを極論すれば、正に亡國的傾向を辿<sup>たど</sup>っているものとも斷じ得よう。しかしながら、日本の現在の暗黒面は絶望的のものでなく、復興の光はこれを看取し得ると思ふ。即ちわが國民は、戦後の永い冬眠から覺めて立ち上りつつあり、しかもその動力をわが歴史、伝統の裡<sup>うち</sup>にこれを求めていること、その証左である。私は、次代を担う青年学徒、特に亜細亞学園を志した諸君の前途に對し、多大の期待を掛けていることを告げたいと思ふ。

諸君の高い志望と純情心による研学精神は、必ずや世界情勢裡<sup>うち</sup>に活くるわが日本の姿をハッキリと看取し得ること必勢となる。かくて諸君の祖国意識は力強く復活し、真日本建設に主役を果たすことになることを信じて疑わぬ。再言す、諸君よ自重自愛せよ。



# 学園に活く郷土精神

— 広報紙『THE ASIA』 創刊百号記念特集号（昭和四十八年十一月五日付） 掲載 —

亜細亜学園の広報紙である『THE ASIA』が第百号を迎えた。想起すれば感慨無量である。私は創刊号において「大学問題に関する基本方針」を掲げた。すなわち、わが亜細亜学園はその基本方針である自由と秩序の維持のため全学を挙げて協力一致の一家体制を布<sup>し</sup>き、以て研究と教育に専念すべきことを力説したものである。敢て珍しいことを公言したものでないが教育界一部の暗流に鑑<sup>かん</sup>みて、何とかしてわれらの歴史伝統を活かした毅然<sup>きぜん</sup>たる「校風」を持ち、以て国民精神を身に体した学生諸君の養成を期待したいからである。

いまや周知のごとく世界経済においてはいわゆる多国籍企業の活動と之が促進に対し駆け引き、謀略が行われ、国内経済においては浪費経済と之が脱皮計画の施設に対し頭痛鉢巻の姿である。而してこの間に在って世界の政治外交の動向はいわゆる親和協調の表看板とは裏腹に、昔ながらの合縦連衡<sup>がつしうれんこう</sup>の詐術を弄<sup>ろう</sup>して世界の良民を手玉に取っていること、識者の認めるところである。

ここにおいてわれら教育の重任に当たるものとしてまず憶<sup>おも</sup>うことは、内外に動く眼前の小策打算に精神を惑わさるることなく、一貫不斷の国家民族の担う重大使命とその発展のための大道に立って邁進<sup>まいしん</sup>すべきことである。かつて歴史の明示するところによれば、古代文明に覇<sup>は</sup>を称したバビロニア、アッシリア、エジプト、ギリシャ、

ローマ、ペルシャ、モンゴル、ペルー等々の諸国の亡滅の原因は悉く皆一である。すなわちローマ史の大家ニールが喝破したごとく「歴史あつて以来、未だかつて外敵の侵害を蒙り、その結果として亡びた国の例は一つもない。亡国はすべての場合において自殺的である。」と、正に然りと思う。

いうまでもなく今や日本を含めての世界的欠乏の最大なるものは人である。その生命 (life) である。真の人である。之を卒直に言わば、時代の大勢は人格の退歩時代である。道義退廃、風俗墮落は眼にあまるものがあり、これやがて外力の誘導となる。これ自殺の主因であると思う。

亜細亜学園は学生間の相互理解を期待している。相互理解というのはお互の将来について実現すべき理想を語り合い、之が協力し得る体制を期すことである。われらの建学精神である「自助協力」すなわち自分の運命は自分自らの力で拓くべし。かくて真の協力精神でお互が生くることになるなら、待望の興国精神の基本的方向が定まることになる。

有名な俳人河東碧梧桐は俳聖正岡子規についてこう語っている。「わたくし其の仲間では子規をお国風に訛つて『のぼさん』と呼んでいた。実名の昇さんを先生とも、昇さんとも師匠とも呼ばない。『のぼさん』である。松山の方言丸出しである」と。まことに面白い話であると思う。なんとなくお国風の言葉には「和らぎ」と「親しさ」が滲み出ていることを語っている。

思うに学園は一家庭である。学生諸君はお互い銘々の懐かしい「くにぶり」「郷土精神」を発揮して赤裸々の気持で友人同朋と心の交流、心の打解けを心掛け一家だんらんの特色ある校風を有ち、かくて遠大独自の校風を作り得るならどんなに幸せであらう。

# 新時代の生命が躍動する

— 広報紙『THE ASIA』受験生特集号（昭和四十八年十一月三十日付）掲載 —

亜細亜大学は、新しい時代精神を呼吸し、新しい時代に生きる学生諸君が来り、学び、新しい生命が躍動する大学である。そして、創設以来今日まで、日本の置かれている地位、使命に鑑み、アジアの人たちと手を取り合つて、アジアの発展に寄与するため、教育を基本とした文化交流をすべきであるという信念に立ち、日夜の研鑽を重ねてきた。

今日、日本の大学の現状を見るに教育の真の目的が見失われているように思う。大学は、人間性の尊厳に立脚した、きびしい教育と、高度の専門的研究が両立して行われ、しかも歴史的使命という一定の目的のもとに統合されてこそ、はじめて大学、特に私立大学存立の意義があるといえよう。

亜細亜大学は、この深い使命観に燃えた人々の集まりであり、アジアにおける日本の大学の使命を深く認識した学府である。

また、僅か十数年に瞠目に値する発展を遂げた大学として高い評価を得ているが、それを可能ならしめたのは紛々たる毀誉褒貶に右顧左眄することなく、独自の道標を立てその基本的な教育精神を堅持し、学園人としての使命達成のため教職員、学生が一丸となって邁進したことにある。

しかし、未だ、歴史の新しい大学であるだけに、理想実現のために多くの課題が山積しているが、近い将来、それら諸課題の実現を計るべく、現在着々とその体制をととのえている。例えば、本学は現在、経営・経済・法学部・留学生別科で構成され同じキャンパスに日本経済短期大学を擁しているが、これらの学部教育の充実の成果は、近年とみに著しい。そこで、この学部教育の基礎の上に、更に、高度にして専門的な学術理論および応用を研究し、かつ教授し、深奥を究めるため四十九年度から大学院を設けるべくすでに文部省に認可申請手続中である。

また他方、アジアに関する総合的な研究調査を体系的に行うため、アジア研究所を設置した。本研究所は、本来のアジア地域の調査、研究、資料収集はもちろん、各研究機関との研究上の交流、学生の研究活動の助言、指導、専門誌の発刊等幅広い活動をしている。

時代を拓き、時代を守り、時代を進めるものは一にかかつて「人」の問題である。

亜細亜大学は、「自助協力」の建学精神をバックボーンとし、学問の自主独立と人間形成の道をひたすらに進んでいる大学である。

学徒諸君は、大いなる夢を抱いて、本学園に來り、学び、研鑽にいそむ秋であると思う。

諸君の健在を祈るや切なるものがある。

## 転換時代に立つ大学の使命を思う

—昭和四十九年度『学友会誌』所載—

明治維新の先達であつた西郷南洲は、「文明とは道の普く行はるるを賛称せる言」であると断じた。正にそのものズバリである。而してこの観点から現代世相を見れば、時代は野蛮時代に逆戻りしつつあるようである。その一例であるが、日本はもちろん、世界は挙げていわゆる石油ショックの影響を受けている。而して、いわゆる資源ナシヨナリズムといわれる時代の潮流が支配的勢力となり、仮面を被つた利己排他主義が国際的主役を演じつつあること周知のとおりで、「文明」は正に閉鎖されつつある。

しからは之が打開の道は如何。私は端的率直に言つて、之が為の「道」を開くべき重大使命を帯びているものは、本来の姿に還つた大学教育に在り、その徹底普及化にあると思う。今や「文明」を志向して建てられた各国の大学においては、相互間において、より深い親密な相互交流が要求せられ、「和合」すなわちunityがその実績を挙げて名実共に「大学」すなわちuniversityに恥じない使命の遂行に出すべきこと、正に時代転換期に相応しい世界的大勢でもある。かくて、一面において偏狭排他的の資源ナシヨナリズムを解消しながら、他面において世界の科学力を動員して、自然力の開発による資源エネルギーの創作に協力するなら、現代世相のエゴイズムの動向も為に規制せらるることも期し得ることにならう。

よってわれらは本学において力説しているように、先生と学生諸君との協力関係によつて、大学教育の本来的使命であるべき教育の積極的の精進を發揮して、時代の要求に必ずべき人材の養成に、一段の精進に努むべきことを切望してやまぬものである。

かくて、現代に見られる一部学生を汚濁おとくしつつある唯物主義的謬見びぶつけんや、イデオロギー的病想を乗り越えて、未來を築く新時代開發への大望にわれらの運命を懸ける時がやってきたのである。而してこの大望遂行の爲には、現代人はその生活信条として「單純生活」simple lifeを期すべく、生活の複雑化はこの種の大望雄志を消し去ることになるからだ。すなわち「單純生活」は人の価値である「まごころ」を養うことに役立つからである。再言するが、大学教育で学ぶ課題は、人間の協力世界で実現さるべき知識、技術の問題であるから、人間相互の協力関係のないところに学問はなく、従つて「文明」が期待し得ないこと明らかである。而して協力関係の因よつて生ずる「道」の姿は道義であり、相互信頼である。

亜細亜学園の学友会諸君は、学生生活を通じていろいろと「社会生活」social lifeの実践課程で修業を積んでい  
ると思うが、今こそ眼前の大転換時代に直面し、われらの建学精神である「自助協力」を確たと身につけ、大学生  
活を一段と高く、深く意義づけてほしい。

諸君に期待をかけること深大しんだいである。

## 復興アジアの黎明期に思う

『アジア研究所紀要』創刊号（昭和四十九年三月十五日）所載

### (一)

アジア問題は日本の国民的統一と不可分の関係に立つ政治理念の一つである。しかしこの政治理念が明治維新の志士たちによって期せられた政治革新と並んで、アジア一体化の夢を国民の間に浸透せしめたことは特筆事であった。すなわち明治維新の志士たちは、その唱道した尊皇攘夷の標語の下で、日本の革新とアジアの一体化とを併せて力説したわけであるが、この維新精神は敢て明治維新に特別のものでなく、日本の古代から伝承されていた伝統精神の復活であったと思う。

しかしわれら日本人の先達がアジアの一体化と言ったのは、決してアジアの領土的野心などを思っていることではなく、復興アジアの新秩序確立に当たり、日本の道義的使命を思ったからである。西郷南洲が「支那を立派に道義の国に盛り立ててやらなければ、日本と支那とが親善になることは望まれぬ」と言ったのは、敢て中国に限ったことではなく、この間の消息を語ったものである。しかし明治維新以後、時代は転換し、日清、日露両戦役の世界の意義から観て、アジアは大変貌を示し、別して日露戦争によって、ヨーロッパのアジア侵略に反撃を加えたことは、復興アジアについて画期的な意義を齎したものであった。

インド独立の立役者であつたネルは、日露戦争の始まつた時、十四歳であつたが、彼はその当時の述懐においてこう語っている。「余はヨーロッパの羈絆を脱せるインドの自由ならびにアジアの自由を希望した。余は剣を提げてインドのために戦い、インド解放に貢献すべき武勲を立てたいと夢想した」以て日露戦争のアジアに及ぼした影響の一端を知り得ようと思う。

(二)

かくて日露戦後十年ならずして、ヨーロッパ戦争の勃発を見るに至つたが、ヨーロッパ戦争はアジアに対するヨーロッパ覇権の没落を招き、同時に、アジアの復興に大動力を与えたものであつた。しかし当時これを反映して幾多の著書が刊行されたことも周知のとおりである。ストットダートの『有色人の昂潮』のごときその一例である。しかるに運命劇の展開と言わんか、わが国の運命は支那事変から大東亜戦争にかけ大変化を来し、ここに史上に比類なき敗戦の憂目を見るに至つたので、その戦争の目的であり、理想でもあつた大東亜新秩序の建設、次いで大東亜共栄圏の確立は竟に不可能となつた。

しかしながら同時にアジアに多数の独立国が出現し、アジア情勢も激変しつつあることも周知のとおりである。ここにおいて既往を顧みて深く思うことは、世界の新秩序樹立のため、緊急不可欠の要件として、アジア新秩序の建設を期することであるが、これがための切々たる根本的条件として、日本がアジア諸民族と協力提携することの急務が一段と力説されていることである。しかしてアジア新秩序の建設はアジア的規模において行われるわれらの第二維新でもあると思う。このことは一身を国事に托して倒れ去つた幾多先人の志業を継ぐものであるが、われらは万難を排し、この大業を成就せねばならぬものと思う。

いうまでもなくアジアは西エジプトより東中国に至るまで、大いなる面積をもち、その人種、言語、歴史、風



習もまた多種多様であるので、早急に独立国としての自治能力を期待することは容易ではない。しかしこれがためには、叡智と忍耐を必要とすることもまた明らかであろう。かくして当面の具体的問題点として注目せらるることは、それぞれの国家及び国民生活に要求せらるる政治及び経済問題であるが、しかしながら重要な根本的問題は、各国家及び国民の生活裡に流れている精神的な問題である。しかしてこの問題の核心について、内外ともに深く留意されていないことが遺憾の極みである。すなわちアジア新秩序運動の核心は、目覚めたるアジアの魂の要求にその源を発しているからである。

例をインドに取ってみる。インドの独立運動は、戦前においては、目的、手段ふたつながらヨーロッパ革命運動の模倣であったが、ガンジーの出現によつて、インドの独立運動はインド的となつた。すなわち西欧流の模倣的独立、すなわち単にイギリスの支配から脱却することのみに止まらず、インド精神により生まれるべきインド政治による新しいインド建設を期することにあつた。この政治的独立と精神的独立との二重の独立が要求せらるるところに、アジアの復興と新秩序建設の真意義が現われていることを見逃してはならないと思う。

### (三)

しかして上述して来た所説で明らかにされたことと思うが、アジア一体化のことなくして、アジアの新秩序は期待し得ないが、これはアジア精神の伝統に還り、道義による互譲協力によつて達せられるべきものと思う。しかし世評はこれを以て単なる理想と断ずる傾きがある。しかしながらわれわれはアジアの新秩序実現を以て単なる理想と断じ、これが実行について戸惑つてはならぬ。アジア問題はアジアに国する日本の運命について直結したものであり、精神的、物質的両面にわたり、アジア諸国に対し最善の協力を図るべきこと当然である。

しかしながら民族精神に方向を与え、新秩序を樹てることは各国民に対し寄せられるべき根本的重大事である

が、これが実現に当たっては、早急に期待することは困難であると思うので、充分の準備と時間が必要と思う。しかも率直に言つてアジアの諸民族は日本に対し、日本の意図を正しく理解し、積極的に日本に協力していないことも現実の姿である。しかしてわれらはこれが原因について深く反省し、日本流の独善性と孤立性を矯めてアジアに溶け込む意気と行動を示すべきことが先決であると思う。

亜細亜学園はその建学精神を「自助協力」で表わしている。しかしその建学精神はそのままアジアの復興とアジアの新秩序建設に役立つものであると思う。かくて亜細亜学園の帯びている重大使命は、前述した維新精神を回顧し、その実現を期してアジアの新秩序建設に微力を尽くすことである。

これ日本の活路を拓くことでもある。

# 時流の重大化に鑑み教育の使命を思う

— 広報紙『THE ASIA』受験生特集号（昭和四十九年十二月十日付）掲載 —

時代は、時流の重大化に鑑み教育の使命観について切々たる期待感を持つようになった。思うに現代教育は「教あつて育なし」などといわれているが、これは教育が人を育てることに留意不足であるということであるまいか。昔から教育は徳が本で、智が次であるといわれているが、今や世相は智徳転倒の観あり、これがため国家生活の基礎であり、各人生活の土台である多くの家庭が、まず相互不信と乱離の状態に陥りつつあること、否定し得ない事実と思う。

イギリスの文豪シェイクスピアの作品『オセロ』の中に「恩を知らぬ子を有つ親の苦しみはまゝむしの牙に咬まらるるにも増す」とあつたように思うが、忘恩児を持つ親の嘆きは底知れぬものがある。人間は徳義の出発点である親孝行の大義を蔑視して、何を策し、いずこに行かんとするのか。人が親の恩義を忘れたなら、すでに人たるの資格を失つたものである。これはつまり、教育の權威失墜を語るもので、現代流行のいわゆる「放任主義」be alone」に対し、教育が無条件の譲歩をしたものではないか。

荒蕪地を自然のままに放任しておくなら、その荒蕪地はますますひどい荒地となるように、もし人心の開拓を放任しておくなら、人世における美風良俗を作り出すことは至難である。ここに教育の重大使命があるように思

う。いうまでもないが、国家の財産目録の中で徳義が最上位に在る。もし国民が徳義を輕蔑<sup>けいべつ</sup>したなら、国民は良心を失い、国家はついに亡滅の非運に陥ること、史跡の明証するところである。

わが亜細亜学園は、微力ながら上述した教育の使命感に留意し、これが一方法として特にゼミ制度の充実活用を期し、先生と学生との接触を密にして研究と育成について内外の期待に<sup>こた</sup>えようとしている。

なお本学においては昭和四十九年四月に修士課程の開設を見たが、さらに昭和五十一年度には博士課程を設置して研究教育の充実を計る存意である。また研究室の拡充をはかり、研究の効果を促進するため昭和五十年度に研究棟を建設しようとしている。さらに本学の特色を一段と強く發揮するため留学生センターを設置した。

かくて本学は従来の教育活動の諸方面に対し新機軸を打ち出し、さらに教育内容の充実を期した次第である。よって必ずや大方各位のご期待に<sup>むか</sup>い得るものと信じている。

## 音楽は「まこと」の表現

— 亜細亜大学吹奏楽団『創立十周年記念定期演奏会プログラム』(昭和四十九年五月五日)所載 —

亜細亜学園吹奏楽団が年々発展の一途を辿りつつあることは、東京都大学吹奏楽コンクールにおいて見事な進境ぶりを示したことから観ても明らかであつて、大慶の至りである。而してこの事實は、団員諸君の弛まざる精進努力の結果であるが、今後もこの道の開発向上を期して錬磨修養を積まれんことを切望する。

思うに音楽は「真」が感情となつて表現されたものであるから、主役は演奏者の「魂」にあると思う。よつて音楽が単に機械操作の巧拙のみで決せらるるものでないこと明らかであり「魂」の入らない音楽は、音楽たる真価が発揮されないのではないか。このことは独り音楽に限らない。

表現の美はそれなりに価値はあろうが、表現に宿る生命の躍動はさらに大切であつて、切々として人心の琴線に触れる「或るもの」こそ貴重価値あるものと思う。この「或るもの」は芸術の本体である。「まこと」であり、「美」であり、「いのち」であり、不朽力を有つ創造力である。諺に「美を為すこと是れ美なり」との語がある。美は美わしい生活そのものであるという。これ万世を貫き、かつ真実に生きる「美」の実相であるまいか。

この見地から觀察して思うことは、昔から偉大なる芸術家—音楽家—はまず自己の人生觀の確立を期したもので、これがためには自己の修養に刻苦勉強したこと当然であるが、これこそ万人の魅力となつた大芸術の因つて

生まれた動因を語っている。即ち生活美が芸術美を築いたものである。本団が一昨年開催された第八回定期演奏会の曲目の中に、ベートーベンの「悲愴ソナタ」が出ているが、私が伝記で承知しているかぎりでは彼は、まず人間としての修業を積んだ偉大な音楽家であつたように思う。

私は生来の音痴で吹奏楽のイロハの知識も有っていないが、吹奏楽と並んで善い歌を、もっともつと普及してもらえたなら国家、社会のためどんなに幸せであるかとつくづく思うものである。フランクリンの言として伝えられているが「若し永久に世を感化せんと欲せば善き歌を作るべし」と、正に然りと思ふ。

かつてジョン・ハワード・ペインによって作られた世界的平民歌「ホーム・スイート・ホーム」のごとき、その感化力は無限大で、全世界に向つて「家庭」の意義を鼓吹した功績は計りしれぬものがあつたという。敢て外国絶讃の名歌を引用したりして絶讃するのみでない。現代に「家庭」を求むることの難しきこと周知のとおりである。正に家庭断絶時代の感あり、親も子も共に、「家庭」を歎き寂寥悲哀の思いで胸一杯である。家庭の断絶は、国家の断絶と直結し、やがて亡国の兆を示すものである。而して家庭断絶を救う靈化力は万百の説教、著述より素朴純情の家庭美を歌う歌があるのみと思ふ。

音楽、詩歌の有つ使命は絶大である。しかし之が生命力を創作し、発表して人間生活を甦生せしむる主因は人間に宿る「魂」の偉力にある。団員諸君は音楽の重大意義に省みてまず自己が修養琢磨に努むべき時代に在ることを深く思ふべきである。

## 第五回學術文化連合祭に思う

『第五回文連祭プログラム』（昭和四十九年六月十日～二十二日）所載―

學術文化を産むものは「氣高い（ノール）精神」で、古來からの創作、逸品はいずれもこの精神を独自に身に反映した人達の雄想、名作であつた。無主義、無節操、非倫、非徳の唯物思想からでは眞實の學術、文化が産まれるはずがない。よくいわれる言であるが、噴水は水源より高く上がらない。詩はその作者である詩人より大であり得ないとは眞言である。いくら美辭麗句を並べて見ても、いくら宇宙万有の鉄則を語つてみても、それはただその人なりのことで、それ以上に社会、人心に影響を与える作物や解明をその人に期待することはできない。

たしか、シルレルの言であつたと記憶するが「人生は眞面目なり」は千古を貫く名言である。この名言の意義を心に体得することによつて、人生に裨益<sup>ひえき</sup>を与うる眞實の學術文化の誕生が期せられるばかりでなく、之<sup>これ</sup>が所産<sup>もつ</sup>に対し人類に共通する不変の価値付けが期待されることになる。学生時代に眞理に不変的意義を修得し、以て人生における眞偽、是非の判断を識別する眼力を養うことは正に活学を体したものである。

# 大望を抱く青年たれ

## ——昭和四十九年度卒業式訓辞——

『青々会報』第二十四号（昭和五十年三月十五日付）掲載——

卒業生諸君。おめでとう。亜細亜学園は、全学を挙げて諸君の卒業を祝し、諸君の前途に多大の期待を掛けていることをここに表明いたします。

我が国では昔から大学出身者は独自の風格をもつといわれておりますが、実力を重んじ肩書を顧みないといわれている外国においても、大学教育を受けた人物に対して特殊の美点を連想して考える傾向があります。

これは何も大学出身者であるからという特権意識を連想していわれたものでなく、大学出身者が世に処し、人に接した場合に見られる人格的信頼度が高いということ、すなわち社会人としての教養が積まれているということを示したもので、この大学出身者としての美風はぜひ存続せしめたく思います。そしてこの種の教養はいかにして養われたものか。

思うにこれら高等学校及び大学生活時代において養われた賜物たまものによることが多いようです。

すなわち高等学校及び大学生活にはそれぞれ寮生活があり、またそれぞれの趣味、趣好により結成された各種



団体の活動がありますが、学生はこれに参加し、協力することによって活きた学問である教養の体験が得られたものと思われれます。そしてこの場合の教養の体験とは、協力の体験ということでありまして、現代生活におきましては最も貴重な道義を体験したわけであります。

協力について思うことは、今や世界は危機と緊張時代に当面しておりますが、これに対処するため、われら日本人に対しても反省への巨鐘が強く鳴らされていることを深く思うべき秋であるということでもあります。これを端的率直に申しますれば、新時代開発のためわれら日本人はその性格的欠点として指摘されてきた独善性と孤立性が、今やはつきりと国際的生活面に反映されている現実面に鑑み、これが是正されざるまま時代の転換期に臨み得ないことを反省すべきものと思います。

そしてここに、これを示すべき好き例があります。

諸君が社会人として内外に活動する時、他山の石として反省、自戒すべき実物教訓と信じ敢て引用する次第であります。

昨年十一月二十六日及び翌二十七日の両日にわたり、わが外務省はかつて東南アジアの八カ国から留学生として日本に來り各大学に学び卒業して、帰国して活動している五十名（内婦人十二名）を招待して、日本の東南アジアにおける経済活動の現況に対し率直な意見を聴取したことがあります。

参加者の一人で昭和四十五年一橋大学を卒業したインドネシア人曰く、インドネシアにおける日本の実業家はインドネシアの地方住民から孤立し、日本人の仲間だけで生活し、しかのみならず、かつての日本留学生であつたわれらに對してさへ良い地位を与えてくれないと。また東京大学を卒業したフィリピン人の曰く、日本人が東南アジア人とゴルフを共にして遊んでいるのを見たことがないと。

さらにこれも東大を卒業したタイ人曰く、文化交流は一方的であってはならない、また東南アジアの文化を日本にも輸入すべきであると。また東京水産大学を卒業したシンガポール人の曰く、善隣友好関係の思想を開拓し、文化交流を促進すべきであると。以上はそれぞれの地域から来た留学経験者の対日観の一部であります。

この記事は招待日の翌日である昨年十一月二十七日のジャパン・タイムスが「日本人は東南アジアにおいて仲よくやっつけない」 Japanese don't "mix" in S.E. Asia という題で報道したものをそのまま引用したものであります。

こゝで“mix”という語を使っていることは特に注意すべきものと思います。

仲よくやっつけない、打ち溶けないということです。

かくて問題は日本人の誠実、良識という心の問題でありまして、政治、外交、経済は二の次の問題であることを明示したものであります。しかしながら、このことはいわゆる南北問題に限らず、東西問題例えば全欧安全保障協力会議の推移を觀ても明かでありますが、①国境の不可侵、②内政不干涉といった外交、政治問題は例によって例のごとく一時を糊塗して済ませ得ましたが、③東西間の文化及び人間の自由な交渉といった核心に触れた問題となりますと、あるいは閉鎖主義を採り、あるいは自己流のイデオロギーを固執して協力の実を棄てて顧みないことが依然として国際会議の実相であることを示しております。

我等アジアに国するものは、世界の現実に対し深く留意して、いわゆる経済第一主義から脱却し、先に引用した東南アジア留学生の忌憚なき忠言にも見られたように、現地人との間のイコール・パートナーシップ、相互協力という相互信頼関係、すなわち人対人の関係、相手と共に生きることの基本関係の実現を期すべきことが先決であると思います。

そして、問題の現実化は現地実情の關係もありましてなかなか容易ではありませんが、結局は、自分自身が資本となり投資となるべきことを認識し、忍耐<sup>もつ</sup>以てこの基本關係の確立を期すべきこと国家百年の計として心に期すべきものと信じます。

眼前に觀られる一時的な唯物現象のみに心を奪われて性急短慮<sup>せいしつたんろ</sup>以て輕々に事を斷ずることがありましては、徒に恥を内外にさらすことになりましょう。

このことは国家興亡史を觀ても明らかでありますが、国家は理想を以て興り、理想を失つて亡びることは明白な事實でありまして、現代のいわゆる世界の大国がしだいに興国の理想を失い自ら求めて亡国の跡<sup>あと</sup>を辿りつつあること周知のとおりであると思います。

亡国の兆<sup>きざ</sup>しに見られるように、金と物とエゴ万能で世界的成功を収めて見たところで、結局は痴人の夢を遂<sup>お</sup>うことに外なりません。

諸君は世界の大転換期に生を享<sup>う</sup>けたものであるから、まず現代世相に見られるいわゆる行き詰まり思想の原因が何であるか、その原因を窮め以て自己の重大使命に想到すべきものと信じます。

ここで私は、諸君に対し本学の建学精神である「自助協力」について思いを新たにし、これを処世訓として役立たせてもらいたいものと思います。

私は現代生活における日本人の「協力精神」の不足とこれが役割の重要性について述べてまいりましたが、諸君も承知のごとく「協力」といっても単なる妥協、追隨を意味するものでないことは明らかであります。

「自助」すなわち自主独立精神が肝要であり、この精神がお互いの間に交流共鳴するところがあつて、「協力」の実が期せらるべきものであることもハッキリしております。

私は『建学精神を語る』の小冊子において自立は真理であり、徒に他に依頼することは虚偽であると断じました。

大転換期に当面して、時代開拓の大業に取り組むべきものの心得は真理すなわち「まごころ」に立つた自主精神を持つことであります。そして、この自主独立精神こそ国家、民族の指導精神でもあるのです。

さらばこの自主独立精神はいかにして養い得べきものか。これは各人がsimple lifeすなわち「簡易生活」を実行することによって体得し得るものと思います。

詩人ワーズワースは「低き生活、高き理想」と申しましたが至言であります。

理想を有った人は例外なく、低い生活に甘んじ「簡易生活」に高い理想の実現を期しております。これに対し、理想を有たない人は自己主義的、唯物主義的贅沢生活を送ることだけに人生の意義を感じているようであります。

思うに簡易生活は常識生活でありまして、家庭を浄化し、国家を健全化せしむる動力であります。

況んや本年に展望せらるる深刻なる経済危機を克服し、時代の新展開を計らんとするに当たっては当然のことながらまず生活の簡易化を計り、規律、節約生活を断行することが刻下の急務であると思います。この際、この秋、諸君は日本人の進取的伝統精神を蝕ばんでいる独善、孤立の根性を一掃し、腰に帯して立ち、堂々たる姿勢を以て新時代の開拓者として内外に対する重責を果たすべきものと思ひます。

しかしながら、この後に展望せられる諸君の人生航路は決して楽なものではなく、恐らく波瀾万丈であらうと思われませんが、断じて失望落胆してはなりません。

諸君の前途を照らし導く明けの明星は必ずや中天高く輝やき以て諸君の前途を導くことでありましよう。

明治九年ウィリアム・クラークが札幌農学校を去るに臨んで札幌郊外の島松まで見送りに来た学生に残した

「ボーイズ・ビー・アムビシヤス」青年よ、大望を抱け」の名言は、現代学生の間にも復活しつつあり、現代青年に對し、明けの明星の大役を果たしつつあります。「青年よ、大望を抱け」とはすばらしい忠言であります。そして或る人の語っているごとく、普通にいう「ボーイ」とは二十五歳以下の青年を指すものでありますが、ここにいう「ボーイ」とは決してこれに限らない。「ボーイ」とは、「アムビション」を有する人ということで前途に大いなる希望を抱き邁進する者は、たとえ六十でも七十でも「ボーイ」であるとのことです。つまり「ボーイ」であるか「オールドマン」であるかはその人の心持ちによつて決まるものであることを篤とくと思ふべきであります。諸君はいつまでも大望を抱く青年であつてほしい。小成に安んじる老人（オールドマン）になつてはなりません。

さらば諸君。諸君は今後とも身心を大切にして内外の切なる期待にこたえてください。

卒業生諸君。さようなら。

## 学友会の本来的使命を思う

—昭和五十年 度『学友会誌』所載—

古代ギリシャの哲人プラトンの国家観の一節に曰く、「人は独り立つて完全なる能わず、国家と共に完全なるを得べし」、完全なる国家がありて完全なる人がある。また国家をして完全ならしめんと努力して、人は自らの完全を計るのである。道徳を離れて政治を論ずる事ができないように、政治を離れて道徳を論ずる事はできない。道徳は個人の政治であつて、政治は団体の道徳である。

周知のようにギリシャの運命は文字通り槿花一朝の夢に過ぎなかつたが、その文明はソロンの憲法、プラトンの哲学、フィディアスの美術、ソクラテスの信仰などで代表されており、現代においても人類にとり不滅の貢献をしている。而して、前述したプラトンの国家観もまた独自の色彩を打ち出しており、現代生活においても貴重な示唆を与えていること明らかである。個人对国家の問題は現今においても論議の焦点であるが、その方向づけとして個人は国家のために存在するもので、国家は世界人類のために存在するものであるということで大勢はほぼ一致した見解にあるように思う。

かくて個人はその国家観を誤つたならば、いたずらに唯物独裁的か利己主義化に流れ、竟に品性の破産を招くことに至ること明らかであるが、国家もまた本来の存在理由を失つたものとなり、竟に亡国の悲運を招くことに

至ること当然である。即ち国家は理想を以て成るものであるから、その構成要素が理想を失ったならその天職を充たすべきものがなく、またその天職を遂行するための意気地を失うことになるからである。よって思うに歴史の示す興国の要因について考えること切々なるものがある。

而して歴史が率直端的に明示しているものは人物の問題である。これは平凡であるが普遍的真理である。即ち国家興隆の原因は、国民精神と国民の有望を体得した人物の出現によつて決せられるということである。而してわが国における之が具体的実例は明治維新に見られた志士仁人の蹶起であるが、いずれも国民精神が凝固まつて人と成つて生まれきたもので、之を現代に復活せしむべきことの急務は多言を要しない。

之について思うことは教育の大事、大切についての反省である。或るイギリス人は教育を定義して「教育は環境である。鍛鍊である。生命である」と言つた。けだし名言である。茲では discipline すなわち「鍛鍊」について触れて見ようと思う。discipline とは自制とか、規律とか、鍛鍊とか訳されているが、教育の効果としては大事なものである。別して大学教育は受身 (Passive) で教えられる所ではなく能動 (active) すなわち進んで己を教育する自主力を得る所であるから、万難を排し、以て自己の将来の大成を心に期して努むべきものと思う。而して之がため「鍛鍊」の意義を自覚し、自己の修養を積み重ねるべきものであるが、この修養は大学教育と不可分であることに想到して友人、同志との関係を一段と強化し、鍛鍊の機会を領つことが必要である。

時代は正に鍛鍊時代である。之に関連して思うことは、今や世界は例外なくインフレーションの苦難に悩まされている。而して之が対策に心血を絞りつつあること各国指導者間に見られる共通現象である。その一例であるが、アメリカのフォード大統領はアメリカ国民に訴えて、インフレーションはわれらの国家、家庭の自由を破壊するものであると警告し、之が対策として各人の犠牲と協力を要求し、別して特に鍛鍊の必要を強調し、之が実

現し得るならインフレーションに打ち勝つべきことを得べしと誓っている。鍛錬が人生修業の正念場しょうねんばであることを知るべきである。

世界の大転換時代に在って、大学生活において人生の大事を学ぶ諸君の使命と責任はまことに重大である。而して学友会の大学観はプラトーの国家観と相通ずるものがあるように思う。大学はわれらにとつて国家的表徴であり、われらはその構成分子であつて正に運命共同体である。プラトーの言を引用するなら「国家をして完全ならしめんと努力して人は自らの完全を計るのである」と。すなわち母校を完全ならしめんと努力して、われらは自身の完全を計ることになるのであるという。

よつて知るべし。現代におけるいわゆる大学騒動のごときは自己輕蔑けいべつも甚はなはしいもので最大の恥辱である。学友会は夙もとにこのことに着目して率先して母校の柱石となり、母校の發展に協力し、母校を完全ならしめんと努力しつつある一方、之によつて友人と共に自身の完全を計りつつあること敬服の至りである。而してこの種の修養はまた世界的大變局の舞台に登場すべき人物となることを期することであると思ふ。

諸君よ。自重、自愛せよ。



## 時代に羽撃く学徒の夢を思う

—昭和五十一年度『大学案内』所載—

今や世界は自らの運命を決すべく大転換期を迎え、反省への警鐘強打を受けつつあること周知のとおりである。これは世界の国々が治乱興亡の哲理に背き、自ら求めて自己清算をあえてしつづけることを示すものと思う。

さらば、事のここに至った原因は如何。これが解答を端的にいわんか、国家、民族の「品性の破産」に主因があるということである。いうまでもないが、国家、民族は個人を含めていうが、一種の理想をもって自存し、自衛しているものであるから、もしその理想が喪失したなら、如何に文化を誇り、黄金を山と積んで見たところで、国家、民族はその魂を失って「生ける屍」となり、ついには内外の重圧に耐えずして内憂外患を招き、衰亡の途を辿るに至ること世界史はハッキリと語っている。

しからば、これが事前の対策は如何。対策の主役はこれを教育に托し、その振興に全力を尽くすこと以外に途なしと思う。換言すれば、国家はその施設の重点を教育に置き、国民協力の下に有為の人材を求め、もって国家、民族の理想を復活せしめ、国民にその使命觀を徹せしめることである。

かくて教育の主眼とするところは、その原点に立って、まず学徒の品性を陶冶し、もってその大望を実現せしめることが先決であると思う。わが国の場合について考えるに、わが国家および国民の理想は「和」を中核とし

た建国精神の実現に在り、明治維新はこれを復活強化して、さらに前進せしめたものであった。しかして「万里の波濤<sup>はとう</sup>を拓開」せんとした民族の大夢は、この建国精神を指導精神とした当時の志士仁人の心に宿り、もつてアジアを舞台として挺身し善隣友好の柱となつたもので、これら先達のことを顧みるなら実に感無量である。よつてわれら現代人、別して学徒の活躍もまた先人のあとを踏み、日本精神を身に体し「これを古今に通じて謬<sup>あやま</sup>らず、これを中外に施して悖<sup>もと</sup>らず」と仰せられた大御心<sup>おおみこころ</sup>の方針<sup>じゆんしゆ</sup>を遵守し、もつて日本民族魂を、世界史的意義に寄与せしめるべきものと思う。

これを外国の例について観<sup>み</sup>る。イギリスの有名な天文学者であつたハーシュエルは二十歳のころ、友人に語つていわく「わが愛する友よ、我々が死ぬ時には、我々が生まれた時より世の中を少しなりとも良くしてゆこうではないか」と。何とうるわしい理想であり、頼もしい誓いではないか。彼の言は当時のイギリス人の理想と、これを裏づけた信仰の反映であつたのである。

亜細亜学園の建学精神は「自助協力」である。自助は他力本願を排し、自己の運命は、自己自ら切り拓<sup>ひら</sup>くべしということであるが、自助で得た友人同志こそ、初めて協力の実を結び得るということを説くのである。しかし、亜細亜学園の抱く教育の夢は大きく、有為の人材を育成し、もつて内外の輿望<sup>よぼう</sup>に応<sup>こた</sup>えんとしつつあること周知のとおりであると思ふ。

# 備えあれば憂いなし

## 昭和五十二年度入学式訓辞

昭和五十二年度の入学式における訓辞。—広報紙『THE ASIA』第百六十五号（昭和五十

二年四月二十五日付）掲載—

本日ここに本学において晴れの入学式を挙行することを得まして、まことに幸せの至りに存じております。

新入学生諸君、入学おめでとう。亜細亚学園は全学を挙げて諸君の入学を祝し、諸君が大いなる希望を抱いて勉学し、以て将来の大成の基礎を作ることを期待しております。

諸君の中に承知の方もあると思いますが、明治維新の志士に佐藤信淵きとうしんえんという先生がおりました。そしてその佐藤先生は、学問することを鍊達するといっておりました。

すなわち学問は、花見遊山的気分でその目的を達成し得るものでなく、身心の鍛練で達し得るものであることを説いたものであります。

この事例は、諸君にとり、今後の学問勉強に対し、厳しい教訓とも受け取られるかも知れませんが、諸君は本日の大変な大学の入学式に際しまして、特に心に留めていただきたく学問勉強への道を拓く心の鍵であると感じ

まして、ここに引用した次第であります。

憶うに、諸君が社会人として立つ時の内外情勢について思い至ります時、諸君は、恐らく歴史的な大転換の舞台に立つことになろうかと思われまふ。よつて諸君は、苛烈なる内外情勢に当面しながら、大学に入学して勉強、修養するわけありますから、自らの地位責任について深く反省して、使命の重大なることに想到し、奮発自愛し、もつて将来の大成を期されたく、私は諸君に対し、大いなる期待を掛けておる次第であります。

諸君周知のごとく、日本は今やいわゆる経済大国として世界に対し独自の存在を示しております。しかしながら、昨今見られるごときいわゆる経済大国によつて、日本の国際的地位が確認され、さらにまたこれがため国家の安泰が期し得られるものでしょうか。

そしてこれが問題点に対し、日本国民の時代感覚と明識とそして決意はいかがでしょうか。問題は正に国家ならびに民族の運命を示唆するものがあります。

私はこの際、諸君に対し内外情勢の激変に対処するため、特に一身の修養を深く期せられたく切望しておる次第であります。

そしてこれがため、諸君は、先人の遺してくださった教訓をよく学び取り、もつてみずから反省の実をいたすべき秋であると思ひます。

中国の古い書に「備えあれば憂いなし」という語があります。

千古を貫く名言であると思ひます。すなわちわれわれの日常生活にありましては、いろいろの形で危機の襲来があります、その時にこれに対し日ごろの「備え」ができておりますなら心配はないということです。

そしてここに言う「備え」とは財産とか、地位とかをいうことではなく「心の備え」「修養」ということである

と思います。すなわち平生のわれわれの生活に対し「心の備え」ができておりますなら、憂い、心配の必要なしということです。このことは至極平凡な事で、だれでも心得ておる常識的訓戒であるように思われますが、現実にはそのとおりにかぬのは周知のとおりだと思います。

個人の場合においても、国家の場合においても、然りであります。これも昔から伝えられておる諺ことわざであります。「油断大敵」ということも、これと関連想起して、これを現代生活に生かし、もって力強い処世訓しよせいしゅんといたすべきものと思います。

憶おもうに現代世相に反映しておる人心の動向については、もちろんのことですが、現にみる国際的駆け引き戦に反映している世界の姿をみる時、これを傍観的立場で見過みすごし得ないものがあること明らかであります。よってわれわれの生活は、内外情勢の推移に注意しながら、悔いのない心構えの養成を忘れてならぬものと思います。かくてここに大学教育を受けるものの、教育、使命とその責任の重大さが浮き彫りにされる理由がハッキリされております。

そして内外情勢が、見るがごとき表と裏との両面の使い分けが行われるに至った原因について考えますと、世界の人心が分裂して帰一するところを知らずして低迷を続けておるからであると思います。

そしてこれが原因について考えます時、ほとんど例外なしに「信」すなわち「まこと」という人間生活の拠よつて立つ土台がしっかりしないためであると思われます。この「信」について私も師事したことがありました、会津武士の典型的偉才で偉大なる教育家でありました山川健次郎先生はこう語っておられます。「信」ということは一口にいえばウソを言うべからず、約束をしたことは必ず果たすべし、ということであると申されておりました。そして教育勅語に「朋友相信ほうゆうしんじじ」とあり、戊申詔書ぼししよにも「惟信、惟義いぎ」とあり、天皇陛下におかせられては

「信」ということにつき特に重大意義を御認めになり、深く御留意になられておること周知のとおりであります。山川先生はこの「信」に関し、「約束」ということに言及し、所信を披瀝ひれきされております。

先生の申されるには、約束に四つある。すなわち一、証約、すなわち証文による約束、二、口約、すなわち口約束、三、黙約、すなわち証文による約束でもなく、口頭による口約束でもないが、以心伝心で暗黙の裡うちに相手方にそれとなく伝えられるもの、以上三種が普通にいわれる約束であります。しかるに山川先生はこの三種の約束の外に、さらに「心約」、すなわち自分自身が自分の心の内でする約束というものを加えられて、約束に四つありと申されております。

そして先生の申しとおられる心約とは自分が自分に対し約束するものでありますから、他人はもちろんこれを知りませんし、知る由もありません。そしてこの心約について、山川先生は、日露戦争当時の乃木大将の心事を察せられて、これを解明されております。

乃木大将は乃木神社として赤坂の旧邸跡もとに祀まつられておられることは、諸君も承知のことと存じますが、その乃木大将は日露戦争当時、旅順攻撃の司令官として第一線に立つておられました。が、作戦上の必要から急速に旅順を陥落せしむる必要に迫られておったのです。

よって乃木大将は無理を承知の上、部下に対し多大の犠牲を求めた上でついに目的を達したのであります。

山川先生は乃木大将の当時の心境についてこう語っておられます。「国の為ためであるから仕方がない。気の毒ながら君等行って死んでくれ」しかしながら、君等ばかり死なせておかぬぞ。俺おれもそのうち死ぬ。今は軍司令官の身分であるから、君等と第一線に行つて戦死するわけにはいかぬ。時機を見て死ぬから、気の毒ながら、君等どうぞ死んでくれ、と乃木大将は当時こう思われたに相違ないと山川先生は話しておられました。そして先生は実

よく乃木大将の心境を洞察<sup>とうさつ</sup>しておられたのであります。

そして乃木大将は、明治天皇の崩御<sup>ほうぎょ</sup>に際し、前に述べましたごとく、かねて部下に約束したその約束をこの機会に実行され自刃<sup>じじん</sup>せられたのである、と山川先生は話されております。

乃木大将の人格と山川先生の人格はともに共通されたものがあり、万世に亘<sup>わた</sup>り、万人の仰ぐべき不朽の亀鑑<sup>きかん</sup>であつたと思います。

心約すなわち自己自ら自己の心に約束する、そして人に知らさずに自らこれを果たすという、なんと素晴らしき道義心ではありませんか。けだし道義の最高峰に立つものと思います。

約束は必ず果たすべし、そして約束の主役はまず第一に自己自らです。そして自己を断じて自ら欺くべからずです。よって諸君は自己の修養の基本として「信」すなわちまことの教訓を深く身に徹してほしいと思います。

かくて「朋友相信<sup>じ</sup>」の精神、すなわちこの心約精神がお互いの間において身に体しておりますなら美わしい友情の実現が期し得るものと思われまふ。

今や時代は経済万能の姿を呈し、唯物打算主義が主役となり世間を横行しつつあるように思われます。しかしながらこのことは一を知って二を知らざるものでありまして、大局の展望に立つて世界の起伏興亡史を眺め<sup>なが</sup>ます時、国家の大事の運命を決すべき重点はそれぞれの国家を構成する各人がまず自覚して自分自身の身の踏むべき道を誤らず、進路の確立を計るべしということにあります。

これは世界の通路をだれ憚<sup>はば</sup>ることなく堂々として闊歩<sup>かつぽ</sup>し得る素地を作り得るものは、各自自身であるからです。そして修養とは自らこの境地を耕し作ることなのであります。問題は極めて平凡でありますが、この平凡事が実は極めて重大事でありまして、これが軽視されるところに現代世相の不安があるわけです。

諸君は前途有望の学徒として責任の重大を自覚し、まず修養の大事大義を自らの心に銘記し、もってせつかくの勉学の大事に努められんことを切望しております。

終わりに臨み一言いたしますが、諸君は本学に入学いたしました。縁もあり、本学の建学精神である「自助協力」についてこれが精神をよく研究体得し、もって他日の大成の基礎作りに努められんことを期待いたします。

『建学精神を語る』の中でも明らかにしておきましたが、「自助」は自立すなわち自ら立つということを期したもので、「自己を助ける者は自己なり、自己こそ最上の助け主なり」ということを強調したもので、流行の依頼心を戒め、もって真の「開拓精神」を強調したものであります。

「協力」は「自助」と表裏一体を為すもので、まず各自の相互理解を期したもので、時代的使命の重大事に触れており、学生諸君の進路を示した指針であるとも思います。

かくて、「自助協力」は本学の建学精神であり、諸君の今後の学生生活における道標みちしるべとしてしっかり心に銘記してほしいと思います。

諸君の存在は諸君の家庭、学園、国家、ひいては世界の運命、動向を決すべき重大なる地位にありますので、せつかくの自重、自愛を期し他日の大望実現に万全の準備を尽くされんことを切望しております。



# 自主独立精神の維持昂揚

## 昭和五十二年度卒業式訓辞

昭和五十二年度卒業式における訓辞。——広報紙『THE ASIA』第百八十四号（昭和五十三年四月二十五日付）掲載——

卒業生諸君、卒業おめでとう。

亜細亜学園は全学を挙げて諸君の卒業を祝し、諸君の前途に多大の期待を掛けていることをここに表明いたします。

私は本日のめでたき諸君の門出に際し、送別の辞を呈しようと思いますが、これに先き立ち一言申し上げたいことがあります。

それは諸君が今日の晴れの卒業式に当たり、今日まで諸君を愛撫<sup>あいぶ</sup>し育成してくださった御両親、御縁戚の皆様をはじめ、先生、先輩、知友の方々の並々ならぬ御心尽くしに対し、満腔<sup>まんかう</sup>の謝意を心に刻むことであります。そして卒業証書は諸君が社会人として立つ時、心に刻むべき第一の謝恩の記念碑であると思います。

かくて、この謝恩の心が深く諸君の心に刻まれますなら、今や諸君は人生活動のスタートに立つ身であります。

すが、迷うことなく前進し得るものと信じております。

諸君も承知のことと思いますが、中国の古典である『書経』という本に「備えあれば患いなし」（有備無患）という語があります。語は平凡ですが、現実生活におきまして、この語は諸君に対し重大なる意義を有つ箴言であると思います。

我々の日常生活におきまして、もし「備え」がないということでありましたら、われわれの生活は土台が取り払われたようなもので、中味の無い空虚のものとなります。

個人において然り、家庭において然り、国家においてまた然りで、備えのないところに生活の独立と充実がなく、従つて前進もなく、結局のところ他力本願に墮し、自らの自由意思が埋没し去らること明らかであります。因つて思いますに、諸君はこれから社会人として立ち、縦横の活躍を計るわけですが、諸君はまず自己の修養のことを心掛け以て自立し、自己の生活戦において遺憾なきを期すべきであります。

申すまでもなく生活は現実のもので、しかも戦場気分を偲ばしむる厳しさがあることも事実の示しているところであります。そして戦場に休息所が必要であるごとく、生活戦におきまして休息所が必要であること当然のことと思います。

そして、ここにいう生活戦における休息所とは、前にも触れましたが諸君を多年に亘り、陰になり日向になつて諸君の生活をいろいろと見守つてくださった近親、先輩を含めての父母の膝下のことでありますが、これは諸君にとり、何処よりも増した安心のできる休息所であることを更めて認識すべきものと思います。

ここにおいて、諸君は従来の生活及び将来の生活設計について深く考えて、皆様方の大いなる期待に副うべく、決意を新たにすべきものと思います。これも諸君承知の事と思いますが、昔ローマ人が崇拜した神に「ヤヌス」

の神というのがあります。この「ヤヌス」の神は両面の神で、一面は平和を象徴し、他面は戦争を象徴しているものといわれておりますが、この両面の神の表徴は現代における世界の実相をも表徴しているものと思われれます。すなわち、今や内外世相を見まするに、各国ともに名分的、外交的ゼスチャーによって見事な平和的様相を示しておりますが、現実的に見るその取引外交に至っては、複雑怪奇な打算性を示していること周知のとおりであります。

そしてこれに対する根本的対策として考えられることは、各自が拠つて立つ国民的結束の強化を計ることと、これが道義的勇氣を養うことにあるものと思われれますが、現に見らるるごとく、今や各国ともにその国家的ならびに国民的基盤が不安動揺し、弱体化していることも周知のとおりであるように思われれます。

かくて世界の各国は、その歴史の示しているごとく、国家の興亡盛衰の筋道を識りながら、自ら没落の運命を辿りつつあるかの観があります。

私は『建学精神を語る』の中にも引用いたしました但、ローマ史の泰斗であつたニーブルはこう言っております。

「歴史あつて以来、未だかつて外敵の侵害を蒙り、その結果として亡びた国の例は一つもない。亡国はすべての場合において自殺的である」と。味わうべき箴言であると信じます。

そして、この警世語の示している一例であります但、ローマ大帝国は北欧の蛮人が武を以て亡びたものではなく、ローマの人心が腐敗し、その中に正直なる労働が絶え、家庭に貞節が失せ、人民がその心に頼る所なきに至つて亡びたのであります。かくて敵はいわゆる敵国に限りません。内に在つて歴史、伝統の教訓の何たるかを知らない無知、無謀もまた我等の敵であるということになります。

そして今や世間に、広く指摘されていることは現代生活における科学の大きな進歩ということでありますが、しかしながら、これが反面において現代生活における人格の退歩ということが強く指摘されていることは、恥ずかしき限りであります。

かくて国家を以て大いなる理想を行わんとした往年の詩人的、愛国的大人物が段々と姿を消し去った感があることは、まことに淋しき限りであります。思うに国家は国民の魂を基礎とし、国民の魂によって組織されたものであります。かくて日本を創造しつつあるものは君の魂であり、吾れの魂であります。

そして、この事につき、ここに諸君と共にわが国家興隆史について考慮してみたいと思います。それは、日本をして今日あらしめた明治維新に偉大なる影響を与えた人物の一人である、頼山陽についてであります。彼はこう言っております。

「国の国たる所以はその士（さむらい）あるを以て也。士の士たる所以はその氣（すなわち精神のこと）あるを以て也。士は氣（精神）ありてそして後、以て自立即ち独立するもの也。挙国の士、以て自立即ち独立するあれば則ち国立つ、挙国の士以て自立即ち独立するなくば則ち国倒る」

まことに味わうべき教訓であります。現に、今や吾等の眼前に展開されているものは、諸君承知のごとくこの精神この教訓をハッキリと裏書きしているもの、即ち世界各国に見られている興亡盛衰の明暗劇であります。そして諸君は前に引用した山陽先生いわゆる国の国たる所以を作っている氣、即ち魂、即ち自主独立精神の体得者であります。これが具体化した実例として観られるものとして「恥を知る」「約束を守る」というごとき、重大な道義遂行の人たることを期することであります。

かくて諸君は、国の国たる所以を作っている道義の具現者でありますから、現に見られるごとき変転極まりな

き内外情勢下におきましても、立派な主役を果たし得ること明らかであると思います。因<sup>よ</sup>って諸君は年若く、経験浅き所以を以て自ら卑下してならぬこともちろんであります。

諸君は多年に亘り研究した学殖を、家庭や先生、交友などに依<sup>よ</sup>つて得た貴重な人生の教訓を活用し、以て昭和維新の幕明けに主役を果たすべきと思います。

時代は正に大転換期に当面しておりますが、この時局に対処すべき基本方針は、前述したごとく自主独立精神の維持<sup>こうよう</sup>昂揚に在り、これが推進に努むるべきこと肝要であると信じます。

この点について再び歴史の示している実例を觀<sup>み</sup>て、諸君と共に深く反省の実を期しなく思います。これも有名な話でありますから諸君もよく承知の事と思いますが、かつてドイツがナポレオンの鉄蹄<sup>てつてい</sup>下に蹂躪<sup>じゅうりゃん</sup>された当時、哲人フイヒテは街頭に響く鼓声を耳にしなが、ベルリン学士院において青年学徒を前にして有名な『ドイツ国民に告ぐ』という講演をしたことがあります。彼はその講演の中でこう述べております。

「自主独立を失った民族は同時に時流に關与してその内容を自由に決定する能力をも失った民族である。その民族がかくのごとき状態を継続しているものとすれば、時代と共に民族自身までもその運命を制する外国の権力によって整理せられてしまふであらう」

流石<sup>さすが</sup>に時流を見抜いた卓見であります。かくて自ら時の流れを制御し得ざる民族は、ついに外の力に制御せられるべき運命にあること彼の言のごとくであると思います。そして彼のこの至言は、後年ドイツの復興統一に多大の影響力を与えたこと周知のとおりでありましたが、フイヒテのこの『ドイツ国民に告ぐ』の精神は現代日本の進路につきましても大いなる警語、箴言になること必定であります。

今や時流の動きを見ますに、各国ともにその因<sup>よ</sup>つて立つ民族精神はほとんど忘れ去られんとするがごとき觀

を呈しておりますが、これがそのまま推移いたしますなら、それは正に國家の亡滅を意味することになること明らかであると思います。

かくて國民にして、たとえ肉体的生命あり、土地あり、經濟的繁榮あり、これを保護する法律、防衛力がありましようとも、民族精神が亡びましたなら、國家はその生命力を失つて事實的に滅亡したことになること明らかであると思われまゝ。そしてこれは民族が時流の奴隸となり、自主獨立精神を失つた結果であると思ひます。

そして前に挙げました二つの事例は、時代離れのした昔話のように思われるかも知れませんが、断じて然らずであります。

今や國を憶<sup>おも</sup>う精神的躍動は微弱のようでありますが、これが復興的氣運が次第に高まりつつあること、各國識者の間に觀<sup>み</sup>られていゝとおりであります。再言いたしますが、我々現代人はともすれば肉体的生命のみを重視し、人には肉体以上の不朽の生命、精神のあることを忘れ勝ちの傾向にありますが、時代は正に脚下照顧、すなわち足下御用心の誡<sup>いさめ</sup>めのあることについて注意を払<sup>とよ</sup>う秋であると思われまゝ。

憶<sup>おも</sup>うに諸君に対する内外の待望は大いなるものがあります。そして諸君の生活は前進して止<sup>や</sup>むことのない、大いなる希望遂行の生活であります。よつて諸君は大望、即ち大いなる希望を抱いて前進し以て未來の開拓者となるべきものと信じます。

エマーソンの名言である「汝<sup>なんた</sup>の夢を星につなげ」とは諸君よ、大いなる望みを抱けということであります。しかるに今や時代の潮流に対し青年の墮落が問題となつておりますが、これが原因は畢竟<sup>いづつ</sup>するに青年の希望が低く、一時の快樂や、眼前の利害打算に身心が捉<sup>と</sup>われた結果であると思われまゝ。

或<sup>ある</sup>る外人の評語のごとく「物で榮えて心で滅びる」の愚に陥ることのないよう、時流に対し反省すべき秋であ

ります。

かくて上述いたしましたごとく、個人にせよ、国家にせよ、その運命を決する原因は外に非ずして、寧ろ内に在ることを深く自覚し、自らの準備、修養にこれ努むべきものと思ひます。そして諸君は原因、結果、治乱興亡の道理を身に体したものでありますから、迷うことなく人生行路を堂々闊歩して進むべきものであると信じます。今や日本を取り巻く世界情勢は容易ならぬものがあります。

諸君はこの苛烈峻厳なる内外情勢を前にして、社会人として出発するわけですが、正に日頃養つた鍛練修養の実を示すべき秋でありますから、断じて萎靡後退せぬよう努むべきものと思ひます。またこの決意を期することは諸君に対し内外から寄せられている大いなる期待に應える所以でもあります。

最後に一言いたしますが、諸君は亜細亜学園の卒業生であります。よって諸君はわが亜細亜学園の建学精神である「自助協力」精神をしっかりと身に体し、以て新時代の開拓者としての役割を充分に果たしてほしいと思つております。

さらば諸君、亜細亜学園は全学を挙げて諸君の前途を祝し、諸君の前途に多大の期待を掛けていることを、ここで再表明いたします。

諸君、諸君は今後共せつかくの自重自愛を期せられたく祈つております。

さようなら。

# 至誠篤実の人たれ

## 昭和五十三年度入学式訓辞

昭和五十三年度入学式における訓辞。——広報紙『THE ASIA』第百八十四号（昭和五十三年四月二十五日付）掲載——

新入学生諸君、入学おめでとう。亜細亜学園は全学を挙げて諸君の入学を祝し、諸君が心身共に健康にして、将来の大成に対する基礎作りに万全の準備を尽くされん事を期待しております。而して私は、この機会において、まず一言したいことがあります。

それは、諸君が、本日の晴れの入学式に臨み得た幸せについて、深き反省を致し、国の恩、親の恩、師の恩、近親朋友の恩に對し、心から感謝の誠を抱き、以て将来の大成について、わが心に深き誓いを立つべきことです。ります。

而して諸君が、大学教育を受くる好機に恵まれたことは諸君にとり、何物にも替え難き幸せであり、之が活用を深く心に期すべきものと思います。それだけに諸君は、大学生としての責任の重大さを痛感し、勤勉力行以て内外の期待に応うべき決意を持つべきこと当然であります。



諸君承知の事と思いますが、幕末の儒者であつた廣瀬淡窓の詩にこういう名作があります。

道ことを休めよ 他郷苦辛多しと

同袍友あり 自づから相親しむ

柴扉晩に出づれば霜雪の如し

君は川流を汲め 我は薪を拾はん

詩はこういう意味であります。一度志を立てて、遊学したからには、諸君は見知らぬ他国から来たものであるから苦労が多い、などというものでない。ここには同胞、友人たちがおり、自然と仲良くなり、親しくなるものである。朝早く起きて塾の柴の戸をあけて外に出て見れば、霜が降つて、雪のごとく白くなっている。サア、君は川に行つて水を汲んで来い、僕は薪を拾つて来るから、と。なんと美わしい勉強精神であり、なんと美わしい友情光景でないかと思われまふ。

思うに學問は、われわれ生活の修業であり、鍛練の道を行くものであります。樂々とした放縱安樂の生活を辿りながら、學問の進展、成功を期せんとするがごときことは、無理であります。

また學問は、山に登るがごときもので、自分の脚で苦労しながら、深山幽谷を踏破し行くところに、登山の醍醐味が解るものであるということと同じ意義を有っているということです。

而して諸君周知のごとく現代は外患もさることながら、内憂について深く注意せねばならぬ時であります。かくて内憂について思うことは、既に人も指摘しているごとく、(一)いわゆる物質文明の過剰によつて生じた心理的混亂とか、生活の病的傾向とか、退廃的現象などを挙げることを、得ようと思ひます。(二)は破壊的思想、行動の流行であります。すなわち徒黨を組んで鬭争、暴行などを敢てして憚らぬ勢力のあることであります。(三)は一般

的觀察から申しますれば、いわゆる知識人階級が、時流の弊害を矯める勇氣を失いつつあることであります。

かくてこれら病的現象に対して、良識、勇氣ある知識人の蹶起が、期待されておりますにも拘わらず、現実的には、いわゆる知識階級そのものが、一般の期待に反し、その威力を失いつつあるかのごとく観測されていることを、残念至極に思います。

而して、諸君は現下のこの種の卑劣現象について、断じて迷わされることなく、知識人本来の、独自の明識と勇氣を以て、是非善惡の判断を下し、以て将来への抱負実現の爲、堂々と生き抜くべきと思います。

思うに諸君は、亜細亜学園に入学した因縁もあり、亜細亜学園の建学精神である「自助協力」精神をしっかりと身につけてほしいと思います。而して「自助」とは、他力本願を排したもので、頼むべきものは、自分自身の力であるということで、自主独立精神の化体を期したものであります。いうまでもなく学問は、自らの努力工夫による研究精神があつて、上達が期せられるもので、一時的の棒暗記や試験勉強のごとき姑息手段では身につかぬこと明らかであります。再言いたしますが、本学園の建学精神は「自助協力」であります。その「自助」は自立、すなわち自ら立つということ、依頼心を排したものであります。かくて自助精神によって自らの運命は自らの力によって切り拓くべしということで、この自助精神による研学精神はまた諸君の人生行路における大事な指針でもあるものと信じます。而して「協力」の意義につきましては、時代色を反映しておりますが、之が重大意義を蔵していることは推察できるものと思ひます。

今や諸君周知のごとくわが日本は經濟繁榮の故を以て内外に喧伝されておりますが、之が実相は果たしてどうなのであるでしょうか。批判はとにかくとして、日本の実情は断じて手放しの樂觀を許し得ないこと極めて明らかであります。

かくて識者によって心配されつつある時代の重点は、日本人の「生命」lifeが揺れ動きつつあるのでないかという点であります。思うに国家は国民の偉大なる「生命」「魂」を以て起こり、これを維持、発展せしめて行くことによって、いよいよ国家の偉大性が保たれるものでありますので、もしこの興国の動力が喪失いたしまするなら、国家は「亡国」の悲運に陥ること明らかであります。

今や時代の潮流は、諸君承知のごとく、また前にも触れましたが、容易ならぬものがあります。而してこの間、国家興亡史の示す生々しい事例が、眼前に展開されつつあることも、周知のとおりであると思います。而して私は、時代の潮流を觀て祖国日本が、民族的試練期に在ることを痛感し、諸君と共に国運発展のため最善の力を尽くしたいものと思っております。

かくて今や時代の要求するものは、至誠篤実の奉公的人物であり、国の運命を双肩に担って立つ頼もしい人物であります。諸君は内外の重大なる情勢下に在って、深く責任の重大さを身を以て痛感すべきものと思ひます。

思うに諸君は、諸君の前途に對する大いなる希望を抱いて亜細亞学園に入学したものだと思ひます。紀貫之の名歌に「ことしより 春しり初むる桜花散るといふことはならはざらなむ」とありますが、諸君は立派な見事な桜花として入学したものであります。何を好んで「散る」即ち墮落の底に落ちてゆくものがあるでしょうか。諸君は立派な向学心を抱いて大学入学を志して之を果たした有望の青年学徒であります。諸君は断じて「散る」即ち墮落に陥つて身を汚すべからずといふことの戒めの語を、深く心に刻んでほしいと思ひます。

前にも申しましたごとく、今やわが日本は、いわゆる經濟繁榮を表看板として、世界の引力を惹きつけてきた觀があります。經濟繁榮はもちろん結構であります。しかしながら、今や世界の情勢と日本の立場から見まして、いわゆる經濟事情が、世界的引力を惹いている一枚看板であるということは、満足し得ないものがあります。か

つてナポレオンはイギリスを評して「小商人国」nation of shop-keepersと冷評したことがありますが、事實はとにかくといたしまして、国家の使命面目が、利害打算一本槍として写し出されているならば、淋しくもあり、情けなき限りであります。前にも申しましたごとく国家は、国家の理想を表徴した国民の偉大なる「生命」即ち「魂」を以て起り、之を維持し、發展せしめてゆくことによって、いよいよ国家の偉大さを現わすものであります。かくて「興国」即ち国の興ることは国家の理想を反映したものでありますが、「亡国」（即ち国の亡ぶこと）に至りましては国家の理想が喪失したことを意味します。而して主因の一は、国民の品性の墮落、破産が招くものであることは明らかであります。

諸君は、本学に入學した因縁もあり、特に意を用いて国家興亡史を研究し、国家及び国民が如何にして興り、また如何にして亡びるかの「理由」と「現象」について深く研究し、諸君の人生觀に役立たしめたく、囑望しておるものであります。

而して諸君の識るごとく、今や内外情勢は複雑多難を極め、各国は之が影響を受け四苦八苦の体を示しております。よつて諸君が世界情勢のこの転換期に際し、心を静かにして研学の大事に当たらんとしていることは、寔に意義深いものがあることと思ひます。

かくて諸君は、一段と自愛自重し、以て内外の大事に当たるべき心の修養について、万全の準備に努むべきものと思ひます。而して之が為にはワーズワースの名言である「低き生活と高き理想」に思ひを致すべきことが大切であります。よつて諸君は、學費のムダ遣いを排し單純清潔の低き生活を体して、高き理想に生きて前進すべきものと思ひます。

生活の複雑さは、學生生活を乱す一因であります。かくて學生生活は、まず生活の簡易化から期せられるべき

ものと思います。諸君は自ら反省しながら勉学に努め、以て内外の大いなる期待に<sup>こた</sup>応うべきものと信じます。

## 国運進展の活路を憶う

—昭和五十四年度『大学案内』所載—

想起すれば今を去る三十三年前の事である。昭和二十年十二月三十一日、当時の占領軍は、日本政府に対し、覚書をつきつけて日本の教育に干渉し、修身、日本歴史、地理の授業を停止すべき旨を申し入れてきた。そしてこれが意図するところについては、各位もよく明察されておることと思う。かくて今日、一部に見られるがごとき国民的道義の退廃現象や、自国の歴史、地理に疎き植民地的人物の輩出のごときは、これが一つの原因をここに求め得よう。

翻<sup>ひる</sup>つて世界の国家興亡の跡を觀<sup>み</sup>るに、その主因は國家のよつて立つ道義の興廢<sup>いかん</sup>如何によること明白である。もし國家の道義が乱れたなら内憂外患<sup>うちうがいせん</sup>こもも至り、竟に國運<sup>こくうん</sup>が窮まるに至ること史跡の明証するところである。そして道義の乱れは教育の無力によること多く、教育の中心である自己の確立という、その第一義を忘滅した<sup>ため</sup>のであると思う。よつて思うに、昔から知られている偉大なる人物を見るに、いずれも修養を積んだ人物であり、まず自己において偉大であつたこと周知のとおりであつた。これも周知のとおりと思うが、「国民の不朽」Immortality of nationsという語がある。語は真理の発顯<sup>あき</sup>に与つた国民は不朽であるという意味で、国家国民の興亡は、真理にくみするか否かによつて決せられるということである。即ち、國家は一種の理想をもつて成るもので

あるから、これが維持発展に努むる限りその国は亡びないということである。よって我々は、先人の明識と自らの修養によって堂々たる処世観、世界観に立ち、もって内外の情勢打診に誤りのなからんことを期すべきものと思ふ。

そして今や時代は経済万能時代を出現し、取引と打算が主役となり、人はその手足に過ぎない観もあり、やがて唯物的人生観による世界的変革が予想せらるるに非ざるなきやの憂慮さえ出でかねない情勢である。あたかもよし、この秋に当たり、我々は経済界の二大明星を想起し、もって時代の正しき進路を開拓すべき英智と勇氣とが示さるべき好機が到来しつつあるように思ふ。

そしてここに、いわゆる経済界の二大明星は共に経済と道徳との懸橋をかけ、もって時代の正しき方向を明示した先達であつたのである。そして先達の一人はアダム・スミスで、他の一人は二宮金次郎である。しかもこの二人は共に現代人の眼から観れば恐らく骨董的存在であり、今ごろこの人名を挙げただけで一笑に付せられるかもしれないと思ふ。

しかしながら時代の推移を重視する者にとつては、この二先覚の予言者的出現の意義を重視すべきことは当然である。アダム・スミスの『国富論』は世相に反省を与うる倫理学の一篇であり、二宮金次郎の『報徳記』もまたこれに同じ。すなわち道徳は原因であり、経済は結果であると道破して、身をもってこれを実証していることも周知のとおりである。そして現代人の短見は、ともすれば時代の皮相的支流を見る事にこれ急にして、主力たる時代の本流の大勢を洞察する明識を欠いている点に在るものと思ふ。

よって思うに我々は時代の潮流に対しては活眼を開き、守るべき清節はこれを守り抜き、もって人生の不動性、一貫性に立つべきものである。かくて吾を識る者即ち人生街道を同調同步し得る者、即ち真の友人が与えられる

ことも期し得べし。彼我の間に眞の相互理解が生まれることも当然であると思う。そして友人間における相互理解の実現の爲には、お互いの間において、生活の簡易化を期すべきことが先決であると思う。申すまでもなく簡易生活 simple life は人生をして清潔高尚ならしむるのみならず、精神力發揮の動力たらしむること東西古今の先達が明示しているとおりである。生活の複雑化は、人生をして俗化低劣化せしむること明らかである。

我が亜細亞学園の建学精神が「自助協力」に在ることは周知のとおりである。そして自助協力精神は學問研究の指標であるばかりでなく、人生開拓の大動力であることもまた明らかである。我々亜細亞学園の同友は、時局下に在って我が建学精神の意義を深く感得し、それぞれの立場において、最善の協力を期していることも事実である。

かくて、我々はこの内外の重大なる情勢下に在って、大方の期待實現の爲、万全の努力を期し、もってこれが負託に應<sup>こた</sup>うべきものと思う。



# 太田耕造学長の略歴

明治

22年12月15日

福島県信夫郡福島町大字福島字萬世町35番地に太田貞郎、ツ

タの四男として生まれる。(昭和55年現在、福島県福島市大字

福島字新町94番地)

大正

5年7月31日

第四高等学校大学予科第一部(法科)乙類卒業(現金沢大学)

9年7月

東京帝国大学法学部英法科卒業

11年2月

東京地方裁判所所属弁護士登録

昭和

13年4月

法政大学法学部教授

14年1月6日

平沼内閣総理大臣秘書官

14年4月7日 平沼内閣書記官長（現官房長官）に就任（8月30日依願免本官）

14年8月28日 貴族院令第一条第四号に依り貴族院議員となる

16年4月 財団法人興亜協合理事に就任

20年4月7日 鈴木内閣文部大臣に就任（8月17日依願免本官）

22年11月 弁護士再登録

29年5月 学校法人亜細亜学園理事長に就任（31年8月まで）

日本経済短期大学学長に就任、現在に至る

30年4月 亜細亜大学を設立し、学長に就任、現在に至る

36年5月 東京福島県人会会長に就任、現在に至る

福島テレビ株式会社取締役会長に就任（41年9月12日まで）

40年11月 勲一等瑞寶章を受ける

## 終戦の詔書渙発に際して（文部大臣談話）

昭和二十年八月十五日、終戦の詔書が渙発せられた。太田先生は、この時、鈴木内閣の文部大臣として、終戦時の未曾有の難局收拾に尽瘁された。戦後、本学の発展のために全力を傾注して来られた先生の精神的な源が、この「文部大臣談話」にあると見られる。先生の教育に対する変らざる信念の源を知るためにもと考えて、本文をここに紹介する次第である。——『歴代文部大臣式辞集』所載——

日本全国の学徒諸君

八月十五日正午の感激は、お互いが終生忘れ得ない感激である。大東亜戦争終結に関するあの御詔書を拝聴した諸君の胸中は、察するに難くない。私は、御詔書に滲み出ずる御苦悩の如何に深く在しますかを拝察し奉りて、御奉公の足らざりし為に、かくも宸襟を悩まし奉ったことについて、慚愧と自責の念に堪えない。

皇国の必勝を信じながら、学業を擲ち、前戦に銃後に出陣して敢闘の範となった諸君が、血涙を絞って悲憤し、慟哭されたのも無理はないと思う。戦線では勿論、工場でも農場でも諸君は真に良くやってくれた。私の胸は、感謝で一杯である。しかるに、此の諸君の期待を裏切る結果となった事に就いては、諸君に対しても全く申し訳がない。

しかしながら、聖断は既に賜った。詔書必謹は、皇国臣民道の根幹である。国家を永遠に活かす道からも、臣子の分別を致す上からも、今日は、沈着平静しかも毅然として現実の矢面に立つべきだと思ふ。

我等の今後の生活は、苦難に満つ。学業もまた荆棘の徑を拓いて行くのである。諸君の重任は、昨日迄の敢闘を以て終わつたのではない。今日よりは更に、日本の科学力と精神力とを全的に最高の水準に押し上げる責務が課せられている。国家復興の設計図表を精密に真剣に描くのだ。

諸君は、長らくの間、教場にも書籍にも遠ざかっていたが、戦時奉公の体験から、学問研究に対する原則指針というものを発見したに相違ない。私は、諸君の素晴らしい再出発を期待している。

## あとがき

亜細亜学園において、昭和五十五年十二月十七日の部長会議で、創立四十周年記念事業の一環として「太田学長の教育方針に関する文章を刊行する」ことが決定され、まず広報室長を中心にして資料を収集することになった。同五十六年一月十四日に、そのための編集委員会が設置された。

編集委員会では、学長室と広報室とによって収集された百二十五編の文章の中から、どれを採録するかという作業を行った。学外の雑誌に掲載された論文も数多くあったが、基本的には、創立四十周年記念事業の一環としてであることから考えて、大学・学生団体の出版物において発表されたものに限ることとした。また、文章の選択に際しては、そのときどきの大学の状況や時代背景、太田先生の物の見方、考え方がわかるように、時代を追いつつ、幅広いテーマを収めるように努めた。

表題をどうするかは、委員会においていろいろ考えたが、結局『自助協力——亜細亜学園学生に与う——』に決まった。

太田先生の本学園におけるご著書は『建学精神を語る』（学友会編・昭和四十三年初版）、『回顧と前進』（明治百年記念特別連続講座での講演録・昭和四十五年刊）について三冊目となる。学生諸君には特に本書を座右に置き、太田先生の教育精神を深く学んでほしいと思う。

全体的な文章の校閲は、夜久正雄教授が、編集に当たって漢字、仮名遣いなど表記については富田隆行教養部講師が当たって、学生諸君の読み易いように引用文等を除き常用漢字、現代仮名遣いに統一した。

本書の刊行までには、委員以外に各方面の方々から多くのご助力をいただいた。特に教養部の富田隆行講師、広報室の加藤幸雄氏、志賀雅二氏、井出由美さん、学生部の中村義彦学生課長補佐、割石公子さんには多忙の中、いろいろご無理をお願いした。また、原稿の浄書については、職員の御夫人がたの協力を得た。短時日に編集を終えることができたのは、これらの人々のおかげです。

病床におられる太田耕造学長が、一日も早くお健やかになられることを祈りつつ、本書刊行のご報告とする。

(昭和五十六年四月三十日 山本忠士記)

学長太田耕造先生講説集編集委員会

委員長 武部 啓 (学長事務取扱・理事)

委員 夜久 正雄 (理事・教養部長・教養部教授)

委員 梶村 昇 (広報室長・アジア研究所長・経済学部教授)

委員 鯉坂 芳文 (総務部長)

委員 千々和純一 (学生課長・厚生課長)

委員 山本 忠士 (留学生センター課長)

委員 岡部 篤厚 (広報室課長補佐)

委員 加藤 伸吾 (学長室係長)

創立四十周年記念

学長 太田耕造先生 講説

## 自助 協力

亜細亜学園学生に与う

昭和五十六年六月六日発行

発行者

亜細亜大学

日本経済短期大学

東京都武蔵野市境五丁目二四番一〇号

電話〇四三二一五四一三二一（代）

印刷所

株式会社 松井ビ・テ・オ印刷